

星の巡り主

びんころ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

永遠神剣シリーズに出てくる皆の妹ユーフィーちゃん。その弟になりました。

目次

エターナル歴25年目	1
25年目	8
26年目	14
29年目	21
30年目	28
30年目 出雲	34
30年目 出雲	41
33年目 XXXX	48
35年目 アガステイア	54
40年目 アガステイア	60
40年目 秩序	68
40年目 黒き刃	74
240年目	82
280年目 アガステイア	89
280年目 アガステイア 絶炎vs魔炎	96
280年目 アガステイア	103
281年目 アガステイア	110
281年目 アガステイア コアラな女	116
281年目 アガステイア	123
281年目	130
281年目 ハイペリア	137
281年目 出雲	144
281年目 出雲	150
281年	156

エターナル歴25年目

聖賢者ユウト。

永遠神剣シリーズ第一章『永遠のアセリア』という作品の主人公が、永遠神剣第二位「聖賢」と契約したことで至った、エターナルとしての姿。妻である、永遠神剣第三位「永遠」の契約者となりエターナルに至った永遠のアセリア。そして妻との間に第一子であり、生まれながらのエターナルという他に類を見ない存在である悠久のユーフォリアという少女を設けている。妻、娘、共に永遠神剣シリーズと称されるゲームにおいて章の名前を冠しているにも関わらず一人だけそんなことがなかったり。その両者の持つ永遠神剣の秘密の影響で「家庭内では肩身が狭いのではないか」などと言われることもあるが。

それでも、彼が主人公としてあった「永遠のアセリア」という作品の完成度と、そして彼の戦闘時の声によって根強い人気のある存在でもある。

そして、今となつては俺の父親という立ち位置に当たる存在だ。

「まさかこんなことになるなんてなー」

そんなことを呟いて、父さんたちが戻ってくるまで部屋から出るなと厳命されているので逆らつて外に出る、なんてことはせずに、椅子を動かして、その上に乗つて窓の外を見る。そこには

「うおおおっ！」

剣……永遠神剣第二位「聖賢」を構えてミニオン、あるいは彼らにとつて馴染み深い呼び方ではスピリットと呼ばれる永遠神剣の使い手としては最弱レベルの存在をまとめて切り裂く我が父……聖賢者ユウトの姿と

「はああああっ！」

その背中を守るようにしてミニオンを切り裂く母……永遠のアセリアの姿が見えた。

「おー」

その姿を見ていれば我が両親のことながら勇ましいという感想しか湧いてこない。いつか俺たちもあんなことをできるようになるん

だろうかと思うと今からすでにワクワクしてくる。魔法陣を展開してそこから彼の言葉を借りるなら一条の光が音速を超えて突き進み、ミニオンたちをマナの霧に変えていった。向かってくるミニオンへの対処を妻であるアセリアに任せて魔法陣を展開していた様は、お互いの中に信頼関係があるからこそできる光景だと戦いに疎い俺でもわかる。

すでにミニオンの残りは少なく、そしてそれでも気を緩めずに確実にそれらを倒していく我が両親。それを呆つと眺めていると、くいくいつと服の裾を引っ張られる感じがした。そちらに目を向けると蒼穹のような髪と黒目がちの瞳をこちらに向けて、身内鬣肩を抜いても十年分程度見た目が成長したなら誰もが放つてはおかなくなるであろう美貌を、「私、不満です」と見ただけでわかるほどにむくれさせた見た目四歳程度の我が姉、悠久のユーフォリアがそこにはいた。

「もー、ユーリばかり見ててずるいよー」

「わかってるってユーフィー。変わっていうんでしょ」

椅子から降りて入れ替わりながらも見た目通りの精神年齢を發揮しているユーフィーに視線を向ける。実際の年齢で言えばすでに俺たちは成人しているようなもの。けれど、俺とユーフィーは長い年月をかけて自分の見た目の年齢を引き上げていく。エターナルは概念情報を書き換えることで己の肉体を成長させるが、俺たちに関してはそれを当たり前のように行えるために、気がつけば成長していた、という普通の人間のようなことをエターナルの時間換算でやっている。

そして、それに伴ってかユーフィーの精神年齢は見た目相応だった。

「いつも言ってるけど『お姉ちゃん』でしょー」

「双子なんだからどっちが兄姉でどっちが弟妹でもいいじゃん」

双子。俺とユーフィーは双子で、どちらが兄か、あるいは姉かはわからない。でも正直なことを言うなら毎晩のようにセックスしている両親なのだからまた気がつけば弟、あるいは妹ができる可能性はそこまで低くないと考えている。なのでそこまで俺は気にしていないのだが、性に関する知識を遠ざけられているユーフィーはそんなこと

を思い浮かばないらしい。

「パパとママすごいねー」

「まあ、父さんたちだしね」

ユーフィーの視線は固定されている。けれどそれに意識の全てを奪われるわけでもなく、俺にも声をかけてきて同意を求めてきた。一応、今の俺も見た目的にはユーフィーと同じで五歳程度なので椅子がないと外が見えないのだが、そんなことにすら思い至らない我が姉の姿に苦笑しながらも、いずれは俺たちも行うことになる戦闘を目に焼き付けようと、もう一つ椅子を持ってきてそれに乗って両親の勇姿を見続けている。

「はあー……すごいなあ」

「うん。パパもママも全く怪我してないもん」

「俺もあんな風に戦ってみたいなあ……」

「えー、ユーリには無理だよー」

思ってもないことを呟いたところ、すぐにユーフィーに否定される。血の繋がった双子だからか、ユーフィーは俺に対してだけは敬語なんて使わない。そんなユーフィーに何をバカなことを言ってるの、と言うような視線を向けられる。いや、確かに理由はわかっていても、男の子に生まれたからには物語の勇者のように戦ってみたという願望を抱く程度のことには許されるのではないだろうか。俺の覚えている限りではどうやら生前の俺はそういう特撮や小説などの現実には存在しない主人公のような存在に憧れがあったのだ。

「だって……」

ユーフィーが巨大な槍剣を呼び出す。彼女と契約している永遠神剣、第三位「悠久」だ。彼女と生まれた時から共にある永遠神剣。生まれながらのエターナルであることを証明するための一品。両親、そして双子のユーフィーの三人が持つ永遠神剣は、神剣の名に違わぬ「剣」としての役割を果たすもの。けれど俺のそれに関しては。

「ユーリの永遠神剣って剣の形してないでしょ？」

そう、そうなのだ。

俺にも生まれながらに持っている永遠神剣はある。けれどもそれ

を呼び出すことはどうしようもなく不可能。体内に意識を向ける。イメージとしては己の心臓から送り出され、そして戻ってくる血流。それに伴い俺の肉体に力が張ってくる。それはユーフィーが永遠神剣を呼び出したのと同じように、俺の永遠神剣も稼働し始めたことの証左。

これこそが俺の永遠神剣。名前を星辰。位は第三位。心臓、並びにそこから送り出される血流と融合している永遠神剣である。

そう、今の俺は。

心臓型永遠神剣。永遠神剣第三位「星辰」の担い手。エターナルの巡航者”ユーリ。

そんな、名前なのである。



永遠神剣シリーズ。それはXuseという会社から始まったシリーズであり、第一章である『永遠のアセリア』、第二章である『聖なるかな』と続いたが原作の脚本がいなくなったために続かなくなり、発売からかなりの年月が経ったところで原作の著作権が脚本の人に移ったために第三章『悠久のユーフォリア』の開発が始まった。そんな、結構長いこと続いている十八禁のゲームである。

シリーズで続いているくせに設定変更があつて一位が存在しなかったり存在したり、エターナルと呼ばれる上位存在は通常の神剣使いでは敵わないと言われているくせに原作に登場するプレイヤーブルキャラの中で一番位階の低い永遠神剣の持ち主がエターナル相手に勝利できるレベルの存在になったり。テキスト面や設定面では、探そうと思えばおそらくは粗をかなりの数見つけられるであろうシリーズ。

けれどそれでも十八禁の「紙芝居」と揶揄されるような形式とは違う、プレイヤーが考えて戦闘を行うゲームであり、難度が高いことで

も知られているそれは、かなりの人気を誇っていた。

でも、だからと言ってこの世界に関する知識を持つ身としてはこの世界に転生したいか、といわれると疑問はある。少なくとも俺はこんな「空間を切り裂く」「時を遡る」なんてチート能力を持った連中がポンポン存在している世界に生まれ変わりたいとは思わなかった。

俺がこの世界に生まれ落ちて最初に見たのは、特徴的な髪型の父親と俺を抱く日本人にはありえないであろう髪色の母親の姿、そして隣でギャン泣きしている姉。生まれた後の最初の行動としては泣くのが正しいのだろうけれど、その姿に見覚えがありすぎた俺は、当時はまだ今のように俺の意識がこの肉体に定着しきつていなかったこともあって赤子としての精神が体を支配してギャン泣きしていたにも関わらず、一瞬この肉体に影響を及ぼすレベルで動揺していた。具体的には泣くのが止まるレベル。

今の時間軸としてはユーフィーが産まれたたてであることから「サードステイネーション」が終わってから「永遠のアセリア、アセリアルートエピログ」が始まるまで、ということとは予想がつく。確かあのタイミングで戦いから二百年。そして俺とユーフィーが産まれてから二十五年が経っているが、未だに彼らをエターナルへと導いた倉橋時深と出会ったこともなければ、父さんがユーフィーに「時深おばさん」と呼ぶように教え込んでいる姿を目撃したこともない。だから、もうちよつと後の時間なのだろうけど。

それからしばらくすれば俺たちもエターナルとして戦場に出ることになるのだろう。

幼少時代の時点で、カタログスペックだけでもチート能力が設定されている連中と戦うことが決定しているエターナルとかいう生まれはクソすぎる。

だからと言ってこの世界で一般人として産まれても、それはそれで常に世界ごと殺されるかもしれないという恐怖に怯えないといけないのでクソだ。

結論、この世界はクソすぎる。

「どうすつかねえ……」

そうこの世を嘆いたのが五年前。どうかにかして戦場から逃げ出したいけれど、逃げ出しても結局この世は地獄であることに変わりない。進めば（わかりやすい）地獄、引けば（潜在的な）地獄。こんなふざけた世界で生きていくのが嫌になることも多いが、だからと言って自死を選べるほどに俺は強いわけでもない。結果、色々と限界になって両親がいな隙に一度逃げ出した。

その時に見たのだ。美しい、地球では絶対に見られなかったであろう光景を。

思っただの、それを見て。こんな光景を見られるのであれば転生したことにも意味はあったのでは、と。

そう思えばこそ、俺のやりたいことは決まった。どうせクソなら、せめて良い部分だけ見ていたい。だからとりあえずエターナルとの戦いからは逃げる方向性で旅をしよう。もつと大きくなってから出ないと両親から探し回られて面倒なことになるだろうが。

旅をして綺麗な景色を見てこよう、と決めた。

旅をするために必要となるであろう、ミニオンあるいは神剣使い。それらには負けない程度の実力を身につけることは必須だろうが、逆に言えばエターナルとなったことにより得た食事などをしなくても良い体があるためにそれだけあれば十分。俺の永遠神剣の特性上、殴ればだいたいどうにかなるので、敵をいかにして殴り飛ばすかだけを考えてきた五年。そろそろ近場ぐらいであれば問題ないだろうか。

五年前には任務で両親——とは言っても母さんは怪我があったので実質父さん一人だったが——が出ないといけない事態になったので、俺たちもその時ついでに行つた世界での出来事だったのだが、今回に関しては俺たちの家がある世界でのこと。慣れ親しんだ近場を、未だ見たことのない部分を求めて旅散歩することだが、それはそれで子供のお遊びとして見られるから、近い将来本当の意味での旅をする時にも同じ言葉を使えば騙されてくれて多少は時間を稼げるだろう。

ガチャリとドアノブが回される音がする。父さんたちが帰ってきたのだろう。椅子を戻し終えて、父さんたちが部屋に入ると同時に

外に飛び出せるように、走り出すための用意をする。

「ただい——」

「おかえり！ 二人とも！ ちょっと散歩行ってくるね！」

「ま……う？」

外に飛び出す。エターナルとして生まれたことによつて、無意識に戦闘を行うための肉体として成長を続ける肉体を、今己が引き出せる力の全てを持つて。

——そう、今から俺の一日だけの旅路が始まる。

帰ってきた後に怒られることになるのは未来のための投資だと割り切つて。何度も繰り返し返していればおそらくは子供特有の遊びたい盛りだと思つてくれるはずだから……！

25年目

両親の間を抜け出て外に飛び出し、そのまま心臓と融合している永遠神剣を動かして身体能力を一気に引き上げる。そうして上がった身体能力を解放して、地面にクレーターを作りながらも空中へ向けて跳び立った。

この動き、実はエターナルがやろうと思ってもなかなかできないらしい。歴戦の勇士であつても、あるいは成り立ての未熟者であつても。歴戦の勇士であればそもそも力の伝達が完璧でありクレーターを作り出すことはなく、未熟者であれば二位、三位問わずに契約者が発露する力は俺のそれには及ばないために、クレーターを作つてもそこまで大きくないのだ。そういった点を鑑みるに、つまりこれが俺の永遠神剣の単一仕様と呼んでも良いのかもしれない。

永遠神剣、と呼ばれるものは上位になればなるほど固有の能力を持つものが増えていく。それは例えば俺の父親が持つ「聖賢」の、「聖賢の知識に契約者が接続することで、莫大な力を発揮できるようになる」という見た目にはわかりづらいもの、俺の母親が持つ「永遠」の「世界の外への門を開く力」といった、能力としてはわかりづらいものの結果はわかりやすいもの。そして俺が出会ったことのない倉橋時深の持つ「時逆」の「時間移動」といったもの。ロウ・エターナルの首魁であるミューギイの持つ「宿命」の「思ったことを現実に反映する」。そんな強大すぎる代物まで。

逆に、かつての父さんの友人である碧光陰の持っていた永遠神剣「因果」のように特殊な力を何も持たない永遠神剣も存在する。こういう神剣の多くは下位神剣であり、上位神剣で言えば、俺の知る限りではユーフィーの持つ「悠久」、そして父さんがエターナルとなった戦いで敵対していたロウ・エターナル、法王テムオリンの持つ「秩序」に関して俺が俺の記憶にあつた限りでは描写された覚えがない。

そういうわけで、俺と話をしてくれない「星辰」のせいで自分で色々確かめることになり、五年の間で色々なことを推測できた。「知ることができた」ではなく、「推測すること」程度しか結果を残せなかつ

たのが痛かったが、けれど今日の旅路……以前ユーフィーが母さんと一緒に行ってきたという花畑に向かう程度であればそれでも問題ない。

まず、俺の永遠神剣である「星辰」は異常なレベルの身体強化を行える。第三位であるにも関わらず、その神剣の強化具合は二位の契約者である父さんのそれをはるかに上回る。それこそ、神剣魔法で強化した父さんすらも。さすがに一位の契約者であるローガスやミュージイには敵わないだろうが、それだけでもかなり強くなった気分だ。

次に、俺の肉体の強度を底上げしてくれる。具体的にはユーフィーが取り出した「悠久」をマナ剣状態にしてぶんぶん振っていても俺の肉体にその刃を通すことはなかった。父さんたちだとこの辺り防御する必要があったので、おそらくはこれも固有能力だと思われる。

これらの固有能力を持つ代わりに、俺の神剣はゲーム的にならサポートスキル、現実に即した言い方をするのであれば神剣魔法と呼ばれる類の補助、あるいは攻撃用の魔法の一切が使用できないことも確認できた。幸いというべきかマナの操作そのものは血流をマナが強化している影響で、己の第六の感覚器官と呼べるレベルでできたので、デيفエンススキル……防御用のオーラフォトンを展開して体に纏わせることはできたので、神剣魔法として展開することだけができないのだと判断した。

これ以上のことは自分で考えても、というよりも「星辰」が教えてくれるか、かつて「星辰」と——いたのか知らないが——契約していた者の知り合いに聞かしかないだろう。だからこれ以上は考えない。というかこの世界、本当にカタログスペックだけがすごくて、ゲーム的な都合とはいえスピリットと呼ばれる存在ですらエターナルを倒せてしまうという現実だけが存在する。長年戦い続けてきたタキオスを、「聖賢」と契約したての父さんが倒せたりといった部分も含めて。だから、能力に関しては「そういうものもある」とだけ考えたほうがいいだろう。

まあ、俺の能力はこれ以上考えてもわからないのでしようがない。しようがないから今は両親に捕まらないように目的地に行きやすい

という身体能力にのみ感謝しておけばいい。

空に飛び上がったところで地上に目を向けると、ようやくフリーズから解除されたのか外に飛び出してきた両親の姿が見える。そんな両親が俺が跳び上がる時に作ったクレーターを発見して、空中に浮いている俺を見つけるまであと数秒と言ったところか。空中に跳躍したことがバレれば、母さんがウイングハイロウを展開して空を飛ぶことで捕まえに来る。

なのでそれよりも早く空気を蹴り飛ばし、少し離れたところに見える花畑の近くに狙いを定めて一気に流星と化して落ちていく。

「さあ、目的地は近いぞ」

とは言っても、そこにたどり着いたからと言って何かあるわけではない。できたとしても花を摘んでいく程度。だからと言って何もしないというのも怒られる理由を増やすだけでしかないだろう。「ついさっきまでミニオンがいたから危険なのに」という部分がおそらくは今の両親の怒りのポイント。それならば「ミニオンの危険があるにも関わらず外に出なければいけなかった理由」をでっち上げる必要がある。それがあれば多少は怒りも小さくなるのではないかと思われる。「でも、どうするかねえ」

もうちよつと考えておけばよかったと少し後悔している。とは言っても両親の親バカ具合を考える限り、あのままだとさらに数年は外に一人で出してもらえそうになかったのだから、両親がわずかにとはいえ疲労しているあのタイミングで抜け出すしかなかったという事実もある。ぶつちやけた話、一人で外出することに全力を賭けていたせいで何も考えていなかった。

「とりあえず、花を摘んで帰るか」

花を摘んでしまえば、そこに両親に渡す何かしらの理由づけを適当にすればいい。思いつかなかったら思いつかなかったでユーフィーが以前持ち帰ってきた花のお返しということにでもしておくか。

まあ、まずは

「そこらへんにいるミニオンの処理をしてからの話だよな」

降り立ったところは森の中。花畑が森の奥にあるから当然のこと

といえば当然なのだが、こうして森の中であれば両親がすぐに発見できるといふことはないだろう。そしてそれは同時に、両親が処理しきれなかったミニオンが隠れ潜んでいる可能性もあるということ。近くにいた俺だからこそその存在に気づくことができたのだった。

「じゃ、初戦闘……いや、狩りか？ まあとりあえず殲滅を始めよう。こんな程度の雑魚に負ける気はしないし」

ぞろぞろ湧いて出てくるミニオンたち。こいつらを倒してマナを吸収すれば強化に繋がりそうだな、なんて思うが、よくよく考えてみればここでド派手に戦ってしまえば両親にバレてしまう。

じゃあ、とつと殴り殺さない。俺が両親に怒り殺される。

「はい、どーん」

なんとなく気の抜ける声を出しながら、地殻変動を起こしうる威力を持った拳を第三宇宙速度という埒外の速度で移動しまくって叩き込んでいく。一撃で人間のような見た目の存在の体のどこかに拳大の穴が開いていく光景はグロテスクなことこの上ないのだが、それも倒れるよりも先にマナの霧に帰ってしまうので死体が残ることはない。それを吸収して未来、旅に出た時のための貯蓄としていく。俺たちの肉体はマナさえあればだいたいどうにかなるのだから。

もはや局所的な嵐と呼んでも差し支えがないであろう被害をもたらしながら殲滅を実行していく。だいたい十数人程度を顔面、胴体、腕、様々な部位を消しとばして殺すことで、そのマナを吸収し終えた。そこまでするかかった時間がだいたい一分程度。無駄に時間を使った。ちよつと急いで先に進もう。

そうしてたどり着いた先は、まさしく絶景と呼べる光景だった。

「おおー」

怒られることになるかわかっていても、この光景を見られたのならチャラだと思ってもいいかもしれない。それほど光景。黄金の花が風に揺れ、それによって生み出されるさざめきが耳朶を震わせる。前世では絶対に見られなかったその光景は、どこか俺の身に活力を与えてくれるようにも感じるが、そんなものは幻想。すぐに将来のことを考えてブルーになってしまう。

これ以上は考えるな。考えたら自害したくなる。でもそんなのは怖いから結局恐怖に震えるしかない。そもそもが敵対する連中のチートっぷりを考えたら、何をどうしても意味がないんだ。対策を考えることにも意味はないし、ただただ逃げ惑うだけしかできないんだから。……俺はユーフィーのように戦う気概は持てない。人間だった頃の父さんのように戦うに足る理由もない。母さんのように戦うのが日常だったこともない。

俺は所詮はただの人間で、ミニオンアリ相手なら強気に出て虐殺をすることに何も思わないけど、刃物エを持った人間相手ナに戦おうという気にはなれない。

「さーて、どの花を摘んで帰るか」

いや、全部同じ種類なんだが。

ついでに言えば俺には花の良し悪しなんてわからないのだが。

「あつ……」

そうだ。思い出した。そろそろ俺の誕生日だ。というか以前この時期にユーフィーが行って来たというのも俺の誕生日に花冠を渡すためだったような気がする。……うん、よし。今日理由はこれで決まりだな。二卵性双生児な俺たちの誕生日は同日。ユーフィーは綺麗な花が好きだったから俺に花冠を渡して来たわけだし、俺もそれに合わせてユーフィーに花冠を渡すためにここに来たということにしよう。

そんなことを考えて花を摘み始める。何も考えず、将来の絶望からは目を逸らして。

だからだろうか、彼女の存在に気がつくのに遅れたのは。

「あら、まさかこんなところで出会うなんて。人生、何があるかわかりませんわね」

声が聞こえて来た方に振り向く。

それは童女の姿をしていた。全身が真っ白な服装で整えられており、どういう理屈かはわからないが永遠神剣の反応が存在する杖に乗って宙に浮いている。何があるかわからないと言いながらも、どこかで予期していたのかその表情に驚きはない。

俺はその存在を知っていた。けれど、なぜ彼女がここにいるのか。それがわからない。

その人物の名は

「初めまして。私はテムオリン。あなたの両親の知り合いですよ」

“ 法王 ” テムオリン。かつて俺の両親がエターナルとなった戦いにて、敵の首魁であった、ロウ・エターナルの一人だった。

26年目

「何があっても生き残れ。たとえそれが世界の全てを敵に回すことになっても」

父さんから常日頃言われている言葉だ。俺の武器は剣ではなく五体。だからユーフィーのように母さんから剣技を受け継ぐことはできず、けれど父さんの考え方を学ぶことはできた。……父さんの覚悟までは学ぶことはできなかったが。

そうして学んだことを考慮した結果、俺はあの出会いから一年経った今も「テムオリンと会う」という選択肢を取り続けていた。

「今日も来ましたね」

「おう、来たぞテム」

この選択をした理由は単純。「俺が彼女のことを知っている」ということを今はまだ彼女に知られていないだろうから。彼女からしたら俺が彼女と会わなくなる理由は存在していないからだ。別に大した情報は得られていないが、だからこそ俺は今までに得た情報からでは「テムオリンがロウ・エターナルであること」すらも知ることはできていない。敵であることすら知っていないのだから、ここで急に出会わないという選択肢を取るようになったら相手に余計な情報出会えない理由があると教えるを与えることになる。

「……いつも言ってますけど、私はあなたよりも年上なのですから多少は敬いなさい」

「えー、でも俺よりちっちゃいじゃん。せめて俺に身長で勝つてから言うんだな」

「急に会いに行つて驚かせたいから両親には内緒にしておいてほしい」という頼み。それを守ってはいる。この喋り方もテムという呼び方も、もう終わったなと思って破れかぶれだった頃に、どうせ死ぬのだからと誰もやったことないようなことやつてやろうと彼女が怒るか怒らないかのラインを探った副産物。呼べるようになってしまったのなら、喋り方も楽なものを選んでいいのなら、わざわざ本来の喋り方を隠す必要も、本名で呼ぶ必要もなく。

「で、どこに行くんだよ今日は」

俺が彼女と出会ってからすでに一年。その間にこの時間樹限定ではあったが様々な場所に連れて行ってもらった。多分、何かしらの計略は存在するのだろうが、その辺りは俺の知ったことではない。テムの考えていることなど天才すぎて理解できないのだから、俺が何かしら考えても意味はない。生き残ることが目的なのだから、藪をつついて蛇を出す必要なんてないのだ。

「今日行く場所は……」

名称を聞いて、よしと立ち上がる。

「それじゃ行くか!」

「別にいいですけど……あなた、場所を知っていますの?」

「あ……」

はあ、とため息をつかれる。

「ほら、行きますわよ」

彼女も立ち上がって俺よりも前を歩き始める。その後をついて行きながらも法王と呼ばれる敵の首魁であるにも関わらず、なんと面倒見のいいことだと感心していた。これも策略のうちなのだろうか。……ああ、いや、考えるな。別にこれがどういう思惑で行われているにせよ、最終的には巻き込まれそうになったら逃げるだけの話なんだ。だったら今を楽しむだけ楽しんで最終的にはさらばだーすれればいい。

敵対したら、殺そうとしても殺されるだけのことなのだから。



「ねえ、ユーリ。最近、どこに遊びに行ってるの? あたしと一緒に遊ぼうよー」

それは、とある日の夜のこと。その日もテムに見たことのない場所にまで連れて行ってもらって、そして帰ってきた後の話。夕食の席で

ユーフィーがいきなりそんなことを切り出してきた。何を言ってるんだこいつという顔で見ると、そつちにはつまらなさそうに頬を膨らませたユーフィーが。父さんと母さんに視線を向けると、父さんは苦笑していて母さんはいつも通り何を考えているのかわからない。ユーフィーは子供なのだから弟がいなくて一人ぼっちで過ごしているのは退屈なのだろうとあたりをつけるがそれがあっているかどうかなんて知ったことではない。

「別にどこでもいいだろ、俺がどこに遊びに行っても関係ないじゃん」「むー。お姉ちゃんのこと聞きなさーい」

「ユーフィーに教えないといけない理由なんてないだろ」

「い い から お し え る のー!」

肩を掴んでガクガクと揺らしてくる。それを振り払って、教えるつもりはないという意思表示。ユーフィーが仏頂面になっているが、それでも今この場でテムの存在を知られると両親の反応が怖い。いや、俺が両親とテムの関係を知らないことになっていることを考えれば、逆に教えないことの方が不自然……でもないか。テムからは隠しておいてほしいって言われているわけだし、エターナルとしての時間換算でいえば一年なんて人間で言う所の一秒程度でしかないだろう。少なくとも俺とユーフィーの年代だったら『友達と一緒に親に隠し事』なんてやっててもおかしくなさそうだし。テムがどのタイミングでバラすつもりなのかは知らないが、この二人に一番ダメージを与える形でバラす、程度のことしか俺には思いつかない。

「危なくはないんだな?」

「そりゃね。弱っちいけど、それでも一応エターナルだよ? 身体能力だけでいうなら父さんより上だよ? そんな危険なことなんてポンポンあったりしないよ」

“法王”という厄ネタを除けば。

「うん、それならいいんだ。ユーリが無事なら」

「ん……ユーリに怪我がないのが一番大事」

父さんと母さんからはそんな言葉が。ここで“法王”と一緒に遊んでる、いや遊んでもらってるのか俺の場合? まあとりあえず日常

を彼女と過ごしているという事実を両親に知られたら一体どんな反応が返ってくるのだろうか。気にはなるけれど、ここでバラしてしまえばこれまでにテムとの間に築いた脆すぎる信頼関係が崩れ去ってしまう。元から存在しないだろとか言っではいけない。

「明日もちよつと出かけてくるよ」

「うん、気をつけるんだぞ」

「……お弁当か何か、作る？」

「大丈夫。午後から出かけるし」

この会話をしていた時、両親に黙っている罪悪感からだろうか。俺は気づいていなかった。

「むう……」

ユーファイが、無視されたことに対してお怒りの表情を見せていたことに。

そしてその翌日、事件は起こった。

「うーっし、今日も今日とて色々巡ってみるか。……ってなんだよ、その目は」

「いえ、なんでもありませんわよ？　ただ、思えばこの付き合いももう一年になるのかと思っただけです。なかなか貴方で遊ぶのも楽しかったから、少々時間の流れを早く感じたのです」

「俺で」

「ええ、貴方で」

「……まあいいけど」

俺の友人である“テム”はそういった一面を隠しきれていなかったし、そもそも知っている俺でなくとも見抜けそうな程度には言葉の節々にそういった面が現れていたことから考えれば、最初から隠す気なんてなかったのだろう。カオス・エターナルの敵である“法王テムオリン”として、“言葉の節々に本性が現れているテム”という役

柄を演じていたと考えた方が普通だ。

「……私が言うのもどうかと思いますが、初めてできた友人だからと言って、遊ぶおもちゃとして見られている現状を変に思った方がいいんじゃないのですの？」

「うーん……そりゃ普通に考えりやそうなんだろうけど。テムは俺より頭いいし、俺じゃ思いつかないようなことを色々教えてくれるから。テムが俺を楽しませてくれて、俺がテムを楽しませるって考えれば普通の友人と何も違わないんじゃないかね？」

「……貴方がそれでいいのでしたら、それでいいですけど」

テムが顔を背ける。よくよく見れば微妙に頬が赤くなっている。照れているな、よし、煽るか……なんて思えば楽だったのだけれど、これすら『テムオリンが描いている計画の途中段階で予測されていたこと』なんて一見ありえなさそうなことが現実で起こり得るのがテムの頭のおかしいところ。つまり最初から煽られる可能性をも考慮しているのであれば結局テムに対して特に大きなダメージが与えられない。『最初からそうなることを計算しつくしている』という可能性を捨てきれないこの幼女に対しては、どんな行動を取っても『ええ、知ってました』なんて言われておしまいな未来が待っていると思えてしまう。

だって、出会ったことのない父さんの行動まで全部作戦に組み込んで、さらにはどの神剣の持ち主が最後まで勝ち残っても問題ないようにしたのが『永遠のアセリア』というゲームだったわけだし。

ちよつとコアらしい加減にしろ。

どう反応するべきか悩んでいると、立ち直ってしまったテムが何かに気がついたようで。続いて俺も後ろの木陰に誰かの気配を感じた。

「誰のですの？」

「ちよつ!?!」

いきなりの神剣操作。「秩序」にマナが集ったかと思うと下位神剣が大量に出現して、それがそのままただの樹木一本を粉碎するためだけに叩きつけられる。そこにいた人物も死んでしまったのではないかと疑うような剣雨の跡に、けれどそこには一つの人影が残った。目

前に存在する樹木だったものを見て、それでも腰を抜かすこともなく、防御に使われたであろうオーラフォトンの燐光がそこには舞っている。

「ユーフィー!?　なんでこんなところに……」

「あら、貴方の知り合いでしたの……?」

むすつとしているユーフィーの姿に驚いて。なぜこんなところにいるのかということ。そしてなんでそんなに怒っているのかということ。その二つに対する驚きが後から来た。テムは未だにユーフィーに関しての調査は終わっていなかったのか、それとも知らないふりをしているだけなのか。いや、初対面の俺に対して「両親の知り合い」なんて言えたんだから、俺の家族構成は調べてあるはずだ。わざわざそこを隠す必要はない。だったらどうして……

……ああ、いや、それは別にどうでもいいのか。

こんなことを考えてもテムオリンの狙いなんてわからないし、わかったところでどうするつもりもなければどうしようもないんだから。

「どうしたんだよ、こんなところまで来て」

少々考えが甘かったのかもしれない。

つかつかと歩いてこっちにまでやって来たユーフィーに尋ねれば、その表情が怒りのそれだとよくわかる。これまでに見たことがないほどに、俺とは違って良い子のユーフィーは怒り猛っていた。

「この人が、ユーリの友達?」

けれど静かに。嘘は許さないというような冷たい声。俺も、おそらく父さんたちも聞いたことがないであろうほどにブチギレたユーフィーの声だった。もともと嘘をつくつもりはなかったが、父さんたちの知り合いらしいけど驚かせたいから内緒にしててなんて頼めそうにないぐらいに恐ろしい。故に頷く。テムも……エターナルの年齢で考えればの話だが……生まれてそこまで経っていないユーフィーがそれだけの鬼気を纏っていることに少し驚いているようだ。

「こんな、いきなり人に向かって神剣の群れを叩きつけるような人が

？」

「あら、何もおかしなことではないでしょう？ 友人の後を尾行している何者かがいて。その人物からは高位の永遠神剣の反応が滲み出ている。友人が付け狙われているのではないかと心配するのはそんなにおかしなことではないでしょうに」

なんだか今、テムの発言にちよつと涙腺が緩んだ。“友人”と呼ばれたことに。

たとえそれがその場の虚飾でしかなくとも。それでも彼女が“友人”と呼んだのだから。どうやら俺は彼女のことを友人と思つていたらしい。

やはり年の功ということだろうか。ユーフィーが色々突っかかっているけれど全て論理的に封殺されている。できれば個人的には早く移動したいのだが、今このタイミングでそんなことを切り出せる雰囲気ではない。けれど先の神剣叩きつけ——俺の予想が正しければゲーム内のアタックスキル『秩序の杖』——によって発生した神剣反応が父さんたちにバレた可能性だつてある。そうなるこの場がさらに混沌とする可能性が高いので、やっぱり早く離れたい。

「二人から離れろっ！」

……ああ、遅かったらしい。神剣反応を感知したと思ったら、次の瞬間には父さんと母さんが俺とユーフィーの前にそれぞれ立って“テムオリン”からかばうように永遠神剣を構えている。

その事実には、この密会は今日で終わりなのだど理解した。

29年目

“法王”テムオリンと会っていたことが両親にバレてから三年。テムと出会ってからの換算ではだいたい四年。

俺は今、

「ひーまー」

両親によつてほぼほぼ軟禁状態にされていた。

「しようがないでしょー。ユーリはロウの人に狙われてるみたいだし……」

「そうはいってもなー」

ご飯、お風呂、お出かけ、就寝、挙げ句の果てにはトイレまで。全部誰かしらがついてくるのだ。トイレは扉の前までだけど、個室内も換気扇があるだけで窓がない。基本的にはユーフィーがずっとそばにいるのだが、いい加減この生活も疲れてきた。ロウに狙われているから一人にはできない、というのは一つの真理なのだろうけど、そのせいでどんどん逃げ出したいという欲望が溜まつていることをあの人たちは気づいているのか、いないのか。今も、母さんがリビングにいて、父さんは買い出し。ユーフィーと一緒に部屋の中にいるせいで一人になれる時間がない。閉塞感がやばい。そろそろ脱走を考えないといけない頃合いか。

「うん、大丈夫。ユーリは何も心配しないでいいんだよ。ちゃんと全部お姉ちゃんがどうにかしてあげるから。ユーリを狙うロウも全部、^{ぜんぶ}全部倒して、ユーリがちゃんと一人でも歩けるようにしてあげるからね？」

あれ、と思う。ユーフィーの瞳に少々どろつとした濁った何かが見える。というか発言が恐ろしい。気づいてしまえば最後、考えるよりも早く部屋を飛び出してリビングへ。今のあいつと二人きりでいたら殺られる。そうでなくとも何か大事なものを失ってしまう。そんな予感が脳裏をよぎり、生存本能に従って母さんのいる場所へ。さすがにそこでは何もしてこないだろう、という希望的観測に従って走り出す。

「もー。一人でいちやだめって言われてるでしょー?」

知っている。でもどう考えても今のユーフィーと二人きりの方が一人でいて口ウに攫われるよりも危険があると思う。ほぼほぼ転がり込むようにしてリビングに突入する。そこにいた母さんの姿を認めてすぐさま抱きついた。

「ん。どうした、ユーリ?」

一瞬面食らっていたが、母さんは抱きついた俺の背中を撫でて落ち着かせようとしてくれる。見た目では俺の方が下だから微笑ましい絵面にしかならないのだが、落ち着いてくると前世の自分が普通に成人男性であったこともあって母さんに抱きついていてはなはずの現状が、とてもやってはいけないことをやっている気分になってきた。でも、だからと言って母さんが落ち着かせようとしてくれているという事実がある以上、この人の厚意を無下にするような行動も間違っている気がする。

「あ、ママ! ユーリばかりずるい!」

だから、こうなるのは必然だった。

俺を追いかけてきたユーフィーが、俺が母さんに抱きついて、そんな俺のことを母さんが抱きしめて背中を撫でてくれているという状況を発見した。

恐ろしい。正直言ってさっきのユーフィーを見ると母さんにすら手を出すのではないかという思いを捨てきれない。さっきの言葉すらもただの擬態ではないかと恐ろしくなってくる。けれど俺のそんな恐怖は言葉にしてもないのに届くはずがなく、母さんもユーフィーを受け入れてそのまま俺とユーフィーが揃って抱きしめられることになった。

「はふう……」

こっそりと横を見てみると、ユーフィーは落ち着いているように見える。……大丈夫? 擬態じゃない? 今この瞬間に「悠久」を取り出して母さんをぐさつとやったりしない? そんな、絶対にありえないであろう想像すらもありえないと断言できないほどに先ほどの光景は衝撃的だった。

「何があつたかはわからないけど、そんなに怖いものを見たのか？」
ええ、今も俺の隣にいます。

なんて言えるはずもなく。ただ母さんの問いに頷くだけ。そんなことをすればどうなるのかなんてわかつてわかつていっているというのに。

「ユーフィー。お姉ちゃんだからユーリを守るんだぞ」

ああ、やつぱり。当たり前前に考えればこうなるよな。だってユーフィーは普段から『自分が姉』と主張し続けているんだから。でも、さすがに大丈夫だよな？ この状況だから変なことを言いだしたりしないよな？ 過激な発言とか出てこないよな？ それが、とても心配だった。

「はい！ ユーリのことは絶対守ります！ 絶対、絶対。^{ぜえーつたい} 誰にも触れされたりしませんよ」

結果、ほんのりとあの濁りが出てきた目でユーフィーは宣言する。まるでそれでは俺がユーフィーの所有物のようではないか。彼女に守られ、彼女によって害するすべてから遠ざけられ、それでは家畜と何が違うのだろうか？

逃げよう。

逃げないとこれは絶対やばいやつだ。ロウに捕まるかも、とか実はこれで俺が逃げ出すのをテムオリンは見越して待っているんじゃないか、とか。そんなことを考えていたらきつと一生をユーフィーに管理し続けられる。それだけは、確信があつた。

「ただいまー」

そんなタイミングで父さんが帰ってきた。これで少しは落ち着いてくれるといい……というよりも母さんは天然だったから気づいてくれなかったけど、父さんならあるいは気づいてくれるかもしれない。きつと、俺とユーフィーを二人きりにはしないだろう。そんな希望が湧いてきたところで父さんも部屋に入ってくる。

「お、ユーフィーもユーリもいたのか」

「……父さん。おかえり」

「パパ！ おかえりなさい！」

さすがに今のユーフィーと、そしてその変化に気づいてくれない母

さんの三人でいると辛い。気が滅入る。助けて父さん。
「ん？」

父さんがユーフィーに視線を向けた時に、何かに気づいてくれたらしい。サンキュー父さん。サンキューファーザー。あなたに対してこれから足を向けて寝られません。どうかしてユーフィーをなんとかしてください。そしたら永遠にあなたを崇め奉れそうです。

「ユーリ、何かあったのか？」

なのに、聞いてきたのは俺の方。違う。そうじゃない。俺じゃなくてユーフィーの方って言いたいところだけど。俺がユーフィーに恐怖を感じているのも確かなので俺の方に何かあったというの間違いではない。口に出して言いたいけどその場合のユーフィーの反応が読めなくて怖いし。

「ううん。なんでもないよ。ただちよつと嫌な夢を見ただけ」

結果、こんな風に誤魔化すことに。



「はあ……」

その日の夜。恐怖からか寝つきは悪かったのだが、どうにか眠りについてからしばらくして、ユーフィーはどうやらトイレに行っているらしく、普段一緒に使っているベッドの中には俺一人だけだった。とは言っても逃げ出すのは不可能。そこに「悠久」がおいてあるのは監視の役割なのだろう。だから、逃げてみてもすぐに伝わってしまう。両親が以前からさらに警戒をしているせいでそんな簡単には逃げ出せない。

だから、今回のイベントは一体何か。それを考えることで時間を潰してみる。幸いにも今回の一件に関してはそれっぽいイベントを知っている。少しぐらいなら時間つぶしにもなるだろう。

今回のこれが思っている通りのものであれば本編のイベント的に

「寝ている間は裸になる」というイベントの原因である、両親のセックスを目撃して「暑かったから裸になった」という母さんのごまかしを信じてしまうやつだろうか？ あれがいつ頃なのかは知らないけど、今はまだそんなことになっていないからもう少し後のイベントだったのだと思っただけだ。」

「あれ、ユーリ起きてたのー?」

寝ぼけ眼のユーフィーが戻ってきた。目をこすりながら部屋に戻ってきたユーフィーは、俺が起きていて、なおかつちゃんと部屋の中に留まっていたことに満足そうに頷いて、ベッドの中に潜り込もうとしてくる。その身には未成熟にすぎる肉体を覆い隠すためのパジャマを着ていて、今回はそのイベントではなかったのだということに理解できた。

「お、おう。ユーフィーがいなくなったからか少し風通しが良くなったな」

ビビっているのを無様とは言わないでほしい。これまで見たことのない表情を先ほど見せたユーフィーが恐ろしいのだ。けれど俺がビビっているのはユーフィーにはわからなかったみたいでなぜかえへへと笑っている。

「あ、そうだ。ママがねー。暑いからって裸で寝てたの。一緒に寝ると暑いし、あたしたちも裸で寝よー?」

「……暑いんだっいたら一緒に寝る必要はないんじゃないかな?」

できる限り慎重に。彼女を刺激しないような言葉を選んでその方向に持って行かせるのをやめさせる。何が悲しくて自分の双子の姉、あるいは妹と一緒に裸で寝ないといけないんだ。俺は裸族ではない。というか例え裸族でも、わざわざ一緒に裸で寝る姉弟って色々とおかしいだろ。

「だめだよー。ユーリがどこかに攫われたりしないようにあたしが守るんだから……ぐう」

「ああ、ほら。もう寝そうじゃん。とつとつとベッドに入って。って脱ぐなー!」

ユーフィーを寝かせようとしたら、なぜかそのままほいほいと脱ぎ始める。全て脱ぎ終わるまでにだいたい十秒もかからず、そのまま俺を引きずりこむようにベッドに入り込んだ。しかもそのまま寝ぼけながらも俺を脱がせようと手を動かして……って本当に寝ぼけているのかこいつ？ 動きに迷いがなさすぎる。

「ユーリも脱ぐのー」

「待て待て。俺まで脱がそうとするんじゃない」

上半身を脱がされ、ズボンにまで手をかけてきたのでさすがに抵抗。上半身裸で寝るまでならまだなんとか許せるが、ズボンまで脱がされてはたまったものではない。そう思って抵抗をするのだが、さすがに永遠神剣の力を使っていないユーフィー相手にこちらが「星辰」の力を使えば、それはそれで怪我をさせる危険性すらある。あんなわけのわからない恐怖を感じさせたとはいえ家族なのだ。怪我をさせたくはない。

「ちよ、ちよ……！ー」

なんて悩んだ隙にユーフィーにほぼ脱がされていた。パンツまで脱がされそうで、それに抵抗しているがなぜか普段に比べて力が入らない。このままでは脱がされる……！ というようなタイミングで

「あれ？」

ユーフィーの手が。

脱がせようと弄っていた手が。

俺の股間に。

「なあにこれ？」

「え、えっとこれは……」

やばい。何がやばいって何もかもがやばい。何が悲しくてユーフィーに対して性教育を施さないといけないのだ。しかも教材が自分で。

「パパについてたのに比べたらちっちゃいね？」

勃起してないからな。……って違う！

「父さんの、見たの？」

「？ うん。ママのお股に入ってたよ？ あれ、何が楽しいのかなあ」

おい、父さん。なんで娘にセックス見られてるんだ。あれか、これが俺がユーファイアの双子の兄弟として生まれたことによる差異か？

こんな形で、本来ならユーファイアの天然っぷりが理解されるだけのイベントが書き換わったのなんて一体誰が見たかつたんだ。少なくとも俺は見たくなかったし巻き込まれたくなかった。こんな疑問を浮かべられても答えに困る。

でも困ったのがまずかった。

「試してみればわかるかな？」

ジリジリと俺の逃げ場を奪おうとするユーファイア。……なんで俺に対してだけはいい子ではないのか。こんな形で貞操を失ってたまるかとは思うが、だからと言ってどうやって逃げ出すべきか。今も俺のズボンをひん剥こうとしているユーファイアからズボンを死守しながら、どうにかして逃げ出す方法を……！

「もー！ そろそろお姉ちゃんのこと聞きなさい！……きやつ！？」

「悠久」の力が呼び出される。ユーファイアがエターナルとしての力を発動し始めた。それによって俺が「星辰」を使ったら殺してしまうのではないかという懸念も一気に消え去り、そのまま俺も力を引き出してユーファイアを突き飛ばしてから父さんたちの寝室に走り出す。

こんなギャグとしか思えないようなことが、まさかあんなに長く続くことになるなんて。今この時期の俺には思いもよらなかった。

30年目

初日に逃げ出したのがまずかったのか、ユーフィーはそれ以降もほぼ毎日襲いかかってくるようになった。その結果ほぼ毎日父さんたちのもとに逃げ出す羽目になり、最終的には最初から父さんと一緒に寝るようになってから約一年。父さんと母さんのセックスを邪魔することになってしまったのは申し訳ないが近親相姦は個人的にはNGなので、できればユーフィーにも早く性教育を施してあげてほしい。このままだと貞操を奪われかねない。

というか、今ですら父さんたちに止められているにも関わらず、父さんたちがいない間にこっそりと襲おうとしてくるのだ。あの仄暗い目をして。

なので、今の俺は全力でユーフィーからは距離を取っている。両親にはユーフィーと喧嘩でもしたのかと思われているが、恐ろしい状態のユーフィーとか相手にしたくないだけなのだ。できることなら今すぐにでもこの家から逃げ出して二度とユーフィーと関わらないでいいところに行きたい。ユーフィーと関わらないでいい場所だったらきつと、エターナル同士との戦いに巻き込まれることもないんだから。

だが、結局そんなことをできないぐらいの厳戒態勢。必ず誰かが近くにいて現状では逃げ出すことなど不可能に近い。機を見計らって、を繰り返していた結果、もうこれだけの時間が経ってしまったのだ。そして俺が悩んでいることを知らないロー両親、それとユーフィーも含められないが、何も聞いてこないロー両親、それとユーフィーも含めて今、とある場所に出かけていた。

「時深さんってどんな人なの？」

少し前を歩いていたユーフィーが父さんに問いかける。そう、今日俺たちは倉橋時深と出会うことになる。「永遠のアセリア」本編から見て二百年ほど経った後のエピローグ。それが今日。けれど、本当に二百年ほど経ったのだろうか。なんて、考えてもわからないことを考えてみる。

ユーフィーが聞いたように俺たちは時深さんと出会ったことがないために、俺に関しては原作知識があつて知つているとはいえ、父さんたちの中では時深さんの格好がわかつていないことになつている。現代における本職の巫女^{おば}さん。と説明すれば一発でわかるのが日本人なのだろうが、大和撫子な見た目とは裏腹に色々とお茶目な人である。そして今の俺たちは日本人ではない。故にそんな説明ではわからない。オレ、ニホンジン、チガウ。

「そうだなあ……時深は俺とアセリアをエターナルに導いてくれた人なんだよ。巫女服つて言つても二人にはわからないか。こう、上半身には白い布を前後に重ね合わせたものを着てて、下は赤色の長いスカートみたいなのを履いてるんだ。そんな服を着た、茶色っぽい髪をした俺たちと同じくらいの年齢の人が、時深だよ。ああ、それと……」

普段通りを装っている父さんだが、その言葉の後に微妙にいたずら心が瞳に宿る。ああ、これは伝説のアレだな。『時深おばさん、初めまして！』イベントだな。父さんがタイムアクセラレイトの中で殺される事件。普段の仕返しに年齢を気にしているちよつと乙女な時深さんをおばさんと娘に呼ばせたことが原因で、時深さんが持つ中でもないの威力を誇る技を受けることになる、どう聞いても父さんが悪いとしか思えないイベントだ。

「時深にあつたら、時深さん、とか、時深お姉ちゃん、とかじゃなくて時深おばさんつて呼ぶんだぞ？」

「そうなの？ 時深おばさん？」

「ああ、そうだ。ちゃんと『時深おばさん、初めまして』つて言うんだぞ」

「はい」

「ユウト。……どうなつても知らないからな」

「？ それじゃあ、行ってくるね！」

俺はどっちで呼ぶべきなんだろうか。父さんの命を守るためにおばさん呼びをしないほうがいいのか、それとも父さんの言うことを聞いておばさん呼びをしたほうがいいのか。どっちにせよ俺には特に

ダメージはないから問題ないのだが。それでもここまで育ててもらった恩を考えるのであれば父さんの仕返しに付き合っただけ上げるべきなのか、それとも命を守る行動をとるべきか悩む。父さんにとってこの仕返しは命をかけるに値するものなのかどうか。そこに鍵はあるな。

まあ、面白くなりそうなのはどっちなのか、なんてことは考えるまでもなくわかっているんで、どう呼ぶのかは決まっているんだけど。「それじゃ、俺も行くとするかな……」

父さんがユーフィーにあれを言わせた結果どうなるのかを想像して身震いしている隙に俺もユーフィー久しぶりに一人になるうとを追いかけようと、その場から走り出そうとしたのだが。

「っと、待った。ユーリは俺たちと一緒にだぞ。いつ、ロウ・エターナルの連中が何をしてくるかわかったもんじやないからな」

「……はい」

舌打ちしそうになるのを抑えて、仕方ないので手を繋いできた父さんに従って歩く。……本気でそろそろ脱走計画を考えるべきだろうか。

そんなことを考えながら、父さんに手を引かれ歩いていると少し離れたところにユーフィーの姿が見える。隣には誰かがいるが、この距離ではよく見えない。けれど多分このタイミングでいるのであれば、倉橋時深以外の何者でもないだろう。

実際、近づいてみればそこにいたのは倉橋時深その人。色素の薄い背中まである髪はストレートに下ろしていて、ユーフィー相手に微笑む姿はまさに大和撫子を体現したかのような女性でありながら、けれどその本性を知れば大和撫子だなんて言えなくなる。三本の上位神剣と契約していると言う傑物であり、時に関するエキスパート。そもそもが永遠神剣と契約する前から未来視なんてものを持っていたと言う話だからどんな化け物なのかと吐き捨てたくもなる。少なくとも彼女がいる限り、俺に逃げ出せる未来なんて存在しない。彼女は俺の未来を見られるのだから、逃げた場所を捕捉される。

「久しぶりだな、時深」

「ええ、久しぶりですねユウトさん」

あ、これまずいやつだ。

見た瞬間に悟ることができた。きつとユーフィーと自己紹介をすでにすませたんだろう。さつき説明された服装を着ているし、ユーフィーにもわかったはずだ。だからそこでユーフィーが時深さんかどうかを確かめて……そして後はお察しというやつだ。

「どうかしたんですか、時深さん？」

ちゃんと呼び方もおばさんじゃなくなっている。これで確定だな。つまり今から父さんは殺されに行つてくるわけだ。

「いいえ、なんでもありませんよ。ユーフォリアちゃん。少し貴女のお父さんとお話があるから、お母さんと一緒に待っててね？」

「？ はい」

「そういうわけなのでアセリアさん。少々ユウトさんをお借りしますね」

「ん。これに関してはユウトが悪いから」

ただ、その前にと母さんが父さんとの間に繋がれた俺の手を剥がして、そして時深さんの前に俺の差し出すように持つて来た。これは、自己紹介しろということだろう。よし、

父さんグッドラック。

心の中でサムズアップしてから、息を吸って俺も挨拶をする。これは、愛されている証拠だとわかってはいても、一人の時間を全くもらえないことへの不満の暴露であると知ってもらいたいところだ。絶対に気づいてもらえない仕返しだけだ。

「初めまして、時深おばあちゃん。父さんと母さんの間に生まれたユーリって言います。契約しているのは永遠神剣第三位『星辰』で、一応生まれた時から一緒ですので、これからよろしくお願いします」

言った。言つてやった。平安時代には生きていたとかいう噂すらある倉橋時深は俺たちから見れば完璧におばあさん。何も間違つたことは言っていない。

「そ、その呼び方はどういふことですか？」

「何かおかしかったですかね？」

質問を質問で返すと幽鬼のようにふらふらと動いて、父さんの肩が
がっしりと強く、強く万力を以て絞め上げる。

「ユウトさん、ちょっと向こうで、お話ししましょうか？」

「……………はい」

肩を落として時深さんに連れられていく父さん。おばあちゃん呼
びに関しては関係ないという弁明をしなかったものでちよつとばかり
罪悪感が出てきたが、まあそれはどうでもいい。そんな、屠殺場に連
れて行かれる豚のような父さんを見送ってから、母さんが俺の耳元で
話しかけて来た。

「ユーリ、どうして時深のことをおばあちゃんって？」

「え？ そりゃ決まってるよ」

父さんへの嫌がらせです。

なんてことを口にしたら怒られるので。

「だって、時深おばあちゃんって、父さんたちをエターナルにしてくれ
た人なんでしょ？ それってつまり、お父さんたちのお母さんじゃ
ん。だからおばあちゃん。おかしいことなんて何も無いよね？」

そうだ。俺とユーフイーはエターナルがどういう理屈で生まれて
くるのかは未だに教えてもらっていない。任務で新しいエターナル
を迎えに行くようなことになればエターナルがどのようなにして増え
るのかを教わるのだろうけど、今はまだそんなことにはなっていない
のだから。

だから、俺たちにとって『エターナルになる』というのは『この世
界に生まれてくる』ことと同じなのだ。何せ俺たちは生まれた時から
エターナルなんだから。後天的にエターナルになる方法を知らない
から、そういう意味ではあの人は“聖賢者ユウト”と“永遠のアセリ
ア”を産み落とした人。

そんなことを言うと、母さんは苦笑していた。

「ん……でも今度からはちゃんとユーフイーみたいに『時深さん』って
呼ぶんだぞ？」

「はーん」

まあ、父さんが酷い目にあつたので、こっちが受けた『一人にさせ

てもらえない』という仕打ちに対する仕返しとしては十分だろう。父さんの悲鳴が断続的に聞こえてくるのは存在しないものとして無視して、近寄ってくるユーフィーからは母さんを盾にしながらかげ続ける。

「もー！　なんで逃げるのー！」

「ユーフィーにチンコ観察されるのが嫌だからに決まってるだろ!!」

あ、母さんが俺の発言を聞いて普段からそこまで変わらない表情をなんて言っているのかわからないと言わんばかりの表情に変化させた。でも、これが事実なのだからしょうがない。そう、そうなのだ。キング・オブ・ヘタレの血を継いだ俺たちではあるけれど、天然の方の母さんの血が色濃く出ているのかユーフィーに関しては本当に父さんの血を継いでいるのか疑問に思うほどの謎の行動力を見せる時がある。その行動力の被害を受けるのは基本的に俺と父さんなのだが、今回に関しては俺に被害が集中しているので、逃げるために母さんの周りをぐるぐると回り回ってユーフィーから近づかれないようにしている、時深さんが戻ってきたのが見えた。そのことにユーフィーも気がつき、そして父さんがいないことにも気がついて問いを投げかけている。

「あれ、時深さん。パパは？」

「気にしないでいいですよ、ユーフォリアちゃん。それと、ユーリくんも、私のことは『時深さん』って呼んでくださいね？」

「はーい」

気にしない気にしない。父さんが戻ってきてないことも、時深さんの頬に付着している赤い液体も。この液体は父さんの血ではなくて、ただの赤色のマナなんだから。ほら、たった今、霧になって消えたし。

30年目 出雲

「中くらいのー」

左手で岩を掴んで持ち上げ、それを正面から向かってくるミニオンの集団を見ながら、軽く上にあげて左半身を前に持つてくる。上半身の捻りを加えての右拳が心臓から組み上げられ、血流を通して宿った力の全てを解放した。その一撃は宙に浮いた岩へ正面、ミニオンが向かってくる方向に向けての運動エネルギーを加える。砕けた岩片が散弾と化して、拳から伝達されたオーラフォトンによつて凶器と化する。

「さんだーーんー」

それらが、少女の形をしたミニオンたちを串刺しにして、あるいは頭蓋を始めとした体の一部分を消しとばして殺した。

だが、所詮は急造の散弾。せいぜいがどの方向に飛んでいくか程度のことでしか俺には決められない。正面から向かってくるミニオンの大半を体の一部が存在しない死体に変えることはできても、それでも取りこぼしは出る。それらに関して地面を砕きながらも跳躍して正面に。ミニオンの脳が俺が正面にいることを認識するよりも早く頭を握りつぶして、そのまま胴体を別のミニオンに叩きつけて肉塊に変える、なんてことを片手の指で足りる程度の回数繰り返せば殲滅は終了した。

「きひっ」

変な笑いが出た。あの、なんとも言えないミニオンをミニオンに叩きつけたときの衝撃。やりすぎないように注意しないと癖になりそうだった。いや、今の状況を考えればこんなことでも考えていないとやっていられなかった。

「さつて、時深さんはっ」と

マナを感じ取ることで周囲にミニオンがいないことを確かめてから時深さんの居場所を探る。これは模擬戦。これは模擬戦。殺し合いなんかでは断じてない。だからまだ戦おうという気にはなれる。とりあえず時深さんに俺たちを鍛えてくれないかと相談していた父

さんにはあとでどれぐらい強くなったか身を以て知ってもらおうという決意もした。

それなのに、まさか模擬戦であるにも関わらず「私を見つけるところから始めなさい」なんて言われて戦闘パートじゃなくて戦略パートが始まるとは思ってもよらなかつたが。あるいは、エターナルとしての戦い方。それぞれの世界における限られたマナでの戦闘の仕方を教えるために、今までいた時間樹とは違うこの時間樹におけるマナの総量を教えずにどこかに隠れた、とかそんなパターンだろうか。

「まっ、考えてもわからないなら考えるだけ無駄か。どうせあの人たちの考えなんて俺なんかにはわからないことだし。そんなことを考えるくらいならどうやって父さんたちの監視から抜け出すか考えた方が……つといた」

もはやこの肉体そのものが凶器と化している現状、全力で戦えばそれだけで周辺被害がとんでも無いことになってしまうというのがよくわかる。自分の周囲には、戦闘が始まるまでは存在していた豊かな緑が剥げ、荒野と見紛うような表面が見えてしまっている。しかしそんなことを気にしている暇はない。戦えば自然を滅ぼしかねない、なんて世界を滅ぼして一つの神剣に戻そうとするロウっぽい気がしないでもないが、それだけの力があるおかげで今まともな戦いになりそうという現実がある。

「じゃ、行きますか……!」

四肢に力を込めて、出雲の一角に広がる森に向けて踏み出す。その奥に、倉橋時深の気配を感じ取ることができたために。爆音とともに俺の姿がその場から消え失せる。背後にはクレーター。俺にとって是最悪に近い戦場で待ち受けるおばさんを倒すために、森の奥地に向かって駆け出した。

俺は基本的に力の調整をすることがない。「星辰」で跳ね上がった身体能力を使うのなんてミニオン駆除程度しか存在しないため、敵と戦うための配分なんてものを考える必要がなく、結果として俺の中にあるこの身体能力は「神剣を使わない」か「神剣を使う」かの二択だけ。神剣を使うのも、力の調節なんてせずともミニオンを殺せるので

しないのだ。

そんな俺からすれば、この身体能力を利用して戦うには広々とした空間の方がいい。木々があつてぶつかりかねない森の中では俺の力が十二分に発揮されないことを知っていて選んだのだろうか。まあそこに関してはどうでもいい。ただの身体能力ではどうしようもなく敵わない時間操作持ちなのだ。最初から負けることが決まっている以上は、なあなあで済ませてもいい気もするが、そんなことをしてバレたらそっちの方が面倒なので本気でやるしかない。

「見つけた……！ のーでー」

木々の隙間を潜り、あるいは正面からぶつかって粉碎しながらも時深さんのいる場所を目指す。それっぽい影が見えてきたので、一度木々に手を引つ掛けてブレーキをかけて、第三宇宙速度という馬鹿げたスピードでぶつかったことによりへし折れた木々の中から一本を掴んで、それを全力で時深さんっぽい影に向けて投げた。

「とりあえずふつとべ!!」

第三宇宙速度を叩き出した倒木は、オーラフォトンに守られながらも摩擦によって少しずつ原型を留めなくなってしまう着弾時にはもうただの木片に近くなっていた。その一撃は俺がノーコンなので時深さんには当たらなかつたが、着弾と同時に碎け散り、しかしながら第三宇宙速度を維持したまま散乱した木片によって周囲の木が倒れ、地面に亀裂が入り、もう神聖な空間とは口が裂けても言えない。

「経験の差を甘く見ないことです。……………そこっ!」

そこに降り立った途端、背後から時深さんに襲われた。とつさに腕で頭をかばうとそちらには確かにマナ反応が。反射で頭を守ったが、どうやらそれで間違いではなかったようだ。腕に何か硬いものが押し当てられ、それと同時に体全体に衝撃が走っている。視認してみるとそれはおそらく永遠神剣第三位「時詠」……少なくとも「時逆」だったら因果律操作で俺の腕は切り取られていただろうから、それではない……で。そしてそれを手にしている時深さんは驚いているのが見えた。

「なっ、素手で……!?!」

振り向くのは間に合わない。俺が振り向くよりも早くタイムアクセライトを使われる可能性の方が高い。驚いているとはいえ、さすがに攻撃を食らいそうになれば気づいて動くだろうと考えて、「てい」

砂を蹴り上げるようにして、バック宙した。それに合わせて足を通してオーラフォトンによる強化を浴びた土砂が音速に近い速度で時深さんを飲み込もうと迫る。大きくうねった土砂はそう簡単に突破することなどできない天然の壁。そんな代物に対して、けれど焦っているような雰囲気は感じない。

「タイムアクセライト！」

加速した時の中を駆け始めた。彼女の代名詞とも呼べる技、タイムアクセライト。時間流から己を切り離すことで他人が一秒を過ぎす間に己だけ数十秒と動けるようになった彼女は、俺の目からはただ加速しているようにしか見えないはずだ。

「だったら……！」

どれだけ速くても避けられない範囲攻撃を仕掛ければいいのだと、己の足元を踏み抜いて土砂をさらに天高く舞い上がらせる。これで、どこにいても俺のオーラフォトンを受けた土砂が雨となって降り注いでいる間は時深さんの場所は俺には丸わかり。そのはずなのに

「無駄です」

何か、違和感が体を走り抜ける。この違和感をどう表現するべきかわからない。けれど恐らくは時深によるものだとあたりをつけて、俺に影響を及ぼす魔法という事実からタイムシフトかタイムリープ。なのだが、巻き戻っている感じがしない。どちらかという土砂の降り注ぐ時間の終わりまで一気を持っていかれるような、過程を消しとばしている違和感から、これをタイムリープと断定して

「気持ち悪いっ!!」

その魔法を踏み潰した。

「な、なんですかそれ!？」

「知りません!」

叫んだ内容は情けないことに真実。できるかもと思ってやったら

できてしまったというだけの、実戦に投入していいのかすら謎のもの。

そんなものでは潰せたのは己にかかった時間を消し飛ばす部分のみ。土砂そのものは降り注いでいた時間が消し飛ばされたことでもうすでに降り止んでいる。この驚愕している一瞬にのみ勝機があると感じて、拳を叩きつけようとした、その瞬間に。

「タイムアクセラレイト！」

首元に、『時詠』の刃を当てられていた。

「……負けました」

敗北。やっぱりとしか言えない結末。これで、俺は他のエターナルには勝てないことが証明された。手を上げてこれ以上の交戦の意思はないことを宣言してそれで模擬戦は終了。

ああ、うん。やっぱり。俺では他の永遠存在に対して勝ち目を見出せない。なんとなくの直感ではあったが使えるようになった魔法潰しも、結局のところ大勢に影響を及ぼすことはなかった。これで、勝ちを拾えたならあるいは。俺もエターナルとして戦うことをどうにか選択肢として受け入れることもできたかもしれないけれど。世の中はそんなに甘くなかった。

「はい、それじゃ次はユーフォリアちゃんですね」

時深さんの視線がユーフィーに向く。その視線の先にいるユーフィーは自信満々。俺の仇をとるんだなんて言っているが勝手に殺さないでほしい。未だにズタバロの父さんとそれを治療している母さんのところに、すれ違ったユーフィーに応援の言葉をかけてから向かう。

「負けちゃった」

てへぺろなんて擬音がつきそうな感じで、軽く言う。やってから男がやっても可愛くないからダメだなと判断した。けれど父さんたちは特にそっちに関しては反応することはない。さすがは子供ばでー。その辺りは子供の特権だな。父さんがやってたらキモいとは思えないし。

「ん。大丈夫。時深に負けるのはしょうがない。時深は私たちよりも

前から戦ってるから」

「そうそう。それに、初のエターナル戦なのにタイムアクセラレイトを攻略された方が俺にとっては辛いから……」

「そういえばさつきまでそれにボコられてたっけ。そりゃ、自分が全く対応できない技を駆け出しのエターナルでしかない俺が対応できてたらシヨックを受けるか。それなら頑張って勝ちに行けばよかった。もっとこう、死力を尽くして。」

「そうしたら父さんを煽れ……いや、無理だな。この人は複雑な心境は隠して普通に喜べる人だ。」

「……うん。とりあえず、ちよつと疲れたからこのお屋敷の中に入っ
てていい?」

目をこする。眠たい、というわけではないが初の格上戦だったせいで緊張の糸が切れた途端に、どつと疲れが押し寄せてきたのだ。だから少し休みたい。

「うん。ゆっくり休むといい」

「あとでユーフィーには怒られるかもしれないけどな」

母さんは快く送り出してくれて、父さんはわずかに茶目っ気を出している。さつきのおばあちゃん発言による怒りのタイムアクセラレイトへの仕返しだろうか。

「……ん?」

父さんたちに送り出されて、静かな板張りの廊下を、独特な音を鳴らしながら歩いているとあることに気がついた。

「……あれ? これってもしかしくなくても久方ぶりに一人じゃね??」

気づいてしまった。だいたい四年ほど一人の時間が作れなかったのだ。今、この瞬間に逃げ出さないと次はいつ逃げ出せるかわからない。あ、でもダメだ。疲労が濃くてもう眠い。気づいて心の中でテンションを上げたことが原因で、蓄積していた疲労が一気に爆発した。ふらふらと歩きながらいつ倒れてもおかしくなさそうな俺は廊下を歩いていく。

「ん? あれ? なんてこんなところに子供が……ってあんた大丈夫

!？」

倒れる前、最後に見たのは、黒髪の、エキゾチックな民族衣装らしき服装を着た美少女。

彼女が倒れる俺を見つけて慌ててこちらにやってくる音を子守唄に、俺は一時の眠りにつくのだった。

30年目 出雲

これから先、どうするべきなのだろうか。

勝ち目が見えない永遠の戦いに身を投ずるなんてごめんだけど、ことはそう簡単には済まされれない。だってそうだろう？　俺の周りだけで言っても俺の逃げ道を封じることができる連中がざらにいる。それなのにどうして、この身がエターナルであるという事実から逃れられない以上は永遠の戦いから逃れることはできず、かと言って死にたくもないから自殺なんて逃げ方もできない。

それなのに、これから先の生き方なんて見つかるはずがない。

でも、やりたいことだけは確かに今、この胸の中にある。

だから、それを果たすためにもまずは父さんたちの善意によって作られた牢獄から抜け出さないといけない。

そう信じて、そう決意して、俺はゆっくりと瞼を開いた。

由緒正しい日本家屋、その一室で目を覚ます。実家のベッドとは違い、畳の上に敷かれた布団の中は、外から入る陽光もあつて暖かく、外へ出ようという気概を奪う代物だった。

「……出たくない……出たくない……でも出ないと……でも温いし……」

きつと誰もが出たくないであろう暖かい……暑いではない……お布団の中から出ようともがき、けれど体はその思いに応えることなく約十分。ここまで連れてきてくれたであろう黒髪美少女のことを考える。とは言っても考えるまでもなくあの服装と見た目からしてナルカナだろう。

永遠神剣シリーズ第二作「聖なるかな」のメインヒロイン。主人公である世刻望をエターナル……それも、俺たちエターナルが存在する『剣の宇宙』とは対になる『楯の宇宙』に存在する永遠神剣地位「刹那」から生まれた地位系統永遠神剣であるがためにナル・エターナルへと所持者を変貌させる上位神剣。

ついでにチヨロイン。超ちよろい。

具体的には主人公である望に神剣状態の自分を握られただけで『ら

めえ』っぽい状態になってしまおうという。ちなみにこの言葉は当時の異世界旅行に巻き込まれた中の男子生徒が持っていたという漫画から発見された言葉によつて言語化されて、その元凶たる漫画は男子生徒たちの悲しみとともに生徒会長権限でキャンプファイアー行きとなった。

「いや、今の時代だとこれからなるのか。」

神剣としての己を握らせることを許可しているのだから化身としての姿で言えば秘部とか胸とかそんなところではないだろうに、なぜか握られただけで「らめえ」である。一時期俺は「望に握られただけでそんな状態になるなんてナルカナ様はどれだけ肌が敏感なのか」とか、「望の手に触れた相手にそんな声を上げさせるだけの魔性の何かがあるのなら、幼馴染としてやってきた希美はこれまでにどんな仕打ちを受けたのか」とか色々と個人的にはネタとして楽しんでいたのだが、まあそれに関してはどうでもいい。

「目、覚めた……」

気がつけば、襖が開き、そこには人が立っていた。黒い髪に、黒い装束。身に纏う全てに黒を内包しているその人間は、けれどありえない存在だった。

「ミニ、オン……?」

そうだ、こいつはミニオンだ。内包している神剣の気配はその程度の力しか持っていないとわかる。なのに、その短い髪の毛、そして顔立ちを始めとした至る所に男性らしさが散りばめられている。中性的な男性と呼ぶにふさわしかった。だからこそ、女性体しかありえないはずのミニオンなのか、疑問が残る。男性っぽく改造されただけのミニオンという線もあるがわざわざそんなことをする必要なんてない。

「そう、俺はミニオン。あんたと同じ、この世界には存在しないはずの存在」

「……え? ……ああ、その言い方するってことはあんた」

「俺も、転生者」

一瞬理解できなかったが、すぐにその言葉の意味を理解する。そし

てそれが仮説から真実に変わるまでに数秒もかからなかった。

『ユーフォリアの双子の弟』なんてキャラは原作の永遠神剣シリーズには登場しない。けれどこの世界に生きる人物にとっては今この場にいる俺が全てで、この世界においては『双子として生まれてきた』という事実だけが存在する。そんな中で俺のことを異物だと判断できる奴がいるならそれは、俺と同じく永遠神剣シリーズの知識を持っている……すなわち転生者に他ならない。

「今は、男のミニオンということ面で面白がったナルカナ様に引き取られて、側仕えを命じられている」

「お、お疲れ様です……」

本編からわかるナルカナのナルカナ傍若無人っぷりを思い返して、彼の瞳に宿る疲労の色を見たことでそうとしか言えなくなつた。今ならきつと通じ合える。

「……そう！ 苦労人仲間として!!」

俺も、ユーフィーのセックスに対する無駄な好奇心と無駄な行動力と母さん譲りの天然に対しては常に苦労している。だからきつと『周囲の人間からかけられる絶対に必要ない苦労』という一点で通じ合える。

そう伝えると

「いや、お前のどこが苦労しているんだ」

「は?」

「あんなに可愛い子に迫られて、それに対して『辛いわー』って嫌味か!」

「いやいやいやいや! ちよつと待て! それでもあいつは姉……いや妹?……と、とりあえずは俺の双子の姉だぞ! それなのにセックスを受け入れろつてのかお前は! 近親相姦いける口なのか!」

「ここは現実だぞ! と悲鳴のように半ば叫ぶ。二次元ならまだしもここはすでに現実だ。さすがに三次元で自分がすることになるのはちよつと……」

「それがどうした!」

しかしこのミニオンはそんなことを気にしない。おそらくは『出

雲』という女性しかない空間において抑圧された何かがあったのだろう。俺も、家族がいるせいで暴露できない性癖を、俺を見た目通りに扱う人しかいないところでは暴露できない性癖を全力で暴露していくつもりだ。

「いいか！ この世界ではその気になれば永遠神剣の力を使って現実では不可能なセックスも可能なんだ！ 時間停止ックスを始めとして加速ックスやら、その気になれば時間巻き戻しックスも可能なんだよ！」

「なんだ最後の!? すっごい気になるんだけど！」

「皆の動きが巻き戻りながら、自分だけが正しい時間の流れに入り込むことで、『すでににした動き』を再生するだけだから相手が動きたくなくても自分から勝手に動いてくれるセックスだよ！ 中に出した精液が自分判定を乗り越えられるかは知らないけどな！」

「俺は！ 純愛で！ いいんだよ！ そこに！ 変な要素を！ 付け加えるな!!」

「純愛にも色々形があるだろ！ マゾの奴らがただのセックス以外を求めるのだって純愛だ！ たとえ姉弟だろうとそこに愛があれば問題ない！」

「その愛がないから問題なんだよ！ 俺がユーフィーに持つてるのは家族愛だけだ！ セックスしたいとかの欲求はないよ！ そんなのあったらロリコンだろうが……！」

「いいじゃないか、ロリコンで！ それの何が悪いんだ！ 俺はロリコンだぞ、お前……！ できることならユーフォリアちゃんとセックスしたい……！」

「てめえぶっ殺すぞ……！ ミニオンが、神剣使いに殺される以外に目立った活躍のないミニオンが！ ただの足手まといにしかならねえだろうが！」

別に俺もユーフィーが嫌いなわけではない。家族としての愛情はもちろんある。具体的には連れてきた男を殴り殺す程度には。けれどそれを上回るレベルで彼女が恐ろしいだけである。

そんなこんなで数十分殴り合いに発展しかねない状況ながらも、お

そらくはという注釈がつくことにはなるが同郷の出身ということでは話弾み、この世界に生まれてからの不満やら圧迫感、そういった諸々を吐き出せる相手を得たことで、確かな充足感を得ることができたのだった。

「そういや、まだ名前聞いてなかったな。俺はユーリ。お前は？」

「名前かー。黒スピリットでしかないから俺。そんなのねえわ。なんか名前つけろ」

「上から目線でありがとう。……んじやお前の名前はクロで」

「おい、そのままじゃねえか」

「つち、しようがねえな。……なら、少しひねってノワールで」

「結局クロかよ……まあ、そのままクロって名付けられるよりはマシか」

腹を割って性癖を話し合ったことで言葉も砕けた。もはやこれはマブダチといっても過言ではないのではないだろうか。

「あんたらうるさい！」

『あつはい』

そこに、ナルカナがやってきた。

「そっちのあんたはまず目を覚ましたら、助けたこのナルカナ様に挨拶に来るのが筋つてもんでしょ！　そんでそっちのあんたはその案内役なのに、なーにをギャーギャー騒いで仕事放棄してんのよ！」

これが、傍若無人のナルカナ様。今回に関しては言っていることが間違っていないだけに反論しづらい。彼女に挨拶に行くのは確かに当然だったかもしれない。それなのに、同郷に会えたことで盛り上がりすぎていた。これは怒られても仕方ないかもしれない。

「すみませんでした。助けてくれてありがとうございます」

「おつ、そっちのあんたは結構礼儀正しいわね」

気絶する直前に見たのと同じ美少女。濡羽色の髪は陽光を反射してキラキラと輝いてとても美しい。そんな彼女に見惚れるよりも先に、ナルカナの怒りが出てきたおかげで普段通りに行動できる。

「申し訳、ありませんでした」

「ふんっ、あんたもしっかりとしなさいよ」

ノワールは、普通に怒られていた。



「さて、と」

その日の夜。俺は家族が皆眠っているのを確認して、『出雲』という味方が多いために家族の気が緩んでいる千載一遇の機会を逃さないために行動を開始した。

部屋を抜け出し、庭の方へと。そこに、今回の協力者がいる。

「ノワール」

「ああ、わかってるって」

ナルカナの暴虐、ユーフィーからの襲撃。理由は違えど同じく『今現在属する空間を抜け出したい』という願いによって俺たち二人はつながっている。だからこそ協力できる。ナルカナはこの時間樹の外にまでは追ってこられないという事実が存在するために、確実に味方であると言えるのはそこまでなのが残念だが……

この『出雲』から抜け出すには彼の協力が必要という事実には変わりなかった。

「案内は俺に任せろ」

ウイングハイロウが彼の背中に展開される。俺もそれに捕まって

「よっしや行くぞー！」

俺が、地面を蹴り飛ばすことで二人揃って空に上がり、展開したウイングハイロウがはためて無限の空へと俺たちを誘う。『出雲』の脱出には成功したが、もちろん、このままではすぐに追いつかれる。時を巻き戻されたら、その時点で俺たちの行動は、少なくとも自分にかかる魔法を潰せる俺とは違う、ただのブラックスピリットでしかないノワールはそこでとっつかまっておしまいだらう。

だから、最低限この世界からは抜け出す必要がある。

「出雲の門はこのままだと使えない。どこに行つたかの履歴が残るか

らな」

「だから、こつちで勝手に門を開く必要がある」

その言葉とともに己の血肉に呼びかける。「星辰」のマナ粒子が全身に巡ることで、己の肉体が戦闘用に生まれ変わる。本来ならこの世界に存在する一切を塵殺するためだけの腕力を、本来とは違う形で振るう時がやってきた。

「永遠神剣『星辰』の主、ユーリが命じる。門よ、開け。我らを新たな虚空へと誘え。時間を知ろしめす宇宙の狭間へ、我らが身を導け」

空間を掴む。掴んだ手を横に開く形で強引に扉を開く。そこに、空間の歪みができていることを認識できるのは神剣使いだけだろう。だが、今も寝たままの父さんたちが門が開いたときに流入したマナを感じて目を覚ますのはもう遅い。時深さんの未来視による邪魔だけが気かりだったが、それも無いということは俺の行動は彼女には黙認されたということだろう。ありがたい。

「さあ、行こうか！」

「俺たちの旅路の始まりだ、つてね」

だから、誰かが追ってくる前に俺たちは飛び出した。

33年目 XXXX

父さんたちに見つからない場所を探し求めて、すでに三年が経過していた。

いくつもの時間樹タイムツリーが星の大海の中に存在し、それらの一つ一つが燐光を発しながら己の存在を主張している。そんな空間の中をくぐり抜けて、あまりに近いところはダメだろうと適当に飛んで一年。あまり時間をかけすぎてもバツタリ遭遇する危険性が高すぎるということとある世界に降り立ってからすでに2年が経過していた。

そして、それだけの時間が経てば生活の基盤というものも出来上がっている。この世界についてから初めて出会った相手が貴族だった、ということもあつて俺たち二人の生活は十二分以上にはつきりとした代物になつていた。

「どうかしたのかよ」

「ん、ああ、ノワールか。いや、最初は大変だつたなつて」

「時間樹を抜け出した後か？ そりやそうだよなあ。俺にはお前と語り合つたつていう性癖の話の記憶がないし、お前からもらったつていう名前も記憶には残つてないんだから」

「俺も、エターナルの“渡り”のことは完璧に忘れてたんだよなあ。だからお前の説得にも苦労したわけだし」

「そりや、俺からしたら理由もわからずにいきなり世界の外に出てるようなもんだったからな。お前が転生者だつてことがわかつてようやく納得できたけど」

あの時間樹を抜け出した途端、ノワールは俺が“渡り”を行なつたことよつて自分が外に出ている理由も、自分が見知らぬエターナルに掴まれている理由もわからなくなつたようだった。最初は、解剖されるのかと敵視された俺だったが、「永遠のアセリア」「聖なるかな」について説明。それも「永遠のアセリア」に関してはこの世界では辿らなかつたいくつかのルートを説明することでようやく、俺も転生者だと理解してくれて、さらにそこからユーファイが原作と違う点を納得させるまでに一苦労。

そうして、ようやく見つけたノワールにとっては安住の地。けれど永遠の時を生きることになる俺からしたら一時の隠れ家。まあ、ノワールがこの地を安住の地と定めたのは、俺がこの土地からしばらくすれば出て行くと決めた理由はそれだけではなく……

「おつ、ノワール。恩人様が来たみたいだぞ」

「その呼び方やめてやれよ、リルが泣くぞ……？」

リル。正式名称はリル・メルリーナ。俺たちを拾ってくれた、この異世界アガスティアのオーレルア王国の貴族。俺とノワールに懐いている、幼い頃に両親を亡くした結果、周囲の私欲に弄ばれ続け、裏切ったりしない己の私兵となってくれる人物を探していた人物でもある。

彼女は私兵が欲しい。俺たちは生活基盤を手にしたかった。

そうした利害の一致により、俺たちは永遠神剣の担い手でありながらも彼女の私兵として行動することができる、エトランジエでありながらもこの国の永遠神剣を持たないために王国に縛られることのない特殊なエトランジエとして彼女と協力関係を結んでいた。

「久しぶりですね、ノワール、ユーリ」

部屋に入ってきた、少女と呼ぶにふさわしい体躯ながらも、これから先普通に成長していけば誰もが羨む美貌を手にするであろう俺たちの雇い主を久方ぶりにじっくりと見る。

白に近い金色——俗にプラチナブロンドと呼ばれる色の髪を、齡十三の少女の肉体の背中程度まで伸ばし、紅玉のような瞳は柔らかな慈愛を讃えて俺たちを見つめている。この異世界アガスティアに入るにあたって十五歳程度の肉体に強制的に成長させた俺よりも頭二つぶん程度小さいその少女は、俺たちを見つめながらその相好を崩した。

彼女の存在こそがノワールがこの世界から出ていけない理由。要するに惚れたのだ、こいつは。ここで一生を彼女とともに終えたいと真面目に言うほどに。しかも見る限りはリルもノワールに惚れてるっぽい。この二人のそばに居続けるのが苦痛というのも、俺がこの世界から出て行くことになる理由の一つではあるけれど、

何よりも大きいのは、このアガステイアが永遠神剣シリーズ第三章「悠久のユーフォリア」の舞台となる場所だからだ。

俺が死ぬよりも前に、ついには発売されてくれなかった第三章。けれどここが舞台だとわかっているのだから、この地に留まらないという対策はできる。正直に言つて、「聖なるかな」が「永遠のアセリア」よりも遥かに未来の話であるにも関わらず、「永遠のアセリア」の主人公である父さん、その人間時代に妹だった高嶺佳織が生き残っているという時点で、この上位宇宙アップバー・ユニバースに多数存在する時間樹ごとの時間の流れを信用しないほうがいい。

ただ、未だ王女であるアレストリが誕生していないこと、そして王妃が妊娠したことも公表されていないので、あと十六、七年程度の余裕はあるのだろう。この世界が同人設定の「悠久のユーフォリア」通りに動いてくれているのであれば、それだけの時間があればこの二人が結ばれて幸せな生活を送っているところも確認できると信じていい。

「ふーん。契約を交わしたのは俺なのに、先に呼ぶのはノワールの方なんだー？」

それを、この世界での最後の記憶としたいので、嫉妬しちゃうなーなんて言いながら、とりあえずは今日も今日とて彼らの仲をからかうのだった。

「はあ、疲れました」

十数分からかったところでそろそろいいかと切り上げて本題に入る。

「それで、今日はどういう理由で？」

「理由がないと来ちゃいけませんか？」

問うと、そうやって返された。別にそういう理由ではないのだが、彼女がやってくるときは基本的には何かしらの仕事の依頼であるケースの方が多かった。だから今回もそれだろうとあたりをつけただけであつて、別に悪いことなど全くない。むしろ、俺たちも彼女と話をするのは楽しいので、こちら側としても嬉しいことではある。

「うーん。そうなるもただの世間話になるか……俺たちにそこまで期

待されても困るんだけど」

そうだ。俺たちも別に世情に詳しいわけではない。たまに外を出歩くことはあっても、深窓の令嬢みたいな風貌をしておきながらアグレッシブにすぎる雇い主様に比べればその回数も少なすぎて、特に話をする内容なんてないのだ。……更に言えば、たまにノワールと二人で彼女が出かけているのも見かけるから、それこそ話す内容がある二人は、話が被ってしまうのではないかという危惧もある。

「あ、でしたらー！」

「何さ？」

「これまでの二人のことを聞かせてください。この世界に来る前の二人のことを」

俺たちがこの時間樹に降り立ったとき、まず最初に遭遇したのは言語の壁。幸いにも俺たちには永遠神剣があつたために、ありとあらゆる世界で契約を行う必要がある永遠神剣の特性が存在したためにある程度は勝手に翻訳してくれた。けれど、永遠神剣の能力を使用してしまうえばその残滓が俺たちの体から漂ってしまう。

結果、それを嗅ぎつけたミニオンに襲われて。それを撃退するところを目撃したリルによって拾われたというのが俺たちが今ここにいられる理由。それからほとんど二年、もう完璧にこの世界の言語は喋れるようになってる。

「うーん。そうだなあ……ここに来るまでの俺たちの話ってなると、楽しいことなんて特にないと思うんだけど」

俺はユーフィーに襲われそうになっていた話になるし、ノワールに至ってはナルカナに仕えていた頃の話になる。どっちも楽しい話とは言えない代物なのでできることなら語りたくはない。

「ダメ、ですか？」

けれど悲しそうにするリルの姿を見て、話さないという選択肢は取れなかった。甘いと言われるかもしれないが、彼女に悲しそうな顔をしていてほしくないと思うってしまう。

「わかった、でも楽しい話じゃないと思うぞ」

だから前置きだけをして昔のことを話し出す。話をしている最中、

ふと今のユーフィーたちはどうしているのかという疑問が湧いて出てきたことは心の奥底に押し込めて。会いたくなったりしないよう、嚴重に、嚴重に、鍵をかけて。



ユウトは、扉の前から部屋に籠っているユーフォリアへと声をかける。

「ユーフィー……大丈夫か……？」

「……はい」

三年前、『出雲』に行つた翌日のことだ。気がつけばユーリの姿はそこにはなく、そして唯一の男性個体のミニオンも姿を消していた。これを異常と判断した『出雲』は大規模な搜索を開始したのだが、『出雲』のものとは違う門を通つてハイペリアを脱出した影響で、未だにどの世界に向けて旅立つたのかが理解できていなかった。

そして、それと同時にユーフォリアも自責の念にかられるようになった。

当然のことだろう。彼女はユーリが姿を消した当日、ユーリと同じ布団にて眠っていた。いくら疲労していたからと言っても、一番最初に気がつかないといけない立ち位置にいるはずの自身が気がつかなかったのだからと、今も己のことを責め続けている。

「大丈夫。きっとユーリも見つかるさ。そしたら今度こそ、絶対に離れないようにすればいいだけのことだろ？」

時深の未来視を始めとしたあらゆる異能による探査が、ユーリに対しては通用しなかった。ユウトが考えるに、それこそがあの莫大な身体能力以外の「星辰」の力。物理的なもの以外を全て無効化してしまう力であり、その影響で今もお見つかからないままだった。

「そう、ですよね。見つかりますよね。……うん、そうだよ。見つかるはずだよ。見つけたら絶対に離れないように首輪か何かをつけて

……」

「ユーフィー？」

最後の方はブツブツと呟き始めたユーフォリアに、けれどユウトの耳にはその内容は届かない。かつての鈍感主人公の名残が今も彼には根付いていた。

「きつとまたあの時の女の子が関わってるんだ。あの子、妙に執着してた気もするし。“法王”、だったよね。……………倒して捕まえて拷問してどこに連れてったのか吐かせなきゃ。ユーリが戻ってきてないのは“そういうこと”だし」

エターナルに本当の意味での“死亡”という事例は少ない。なぜならエターナルの特性として、『神剣を己の意思で手放さない限りは死なない』という原作者による……ユーリがこの世界に生まれた時点では、の話ではあるのだが……同人設定と、原作における『永遠神剣の本体を別の世界においていればそちらで復活できる』というのが存在する。

そんなエターナルの特性があるからこそユーフォリアは、戻ってこられないのは監禁、あるいは拷問といった『死なせない』方策が取られているからだと断定した。……実際は自分で逃げ出しただけなので、テムオリンからしたら冤罪なのだが。

「待っててね、ユーリ。今、お姉ちゃんが助けに行くよ……！」

35年目 アガスティア

オーレルア王国の南東に位置する森の中を散策する。

既に俺たちがこの世界に降り立ってから四年。それだけの期間をリルと共に過ごしていた。今日も今日とてリルの目的である、「永遠神剣に頼らないでスピリットに対抗できるようになる道具」を求めて森の中、奥深くにあるという遺跡を狙って進んでいる。

「とは言っても、そんなものなんてないと思うんだけどなー。抗体兵器とか、マナ嵐を起こす装置とかならともかく」

正直に言って、『スピリットに攻められないようにする』だけなら、マナ嵐、あるいはマナ障壁とも呼ばれるあれを起こす装置を作ってしまえばいい。それができる技術者がいるかどうかは別として、『エーテルを結晶化させずに生のまま大気中に放出した際に、マナへと戻る過程で生じる力を利用した障壁』であることと、『発信側と受信側、二つの装置を起動させ、その間の空間をマナ消失空間とし、発信側から受信側へとエーテルを送る』ことによつて発生させられるという、原理などがわかりきった状態なのだから、それこそ天才がいればできるだろう。

ただ、彼女が求めているのは対抗できる力。攻め込まれないようにするための力ではなく、戦場で相見えた時に抗い、倒すことができる力となると。そんな簡単には見つからない。あるいはマナゴーレム……「聖なるかな」に出てきた抗体兵器は彼女が求めているものとしては一番近いのかもしれないが、あれは個人が戦えるようになるものではない上に、元々がナルカナの生み出したものだ。結局神剣が大元になる。

理想としては、永遠神剣のように契約できたものしか使えない代物ではなく、かつ常日頃から携帯できるように突然スピリットと出くわしたとしても逃げだせるだけの力を得られる武器。誰もが銀翼騎士団のように華々しい活躍をできるように、とリルは目を輝かせて言っていた。「悠久のユーフォリア」の同人設定ではその銀翼騎士団が反乱を起こしたことで王家の権威は失墜したとあったが、今はまだ第一

王女アレストリ、第二王女マルカ共に誕生すらしていない。だからきつと、「対抗できる道具」なんて存在しないのだ。それがあれば、あるいは王家の権威が失墜することもなかったかもしれないのだから。「そんなこと言わないでくださいよ。私も薄々その辺りで妥協するべきじゃないかなーとは思ってますけど」

そして、俺の知るそれらに関しては想像通り、宣言した後吟味されて却下を食らった。これはもう、パワードスーツ型抗体兵器、ノル・マーター壺式とか作る方向性に進めるべきだろうか。デザインは顔部分だけは土偶から変更して、薄い、抗体兵器と同じ材質の装甲で体を包み込む。どこぞの変身ヒーローみたいな感じの。

「まあ、ここでも見つからなかったら、あるいはそっち方面で進めることも考える必要がありますね。……そういうわけなので、おそらく護衛としてどこかに潜るのは今回のこれで最後になると思います。護衛、よろしくお願いしますね」

「りよーかい」

「ああ、任せろ」

俺とノワールの返事を聞いて一つ微笑んだ、すでに十五、今の俺の見た目と同じ年齢層になったリルと共に、目的の遺跡とやらの探索に戻る。今回目的の遺跡の名前はトニトルス遺跡。古代、未だスピリットがそこまで多く存在しない時代において、戦場を仕切る戦力を開発していた研究機関の名残だとか。

要するに、その時代において『スピリットという災害を食い止める』ことを目的とした機関だったために、あるいはそこに何かが残されているのではないかとそういうことであつた。“廃れた”原因が、『他のところで大きな成果が出たから役立たずになった』なのか、それとも『目的を果たせそうなどころまでたどり着いたために邪魔だと判断された』のか。そういつたことは一切不明。ただ、それでも後者の可能性にリルが賭けているのだから護衛の俺たちはそれに従うだけだ。

そんなこんなで喋りながら歩いていると、警戒網の中に敵性存在の気配が混じったことを感知した。近づいてくるこれはスピリットのそれ。永遠神剣というわかりやすい指標があるために見逃すなんて

ことはしない。

「姫さん下がれ」

「スピリット……」

血流の中に永遠神剣の力を回す。一寸のラグもなく全身に回された強化の証は、わずかに体を取り巻く燐光として可視化されるレベルにまで高まった。全身に回されている強化を頼りに飛び出す、なんてことは護衛としてやってはいけないこと。そのためこちらにやってくるスピリットの気配を感じながら、それを頼りにして周囲に落ちていた細かい石を拾い、視認した瞬間に弾として放てるように構える。「起きろ、『黒鐵^{くろがね}』」

ノワールも永遠神剣を呼び出す。刀型の永遠神剣。スピリット^{ミニオン}という、本来なら第九位から第七位程度の永遠神剣と契約しているはずの存在の中で、男性体であることが関係しているのかノワールの契約している「黒鐵」は第六位の上位相当、らしい。聞いた話では。少なくとも、『出雲』生まれで、持つ永遠神剣もナルカナによって力を与えられたことで地位系統の神剣として確立しているために、ミニオン程度なら容易く破ることが可能ということはずでに何度も見ている。

「先手は俺が」

「よっしや任せた」

簡単に言葉を交わして、そのまま初撃をノワールに譲る。

ノワール、というかミニオンとスピリットは同一の存在なのだが、基本的にはどうしようもなく違う点が存在する。ミニオンは生まれた瞬間から戦えるが、スピリットは育て上げないと戦いには参加できない程度の実力しか持たないという点。『光をもたらずもの』の生産拠点であった『精霊の世界』で生まれたばかりのミニオンたちが戦えたところ、そしてアセリア本編においてスピリットが訓練士によって強化されていたことを思い出せばそれはよくわかる。そしてノワールが言うには、ミニオンは生まれた時点で俺たちが知る戦いの時の姿であり、そしてその戦い方と体の動かし方は、生まれた時点で知識として、そして実感として体の中に確かに存在しているのだという話だ。

「ダークインパクト」

だから彼は、己のその居合を大したものとは思っておらず、自分で身につけたものではないと自嘲していたけれど。それでも神剣に神剣魔法を乗せて漆黒の斬撃として放たれたその居合は、振り抜かれた斬撃の形をしたダークインパクトが木々を両断しながら先へと進んでいく。奇襲だったそれは数体程度のミニオンを切り裂き、そこでたち消える。けれどそれで十分。もうすでに強化された視力にはミニオンたちが全て目に見えていた。

「ふきとべっ!!」

慈悲など一切見せることなく、俺の投げた小石がその後を追って着弾する。土煙とともに射線上に肉体を置いていたスピリットの頭蓋が消し飛び、わずかに減速した小石はけれどそのまま地面を破壊し、その周囲にも圧倒的な被害をもたらす。ミニオンの動きが止まる。そこに、ダークインパクトを放ってからウイングハイロウにて空から突貫していたノワールが数秒遅れて到着。そのまま刀で首を切り落としていた。

「そーれっどー!」

ノワールが一撃ごとに離脱しているのを目撃して、今度は切断された木々を投げる。良い様に敵が吹き飛ぶのを見るのが最近では楽しくなってきた。躲したはいいもののオーラフオトンに纏った状態の木片を目に受けて、そのまま眼球を潰しながら体に入り込んだ木片が内側から過剰なオーラフオトンによって爆散して内部から吹き飛ばしたり、あるいは射線上にいたためにそのまま体に大きな穴が開いていたりするスピリットたちは、その肉片すらもマナの霧に還るためにリルの視界に入る前に全てが終わる。

結局、数十秒で全てのミニオンの殲滅を終了させることに成功した。

「姫さん、終わったぞ」

「はい、ありがとうございます。……それと、いつになったら名前前で呼んでくれるんですか？」

「さあ、多分いつまでも呼ばないんじゃない？」

ノワールが名前を呼ぶたびに嬉しそうに。他の連中が名前を呼んでも特にそんな兆候が見えることがないという事実。なんとなく、名前前で呼んだら自分とノワールの差を思い知らされそうだ。好意的には思っているけど、別に好きな相手ではないので問題は何も無いのだが。それでも親しい人物から格付けされてしまうというのは悲しい。ノワールは俺が名前前で呼ばないことをリルが聞いたら泣くぞ、なんて言ってたけど、実際にはそんなことなさそうだから、それこそ呼ぶ理由なんてない。

「そう、ですか」

彼女が何を考えているのかはわからない。けれど俯いたという時点で見せたくはない表情なのだろう。女性の心なんてわからないけれど、なんとなくそんな感じだろうとあたりをつけて、それ以上この話題を広げることはしない。

「あれが、姫さんの言ってた遺跡か？」

「え、あ、はい、そうですね。あれがトニトルス遺跡です」

ふと見えた石造りの建造物を指して尋ねるとイエスという返答が返ってきた。街中ならともかく、この辺りの地理には俺たちは疎いで、リルの言葉を信じるしかない。とは言っても、先に下調べぐらいはしているだろうから、おそらく間違いという線は消えたとみていいはずだ。

「なら、とつとと行きますか。これが終われば護衛もおしまい。でもこっからは実験に付き合うことになるんだろ？」

「ええ。その通りです。申し訳ないのですが、これからは作った物の効力を試す実験に付き合っていたきたいんです」

どんな代物が見つかるかはわからない。けれど、見つかったら見つかったでその技術を使って作り出した物を試す。見つからなかったら、今度は彼女が一から作り出した代物を試すための対戦相手ということになる。実際に、抗体兵器っぽいものならば彼女には作れるだけの技術力が存在すると思われる、というのがこの数年接しているの感想だ。きつと彼女なら行き詰まりながらも完成させるだろう。

だからきつと。俺はその時に、彼女が苦心して作り上げたその技術

を滅ぼさないといけなくなるだろう。

永遠神剣シリーズは「聖なるかな」の後から宇宙のバランス全体が狂ってくるということが同人設定ではあったが、原作者によって語られていた。それをどうにかしないと俺が存在するこの宇宙は滅んでしまうし、そのためには『全く何もわかっていない「悠久のユーフォリア」という物語にできる限り近くなるようにしなければならぬ』という地獄が待っている。

一番いいのは普通に過ごしていれば誰も知ることがなく、今回のように遺跡発掘などの何重もの過程を得てようやく実践にこぎつけられるレベル。この状態ならきつと本編に出てくる場合も、ちゃんとそれらしい理由がついて出てくるはずだ。

「あ、ユーリー！ 面白いものを見つけましたよー」

そんな風に笑いかけて、面白いものとやらを俺に見せてくるリルに、その事実を再確認した俺はどうしても正面からその笑顔を受け止めることができずに、謝罪を心の中で繰り返すことしかできない。

本当にごめんな、リル。お前の研究の成果は、未来まで残ることはないんだ。誰かの日常を、その誰かが守れるようにしたいというお前の立派な願いは、その理想の手助けをした俺の手で碎かれるんだよ。それを立派だと、協力したいと口にした男が、お前の研究成果を完璧に碎くんだよ。

アレストリ王女が生まれるよりも早く、この研究を潰さないといけない。そうでないと、ユーフィーがこの世界に來た時にこの研究が残っているかもしれない。できる限り「悠久のユーフォリア」の物語に本来存在しなかった要素を入れたくはないという身勝手。『神剣宇宙のバランスが崩れ始めた時に発生する物語を、できる限り正しい形にしておきたい』なんて欲望^{エゴ}で、大切な友人の願いを碎くこと。

その事実が、これ以上なく苦しかった。

40年目 アガスティア

とある世界。とある家屋の庭先にて、一人の少女が己が契約している永遠神剣を振るっている。その瞳には幼さには見合わない女の情念が。弟を奪われたと思う姉の怒りが。その他にも多種多様な思いがドロドロと溶け合って、彼女の体に活力を与え続けている。

すなわち、連れ去られたであろう弟を助けるための力を。

『ユーフィー、そろそろ休憩にしよう?』

「ゆーくん。もうそんな時間?」

誰もいない空間、少女以外の誰の声も響かないはずのその場に、けれど少女の耳にだけはその声がはつきりと届く。少女……ユーフォリアの契約している永遠神剣「悠久」だ。彼がいたからこそ、今もユーフォリアはこの場にとどまり、弟を探す旅に出ていない。ユーフォリアもバカではないので、確実に弟を取り戻すためにももつと力をつける必要があると諭されればそれに納得するし、弟が洗脳されるようなことになっていたら、それこそ傷をつけずに捕らえられる程度の実力は必要だということもしっかりと理解している。

その「洗脳されている」という想像をしたことで、一度何が何でも探しに行かないと、とユーフォリアが暴走して彼女の両親が苦勞して止めたことは、まだこの家庭では記憶に新しい。

そうして、「弟を探したい」というユーフォリアの願いに応えようとしている両親にも協力してもらいながら訓練している彼女は、休憩もしっかりと取らないと逆に体を壊してしまうということも知っていたので、ちゃんと「悠久」の言うことを聞いて用法用量を守って修行をしていた。

「それじゃ、最後に一回……」

ユーフォリアはそう言つて、「悠久」から力を引き出す。本来、この時間軸では彼女が使用することはありえない、鞘「調律」の力すらもわずかに引き出しての一撃は虚空を、時間を、空間を切り裂いてわずかな斬痕を軌跡として残すのだった。

「法王を殺さずに捕らえて、ユーリの場所を聞き出すにはまだ足りない

い……。もつと強く、もつと速く、もつと確実に。理想は一撃で相手の戦闘意欲を削ぐこと……」

しかし、それすらも彼女としては些事にしかなりえない。今の彼女にとつては「調律」の力も宇宙のバランスを保つための力ではなく、弟を取り戻すための手札の一つでしかない。あるいは、弟が戻ってきて生来の優しさも出せるようになればこのことをしつかりと考えるかもしれないが、今はダメだ。彼女の頭の中は弟を取り戻すための手段を考えることではいっばいで。

「ユーリが帰ってきたら手錠か何かで常にあたしとつないで……。うん、首輪をつけるのもいいかも。もしも洗脳されてるなら……。えへへ。しつかりとあたしがお姉ちゃんだったてことを教えてあげないと……。もう、手のかかる弟だなあ」

弟を取り戻した後に彼に施す予定の『教育』の内容も、どこか壊れていた。



すでに、トニトルス遺跡の探索から五年。つまり、俺たちがリルを連れて旅をした最後の日から、五年が経過したことになる。この五年でリルは更に綺麗になったし、今では数々の婚約の申し込みが来ているらしい。それも、どこかの誰かさんに惹かれているために全て断っているらしいが。ノワールの方も、元がミニオンということ成長は難しいのだと思って俺は諦めていたのだが、どうやら彼はエターナルというマナ存在である俺の成長の仕方を確認して、それを適応させたらしい。まさかすぎる。言い方は悪いが、ただの現代人が転生しただけのミニオンが、エターナルですら自己を保つのが難しい概念情報の書き換えを成功させるなんて思いもよらなかった。

「それじゃ、次お願いしますね」

「おっけー」

目の前にはゴーレムが出現する。ノル・マター式。リルが、あの遺跡から見つけて来た技術と俺がした抗体兵器の話聞いて作り出したマナ・ゴーレム。いずれは人が乗り込んで戦えるパワードスーツ型やロボット型も作りたらしいが、今はまだ手動の遠隔操作しか受けつけていない代物。それと戦って『永遠神剣の守り』を突破することができるとかどうかを試すのが今の俺たちの仕事だった。

「ノワールには別の部屋で戦ってもらってますのでー」
「いつも通りってことだな」

たとえ攻撃が通用したとしても、それが第何位にまで通用するのがわからないといけない。まずそれ以前に永遠神剣の持ち主と十分に戦えるかどうか、という一点を確かめるのだから攻撃だけではなく移動速度、攻撃の速度、そして防衛などの諸々を確かめる必要がある。たとえ攻撃が永遠神剣の守りを突破することができたとしてもかすり傷をつけるのが精一杯なら戦いにはならない。攻撃が当たらないのなら意味がない。攻撃するよりも早く破壊されるのなら意味がない。そんな、いろいろな困難にぶち当たっている最中なのだった。

全力のノワールと戦えるのであれば並大抵のミニオンには負けなだらうし、エターナルの全力を出すわけにはいかない俺であってもそれでも並のエトランジェ程度の実力はあるだろうから、それこそ防衛という観点だけで言えば俺との戦闘も重要な代物だ。

俺の前にあった残骸が片付けられる。威力の調節はやっぱり難しい。「星辰」を使った状態だと軽く叩く、殴る程度の攻撃も地震を発生させるに足るだけの威力になるのだ。そのせいで局所的な地震を大量に起こしてしまったことはこのオーレルア国の国民には謝罪したい。けれど今となっては本当にある程度ではあるが力の加減がわかって来たおかげで地震を発生させることはなくなった。

だからこそ、今の俺にはそれが苦しい。
力加減を教えてくれたのに、この世界はエターナルであつても普通の人間のように飯や睡眠を取る必要があるために困っていた俺を助けてくれたのに。最終的には恩を仇で返すことになるかわかりきつているのはやはり辛い。

「それじゃ、始めてくださーい」

「りょーかい」

思考を切り替える。今は心の中で謝罪をする場面では断じてない。目の前には新型のノル・マーターが出現した。これもまた、リルの作った成果。俺が破壊しないといけない代物。ノワールと別の時間樹に入ることになった時に、ここがアガスティアだと知った時にすぐに出ていけばよかったものの、「渡り」の影響でまた忘れることになるノワールに説明するのが面倒だからとそれを行わなかったツケなのどとは理解している。

けど、それが辛くないのかと言われればそんなことはない。

そんな事実には目を背けて、拳を振るう。出現したノル・マーター相手の手加減は今回は上手くいかず、ついつい行動をとらせる前にミンチにしてしまった。

「もう、何やってるんですか」

「……悪い」

本気で思考を切り替えないと。このままだと役立たずになってしまう。彼女にはこれまでの恩があるんだから、ちゃんと仕事しないといけない。……それにしても、どうやら今の王妃がどうやら妊娠したことが発表されたらしい。これがアレストリ王女だったら本気で時間がない。アレストリ王女が生まれてから十五〜七年の間におそらくは銀翼騎士団による叛乱が起きるはずだ。そしてそれに伴い、第二王女であるマルカがエトランジェを召喚。さらにそこにユーフィーも加わる。それが、このアガスティアにおける「悠久のユーフォリア」の物語の、ユーフィー個人の部分ではなく、アガスティアという世界全体としての始まりのはず。……そんなことを考えたからだろうか。今、ユーフィーは何をしているのか。ふと、気になった。



そんな風に、リルの実験に付き合いながら日常を過ごしていたとある日。俺は今日も屋敷にこもって実験をしているリルのために必要な食材などを購入するために、王都の方にまで出て来ていた。

「いやー、それにしてもお邪魔虫は辛いなー。なあ、『星辰』？」

返答はない。知っている。うちの「星辰」は無口なのだ。男性人格か女性人格かすらわからない。けれど、常日頃からノワールと一緒に話すことに事欠かない状態なのに、今日に限っては一人で買い出しにきている影響で、どうしようもなく話し相手がいないことが不安に感じてしまう。

ここにきてようやく、自分が自分らしくいられる空間……聖賢者の息子としてでもなく、ユーフォリアの弟でもなく、転生者というこの世界における異物としての自分をもさらけ出せる相手が欲しかったのだと言うことを、それができずに常に誰かが隣にいて己を発散する機会をもたらししてくれなかったことが閉塞感の原因だったのだと言うことをようやく理解できた。

「こうやって毎度チャンスを作ってるのにあいづら結ばれてくれないのが困るんだよなあ……。俺もいつまでもこの世界にいられるわけじゃないんだし」

できれば、速く結ばれてほしい。そうでないと俺は、あの二人の結婚式とかを見ることができない。……いずれ己が殺す相手の結婚式を速く見たい、などと自分で考えていても反吐が出そうになるが、それでも彼らが結ばれる光景を速く見たいという気持ちに嘘偽りはないし、リルのことを昔から知っている面々も皆、あの二人が早く結ばれることを祈っている。色々やってはいるみたいだが……

「効果が出ないんだよなあ……」

ぼやきながらも必要なものを買って、そのまま帰り道につく。すると、この七年で顔見知りになった店主たちが声をかけてくれる。

「おっ、ユーリ。今日もなんか買ってきてくか？」

「悪いけど、今日は食材を買いに来ただけなんだよ」

「あ、ユーリ。今度リル様連れて来てくれない？ あの方に似合いそうな服が入ったのよ」

「わかった。今度ノワールと一緒にここに来るように言つとくわ」

「今日、新しく生まれたスピリットが教育つてことでうちに入ったんだけど、お前さんのところで引き取つて教育してくんない？ そしたら俺がそのスピリット王城に売りつけるし」

「お前が任された仕事だろ……」

「ユーリ、タンスとかいらねえか？」

「いるわけねえ！ というか！ 見てわかる通り！ 今日の俺は！

食材の買い出しだ！ 食材の！」

途中からどんどん怪しくなつて来たり、あるいは仕事をサボつて評価だけ得ようとする薄汚い魂胆を、笑つて冗談のように言う奴もいたので笑いながら返したり。本当に七年という時間は短いようで長い。エターナルとしての時間で見れば彼らでいうところの数日程度の時間にも満たないだろうに、それでも人間にとつては七年は長い時間。それだけの時間があれば十分にじゃれ合うことも可能になっていた。「新しく生まれるっていう王女様の名前を皆で何になるか賭けてるんだけど、ユーリも参加しないか？」

そんな中、一人の店主が発した言葉に、わずかに動きが止まった。広場でやってるんだけど、なんていう店主だが、俺からすればその言葉に頷くわけにはいかない。

「へ、へえ。今のところ、一番の有力候補は？」

「アレストリ、だつてよ。次がマルカ」

「……そう、か」

本当に、もう時間がないみたいだ。決意しないと。俺が、自分で殺すのだと。俺が自分で破壊するのだと。あるいはここで、生まれて来る王女の名前が違つたら。予想を覆してまた別の誰かだったならそれは、この世界であと十数年が過ぎ去つた頃に「悠久のユーフォリア」が始まるわけではないと、まだ時間の余裕があることの証明になるが。そこまで楽観的になれはしない。

「はあ……っ!?!」

これからのことを思つて憂鬱になりため息を吐きながらも、買い出しを終えて帰宅しようとしていると頭上から火の雨が降り注ぐ。周

困の森が焼け死に、炭と化していく中でただ一人、俺だけが咄嗟に展開したオーラフォトンによってそれをしのいでいた。

「二体、何が……」

ミニオンの襲撃。ここは森の中ではあるが郊外というわけではなく、むしろ王都に近いところにある。だから他国籍のスピリットの襲撃を全く予想していなかったために驚いた。けれど、周囲にはこの神剣魔法……おそらくはフレイムシャワーを使った人物は存在しておらず。視認が不可能なために「星辰」を体内に巡らせ知覚能力を拡大する。

反応は、上。

そうと理解するのと同時にまた火の雨が降り注ぎ、今度は「星辰」を起動している関係で、おそらくは通用しないと思われるも酸欠になるのを防ぐために後ろに下がる。そのまま頭上を陣取る下手人を目視して、

「なっ……あん、たは……」

その存在に驚きを隠せなかった。

単眼の生物。巨大な目玉、としか言えない形の存在。感知できるマナは膨大で、これはエターナルクラスの代物。そんな、奇妙な生物。そして、もしもこのエターナルが放ったのだとすれば、あの上位のミニオン程度の威力のフレイムシャワーはさほど本気ではなかったのだと、殺さない理由はわからなかったが、その事実だけは理解できた。そして、俺はこの生物の名前を知っている。この王冠を乗せた、巨大な目玉の形をしたエターナル。かつて「永遠のアセリア」という物語の最終決戦において、ロウ・エターナルの一派として父さんたちと戦ったエターナル。

王冠型の永遠神剣、永遠神剣第三位「炎帝」の契約者。その名前前は――

「業火のントウシトラ……!」

「それだけではないぞ」

――背後……!

声の聞こえてきた方向に向かってとっさに裏拳を放つ。しかしそ

それは巨大な鉈型の永遠神剣に止められる。その鉈の……永遠神剣第三位『無我』と呼ばれるその鉈の持ち主も知っていた。

「黒き刃のタキオス……！」

「そうだ。貴様の父親から聞いていたか？」

見ただけでわかる強靱な肉体。鍛え上げられた戦士の肉体から放たれた拳は、武術をしつかりと修めている者の無駄のない動きで俺の肉体を捉えた。

「がっ……！」

「さあ、悪いが付き合ってもらおうぞ。若きエターナルよ」

「シユルルッ！」

初めてのエターナル戦。それは最低最悪の幕開けとなりそうだった。

40年目 秩序

俺の初めてのエターナルとの殺し合い。その幕開けを奪ったのは敵側、タキオスではなくントウシトラだった。

業火のントウシトラ。

それは「永遠のアセリア」本編におけるラストミッションに登場する立ち絵も存在しなかったエターナルの一人。本編において話の内容そのものに関わってくるのがロウ側からはテムオリン、タキオス、シユンの三名だけなので残りのメダリオ、ミトセマールと共に、戦闘時以外にセリフをもらえなかった存在でもある。ならばその彼女？

彼女？ とりあえずントウシトラがどれくらいの強さを誇ったのかというところ。

そこまで目立ったものはない、という他ない。

例えばメダリオ。彼に関してはPS・2版で得た100%流転というネタ技がある分マシと言えるのだが、ントウシトラ、及びミトセマールにはそんなものは存在しない。つまり、ネタにもしづらい存在……せいぜいがントウシトラの、剣の意思を己の意思と勘違いしているお茶目なところ程度しか、ネタとして扱える部分すらない存在なのだ。

だが、それは弱いということではない。

技の説明欄を見る限り、テムオリンが直々に勧誘を行ったというントウシトラ。その時点で強いだろうことは想像につきし、そうでなかつたとしても歴戦のエターナルであるというだけで俺よりも十分に強い。その力は、まずいくら気を抜いていた、しかも若輩である俺が相手ということ差し置いて、制空権を取るためには飛行にマナを行使する必要があるのだからその行使を誰にも気づかせない、というだけで十分にその実力の高さが理解できる。

そんな彼が契約している永遠神剣の名前は「炎帝」。特別な能力と言えるのは名前からわかる通り炎に長けている程度。けれど、基本的にはそれで十分。シンプリーズベスト。たったそれだけで、彼はエターナルとして名を馳せるだけの実力を持っている。

「シユルルルッ！」

俺には理解できない言語を口など存在しない凶体から放ち、単眼で瞬いた。王冠型という、俺にとつては最もやりやすい、特殊能力が強いパターンの永遠神剣。たとえ歴戦のエターナルであろうともその能力が俺に直接作用するものである限りは通用しないという「星辰」の守りに、諸に引つかかってしまうパターンの相手だが。

その攻撃が、俺を中心とした半径五百メートルの空間そのものに対しての爆撃であれば話は別だ。

ントウシトラが瞬いた直後、無数の目玉がその空間を制圧するように出現したことを目視するよりも早く、空間に満ちたマナの震えを感じ取って全身をめぐる血流にこれまでにないほど「星辰」の粒子とオーラフォトンを流し込む。流し込まれた人体にとつて特異な物質の影響で、俺の体がこれまでにないほどに力強く、そして淡い黄金の光に包まれた。そうして「炎帝」の攻撃に対する防衛行動を取り終えるまでにコンマ数秒すらかからない。その動作を終えて今回の戦いで最も注視するべき、空間操作、瞬間移動の能力を持つ「無我」の担い手。ロウ・エターナルの中でも屈指の実力者であろうタキオスの動きを見ようとしたところで

このアガスティアにおいてはエターナルも普通の人間と同じようになっっていることを思い出してその場から飛び退いた。

アガスティアではエターナルも空腹に陥る。睡眠を必要とする。ならば呼吸も必要となるのが道理だろう。いくらマナで作られたものとはいえ炎熱の爆撃に曝される空間の中心地。酸素など残るはずもなく、酸欠で気絶なんてしてしまえばその時点で俺の敗北と死亡が決定してしまう。故に効果範囲から逃れるために全力で跳躍して

「甘いぞっ！」

そこに、空間操作の妙を知り尽くしたタキオスが出現していた。今この瞬間にントウシトラが爆破を開始しても空間操作でタキオスの表皮には絶対に届かない。そんな、絶大な距離が開いていた。驚きを隠せていないだろう俺の間抜け面は、しかし目の前の戦士には関係がない。大上段からの振り下ろしを、この極大の鉞でよくもまあこれほ

どの速度を出せるものだと、驚愕に塗れた思考の中の空白に呆れを混じらせて。もはや反射の域で拳をその正面から叩きつける。空間を削り取る一撃、それが削った空間を殴り砕くことで元に戻し、叩きつけられる歪みすらもそのままの勢いで殴り飛ばして消滅させるが、タキオスの力は絶大で、ぶつかり合った瞬間に弾かれて今一度爆殺空間の中心にまで叩き戻された。

「ちいっ！」

もう一度飛び上がったも叩き落とされるだけだと、すでに臨界点を突破しかけていつ爆破が始まったもおかしくはない空間にて拳を組んでダブルスレッズハンマーを地面に向けて放つ。「星辰」によって阿呆みたいに強化された身体能力がオーレルア国の王都に近い森で解き放たれ、大規模な地震を発生させる。それと同時に殴りつけられた地面がいくつもの極大の土片を舞い上がらせながら砕け散っている。地面に入った罅に足を突っ込んで無理やりに持ち上げる。両足を同時に持ち上げたことによって俺の体が重力に従って地面に沈んでいき、それと同時に足によって持ち上げられた岩片が俺の体を守るように盾として俺の周囲に展開される。蹴りと拳によって作られた即席の盾たちは、俺の肉体に触れたところから俺のオーラフォトンが流れ込み、最低限の盾としての役割はおそらく果たせると思う。問題は酸素だけだが――

「ふんっ！」

さらに砂を自分の体の上にばらまくように。「星辰」の力で撒かれた砂つぶは驚異の力で投げられたことにより滞空時間が長い。そしてそれら全てにオーラフォトンが宿っていて。俺が砂を撒いた空間とントウシトラが放つ爆炎の空間は、確かに区切られた。そして、その砂が撒かれたのは俺のいる場所の真上。俺が砕いたことでできた穴を覆うようにして岩片などと合わせて展開されている。俺が沈んだ空間が、そのままオーラフォトン砂によって守られている。無論、酸素も含めて。

「一気に滅ぼす……！」

直後轟いた爆発は砂の壁に遮られ、そしてその爆風に乗って砂の壁

は散ってしまおう。そうして敵手二人が俺の姿を視認できるようになるまでに、俺が二人の姿を視認できるようになるまでに。その僅かな空白の時間に「星辰」をアガスティアに来て見つけた使い方を実行する。

心臓から全身に回している「星辰」の粒子を、己の両手のひらに集めていく。体全体に行き渡るべき強化の証を己の両手のひらに全て収束させる。全身を包んでいた淡い黄金の光が、重ねられた光の束となって白銀の光の柱に変貌していく。マナ感知でントウシトラの場所を確認して、殺しきれないと理解してフレイムシャワーによる爆撃を開始した彼に狙いを定める。

まずは、範囲攻撃トッを行える後方支援ラを潰す。その思いで、普段に比べればあまりにもちっぽけな膂力を振り絞って、手の中に収束させていた光の柱を投げつける。「星辰」による補助宇宙を脱出するための速度が存在しない膂力であるにも関わらず、その速度は第六宇宙速度。絶対にありえないであろう速度。光の速さを超えている速度。つまり、目視してから、放たれてからでは回避など不可能。

「ンシユルルッ?! グシユウ……?!」

ントウシトラの末期の悲鳴が轟く。この一撃を受けた以上は確実にこの時間樹に顕現しているアバターは必ず消滅する。

光の柱として放たれた、心臓から生成され両の手のひらに集められた「星辰」の粒子。一時的に心臓から生成された全てを一点に集めるために使用直後は身体能力も普通のエターナル程度にまで落ちることとは確認済み。けれどこれをしないと状況の打開はできなかつた。そんな、俺の切り札にして、唯一の「星辰」単体の、砂、岩などの道具に頼らない遠距離攻撃手段。

放たれた光の柱を浴びたントウシトラの体に「星辰」の粒子が入り込んでいく。血流に乗っていく。けれど今の「星辰」のオーナーは俺で、ントウシトラでは断じてない。よって、その粒子が記憶している俺の肉体に、入り込んだ肉体の持ち主であるントウシトラを作り変えようとして、内部で強制的な変貌が巻き起こる。「星辰」と契約していることが唯一の生き残る道であり、そしてそれは俺以外には不可能な

代物。とても恐ろしかった。この事実を――

「星辰」は、一度契約すると二度目以降の契約の時には一人目の契約者の肉体に強制的に作り変える、なんてことを知ってしまった時には。

この技はエターナルを相手にしたらずまず確実に殺せる。そもそもが自己の、保存されている概念情報を書き換えるというエターナルの成長方法。それに介入して強制的に概念情報を己のそれと同質のものに書き換えて第二の自分として生まれ変わらせる。この時点で大多数のエターナルが、通常の成長でも『確固たる自分の定義』を認識する術がなければ己を構成できなくなるという法則に逆らえず、術を持っていてもそれを使用することができずに一時的に戦える状態ではなくなる。そしてそれに耐え切ったとしても、今度は「星辰」による特殊な強化がない状態で「星辰」が肉体に入っているわけだから体が耐えきれずに破裂して死ぬ。これは、永遠神剣に関わらない素の身体能力で山河を砕けるレベルでないと耐えきれない。

だから、誰が相手であろうと死ぬ。

欠点は、今みたいな二連戦となると、二戦目で全力を出せなくなる。正直、今も貧血に近い症状が出ている。「星辰」の粒子が足りていない。肉体の状態器そのものは出来上がっているのに中「星辰」の粒子身が満ちていないせいで、自分の意思に体がついてこない。

つまり、この状況でタキオスと戦えば死ぬ。けれど戦わないなんてことはできない。どうして彼らが襲ってきたのかは謎だけど、襲ってきた理由があるはずで。

――あるいは、ノワールたちにも何かあったのかもしれない。

そう思うと速く帰らないといけないという思いも湧き上がってくるが、だからと言って背を向けてしまえば確実に殺される。今は、普通のエターナル程度の身体能力しかないのであるのだから尚更に。回復までにかかる時間は十分弱。それだけの時間をどうにかして稼がないといけないのだ。

「やれるか? ……いいや、やらないと……!」

体の中で新しく生成され始めた「星辰」の粒子を感じながら、戦え

るようになるまでの果てしない時間を、ただ飛ばされるだけの十分間が開始した。

40年目 黒き刃

黒き刃のタキオス。

それはまさしくゲーム内部の設定で見ても、ボスキャラとして相対する相手としても強敵である。業火のントウシトラのように設定負けしている部分など何一つない。それは、本編において自らを倒した聖賢者ユウトたちを回復させてから去る、なんてことを実行するだけの余力を残していた人物。本気で戦っていたのだろうけど、全力ではない。それでも、ほとんどの攻撃を通さない『絶対防御』、絶大な攻撃力を誇る『空間断絶』、その名の通り限界を突破して己の力を底上げする『限界突破』というアタック、ディフェンス、サポートスキルでプレイヤーを苦しめた強敵。

そんな相手に簡単に勝てる、時間稼ぎができる、なんて思ってもいないが、まずは戦いになるように「星辰」が体全体に行き渡るまでの間を耐えないといけない。けれどこのまま待ち続けるのはダメだ。このまま籠っていてもすぐに地面ごと砕かれておしまいだと地面の中から飛び出す。

――五秒。

「星辰」の力を引き出した時の普段に比べてあまりにも鈍重な動きは、少し深く砕いた地面から脱出するのにそれだけの時間がかかった。五秒。十分――六百秒の百二十分の一。よってそれだけの時間で生成された「星辰」の粒子も普段の百二十分の一。けれどそんな状態ですら、素の「星辰」永遠神剣による、どんな永遠神剣も持つ持ち主の肉体の強化に加えて、能力としての強化が行われているためこの時点で並の第二位と契約しているエターナルは遥かに超えた身体能力。そんな状態のこの肉体から放たれる拳はまともな一撃と言えるような代物ではない。

「緩い」

「がっ……！」

ただ、相手がそれを上回る不条理だったというだけで。放とうとした拳は起こりからタキオスが無造作に振るった左手に潰されて、その

まま胴体に右手片手持ちの「無我」が叩き込まれる。世界が揺れたかと思うほどの衝撃。それを「星辰」の強化が完璧でない状態で受けたせいか、骨がいくつか折れた感じすらする。「星辰」が生成した粒子を一部そちらの治療に回したせいでさらに完全な状態への復帰が滞る。吹き飛ばされながらも体勢を整えて、先の炎熱によって炭と化した木々の破片を今の全力で投げつける。第一宇宙速度で飛来するそれをタキオスはお得意の空間操作すら使うことなく、オーラフトンすらも使用せずにただ技術のみで捌いていく。

「力はある」

半分程度回復したところでさらに「無我」によって折られた骨の上から拳を捻じりこまれた。内側にまで衝撃が全てやってくる。おそらくは浸透頸と呼ばれる類。空気を吐き出し、治りかけていた骨がもう一度折られた苦痛に喘ぐ。衝撃が逃がされることなく全て体を破壊するためにのみ使われ、その場で崩れ落ちそうになった俺に対して「無我」によるから竹割り。

「くつ、おおー」

それを、真剣白刃取りーなんてことはできないので、腕をクロスさせて頭の上に持ってくる。そこに集中させたオーラフトンと「星辰」の粒子による、内外から同時に放たれた複合防壁。「無我」の一撃こそ防ぐことに成功したが、その重量と俺にかかる負荷まではなくならない。苦悶の声を漏らしながらも、叩きつけられる勢いに耐える。

「焦りもあるが、それはそれで何某か焦る理由が存在するということ。お前には焦らなければいけない理由がーおそらくはお前の仲間か何かだろう。その元へ戻ろうとする思いが見える」

聖賢者の息子なのだからとタキオスが言う。うるせえ。知ったことか。俺の自意識は俺のものだ。聖賢者ユウトの元で生まれた時点で俺は俺として完成していた。あんな男みたいに仲間のためなら命を張れるような人物じゃない。俺が気持ちよく明日を迎えるために、俺はあいつらの生存を確認したいだけだ。……あの人みたいに友達を殺すことになっても最終的には前に進める人間じゃないんだ。

「黙れええー！！」

獣のような雄叫びをあげながら拳を振るう。俺が父聖賢者ユウトさんの息子だから仲間の安否を心配しているという事実を否定するために。俺があの人のようなだったら、そもそもノワールたちを殺さないといけないなんて思わなかったはずだ。最初から殺す方向性で意思を固めようとしていた俺は、仲間を助けようとして、それでも力及ばずに殺してしまった父さんとは断じて違うんだ。

「だが」

我武者羅に振るわれる拳は一撃たりともタキオスに当たりはしない。子供の痙攣じみた攻撃では、歴戦の戦士には届かない。

「そんな思いでは埋めきれないほどに、技術と経験の差があるー！！」

今度は「無我」にて薙ぎ払われる。回復よりも先に骨が折れて、傷が増えていく。その度に折れた骨が「星辰」によって繋がれて強靱なものへと変貌していくが、その結果として肉体強化に回される「星辰」の粒子が減って強靱な肉体に意味がない。

「がはっ……！！」

呼吸もする暇がない。振るわれる「無我」という嵐に対して今の俺では折られて回復してを繰り返すだけ。しかも速度的に追いつけないためにどんどん傷だけが増えていく。

「案ずるな。今回俺が命じられたのはお前の足止めだけ。殺すな、とも命令されている。……故に、殺しはしない」

「なん、で……」

「知らん。あの方には俺ごときでは理解できない何かが見えているということを知っていればそれで十分だ」

血を吐きながら尋ねた質問には、彼自身どうでもいいと思っっているということがよく伝わるような返答がやってきた。痛みで意識を保つのが辛い。このまま意識が落ちてもいいのだろうか。殺されないのであれば問題ないよな。きつと、殺してはいけない理由があるのなら、ノワールたちも大丈夫なはずだ。だって、俺にもリルの作ったノル・マーター系列の知識は、作ることではできずとも頭の中には入って

いるのだから。そんな俺が殺されないなら、きつとこの一件はノル・
マーター関係ではない。彼らが殺されることを心配しなくてもいい。
その安堵が、意識を保っていた最後の一線を越えさせた。

「気絶したか」

視界がブラックアウトする。声が遠くなる。倒れこんだ俺の肉体
はそのまま、いつときの眠りについていた。

そうして俺は夢を見る。

何度か、考えたことがあった。俺という存在について。別に転生と
かいう代物に関してはいい。考えたところできつとわかりつこない
から。けれど、『ユーフォリアと双子で生まれたこと』に関しては何か
あるのではないかと。そう思ったことがあった。

悠久のユーフォリアは、鞆「調律」の転生体。原作の設定としては
物語的な都合もあるのかもしれないが、それでも「唯一エターナルの
間で生まれた子供」が「たまたま鞆『調律』の転生体」なんて確率。ど
う考えても低いだろう。天文学的な確率と言ってもいいかもしれない。
い。

「永遠のアセリア」のオフィシャル設定資料集には「エターナルに
なった時点でどんな生物にも生殖能力が付加される」「エターナルの
生殖能力は低い」と二つのことが明言されているために、あるいはこ
れから先の未来で「エターナルの間から生まれた、生まれた時からエ
ターナル」なんて子供が増える可能性もある。

けれど、それとは別に。この時代には生まれるはずがなかったもう
一人の「生まれた時からエターナル」な俺は、もしかしたらユーフィー
と同じく、何かしらの重要な役割を持った存在の転生体ではないの
か、なんてことを考えたことが、確かにあったのだ。

「……ああ」

気絶を眠りというのは少々気が引けるが、そうしてたどり着いた星

の内海、その最深部まで歩いた先にて、俺は確かに俺の起源を発見した。特殊、と言えるのかどうかすら定かではない、『鞘の転生体』なんてものに比べればはるかにちつぽけな己。そこに刻まれた異常性を確かに今知った。

「タキオスのやつ、消えやがった」

そして目覚めた。まず最初の一言は先ほどまで戦っていた相手がいなくなっているということ。本当に足止めだけが目的だったのだろう、殺すのではなく。今更になってあいつが嘘をついていた場合殺されていたのだと恐怖が湧いてくる。さっきのあれはどう考えても正常じゃなかった。敵の言葉を信じて気絶してしまうなんて。

「つて、やっぱこの体はダメかな」

夢の中ではこの異常に年齢を上げておいた肉体ではなく己の本来の姿、童の姿であったためか今の手足の長さに違和感を抱く。これは自分の本来の姿形ではないから仕方ない。なので一度気分を落ち着かせるために自分の体を本来のそれに戻す。そこまでしてようやく、今自分が見た夢を咀嚼して、そして家……父さんたちと一緒に暮らしていたころのことを思い出して呻く。

「あー。でもこういうことならユーフィーのところに戻らないとダメだよなあ。……今はさすがにもう俺の貞操を狙ってきたりしないよな?」

恐ろしい。さすがにこれだけの年月……エターナル的には短い……が経っているのに、未だに俺の貞操を狙ってきたりした日にはどうすればいいのかわからない。ユーフィーから離れられない、というか離れてはいけないのだとわかった俺からすれば、そうなくても離れてはいけないのだろうかと思うと涙が出てくる。

「……戻る前にはノワールたちも処理しないとイケないのか」

もう少し、時間はあると思っていたのに。あの技術を完成させられるだけの人員と頭を残しておくわけにはいかない。俺がいなくなっただけから「悠久のユーフォリア」までにその技術が廃れるなんて思えない。使い勝手がいいからこそ尚更に。だから、完成の前に消去しないといけないのだ。

「いや、戻る前なんて言ってもらえない。そんなことを思っていたらいつまで経っても戻るときはやってこない。……だから、今から殺さないといけない」

きつと、今の俺の顔を見た人間は皆、俺が苦虫を噛みつぶしたような顔をしているというのだろう。覚悟なんて何もできていないまま歩みを進める俺の姿は、自分でも幽鬼のように思える。俺は今から潰しに行くんだ、自分の友人たちを。自分が死にたくないから。友情を裏切ることになる俺が、本当に家族の元に戻っていいのかなんてわからずに、けれど己がこの世界に生まれた理由、与えられた役割を果たすためには戻らないといけない。だから俺は、

自らの目が届かないところから一撃で家ごと滅ぼすことにした
恨み言を受け取るために己の手で心臓を握りつぶすことにした

彼らから恨まれ、そして憎悪の言葉を受けることを覚悟で確実に己の手で葬り去ることを選んだ。

「……行くか。あいつらから恨まれるとしても。それはあいつらの正当な権利で。だからどうしたなんて言えないけど、それを聞く義務が俺にはある」

そうだ。遠くから殺して、ごめんなさいと謝り続けるのなんて自己満足。「殺さないといけないから」なんてーなんて陶酔した行動なのか。己が悲劇のヒーローにでもなったつもりか。同じ自己満足だということはわかってる。被害者からすれば「結局殺すことには変わりない」ということだろう。ただ、それでも。己が心の安定を保つために、遠くから殺してこれから先自己満足のためにごめんなさいと謝り続けて誰かから許される日を待つ、なんてことと。これから先の一生を、自分の心の中に作り出した自分を苛む幻想に謝り続けるだけのものから、現実に確かに存在した恨み言に縛られていくのであれば、どちらの方がマシかと言われれば個人的には後者を取る。

そう覚悟して。これまでの友情を全て破壊することを覚悟して。
歩んで。歩んで。歩んで、歩み続けて。

「……え？」

そうして歩んだ先で、屋敷が崩壊しているのを発見した。

「っ……っ！」

走り出す。「星辰」の力はすでに五割程度回復している。ここまで来たなら、この力を使ってしまえば秒の世界で屋敷にまでたどり着ける。

「姫さんっ！ ノワールっ！」

もともとあの二人がいたであろう実験室の位置を思い出して、そうだと思わしき地点まで歩を進める。すでに死んでいるだろうとはわかってる。でも、ノワールはミニオンにあるまじき戦闘能力だ。あるいはもしかしたら生き残っているんじゃないかと淡い期待を抱いて

「ああ……」

その期待が、脆くも崩れ去った。

そこにあつたのはノワールの首無し死体——死体？——と右腕と両足が瓦礫によつて潰された、服を引き裂かれて裸になったリル。よくよく見ればその裸死体には秘部に何かをねじ込まれたような跡がある。血が混じった精液も溢れている。もしかしたらこの二人はとつくに恋仲で、初めてのセックスをしていたところに屋敷襲撃で殺されたのだろうか。うん、きつとそうだ。そうに決まってる。そんな、

——ノワールを殺した相手に死姦された、とか無理矢理に犯されてから殺された、なんて。信じたくない。

……きつと、これが俺を足止めしていた間に行つたことなのだろう。タキオスの上司。信じたくはない。信じたくはないけれど、彼が命令を聞くのはあいつ一人だけ。だから、かつての友情を信じたかつたとしても、現実を見据えるのであれば、この事態を引き起こした者の名前は一つしかありえない。

「テムオリンツッ——！！」

かつての友人の名前を怒りを込めて叫ぶ。友人の^{ノワール}ことを殺した相手がいて——それが友人を殺さなければいけない状況であつたと

しても——その相手に「友人を殺してくれてありがとう」なんていう気持ちを一瞬でも抱いてしまったことから目を背けるために。

240年目

二百年。ノワールたちがテムオリンに殺されてからそれだけの時間が過ぎた。

その後、俺はアガスティアをすぐに出てテムオリンを探す旅に出た。なんでノワールたちを殺したのか、それを問い詰めて殺すために。かつて共に遊んだ……というよりもあいつが俺を玩具にしていた時に、個人的には友情を感じていた。そんな相手だから敵同士とはいえわずかに気を許していたのかもしれない。けれどそれが間違이었다ことを、あの時にようやく気がついて、そうして出た旅の中でも

未だに一度もテムオリンに会えてはいない。

あいつがあこの時にノワールたちを殺したのはどういう理由だったのか。知ったところで許せるわけがないが、俺にその想像を許すほどの痕跡すら残さずに、ただノワールたちを殺害したという結果だけを残したテムオリンは、あの殺戮以来全く動きがなくて不気味だということ。それを別のエターナルから聞いた。

「クソがっ……いー」

悪態の一つもつきたくなくなるというもの。もうすでに口ウ、カオスを問わずに何人ものエターナルに接触した影響で、両親にも俺の大体の居場所を知られてしまった。ここまでバレなかったことの方が異常なのだと言われればその通りなのだが、まだ捕まるわけにはいかない。少なくともテムオリンに会うまでは。ああ、そうだ。役割を放棄していると言われればその通りだ。父さんたちはその役割のことを知らないから、そちらに関しては何も言わないだろうけど、それでも出会えば家に連れ戻される。それだけは回避しないとイケない。

だから、今日もまたどこかの世界に一時的に身を隠す。

降り立った世界で拳を振るう。いくつかの世界で武術に関する本をパクったまま“渡り”をしたから、すでにこの本はその店に仕入れられなかったことになったか、あるいはどこかの誰かが代わりに犯人として逮捕されてくれているだろう。そんな、表には出せない方法で

得た本の知識で、俺は今日もまた武術の練習を行う。仮想敵はタキオス。あの男を突破しないことにはテムオリンにまでたどり着けない。

「ミラ・レインだっけ？ この世界の名前」

ああ、そうだ。そういえば思い出してきた。この時間樹の名前、確か父さんがローガスと初めて出会った世界と同じ名前。……いいや、違う。この世界は同じ名前なんじゃなくて、まさしく父さんがローガスと出会った世界そのもの。つまりは身重の母さんと、身重だとは知らなかったとはいえ一緒に戦っていた世界だ。ここは内部世界の枝分かれが激しすぎてそう簡単には見つからないだろうと思う。そう過信して、エターナルというアガスティアのような特殊なルールが働いた世界でもない限りは人間が生きるために必要な食べる、寝るという行為の必要性が存在しないこの肉体を頼りに、武術という概念に触れていく。食事も睡眠もただの嗜好品だ。気分転換程度で問題ない。「まあ、最低限雨風を防ぐための掘っ建て小屋程度は作る予定なんだけどな」

さすがに、元日本人として風呂は欠かせない。身を清潔にするだけのものといえある程度、本当にある程度ではあるがこだわる。以前こだわりすぎたせいでそれを作るのに時間をかけすぎて、そのせいで修行を全く行えずに去ってしまっことになった世界もあった。なので本当にある程度で。

「あー。そういや昔姫さんの裸を覗こうとかいう思春期男子じみたこともしたなあ……」

約二日。眠ることもなくそこら辺の木を手刀で切り飛ばして作った小屋とその内部に存在する風呂を見て、この二百年である程度心の整理ができてきたのか、昔のことを思い出す。まだ楽しかった頃のことを。

確かあの時はどつちからかは忘れたけれど『男子高校生の修学旅行の夜といえば女子風呂覗きだろ！』と言って神剣の力まで使って覗きに行った覚えがある。最終的にはノワールガリルの裸を夢想したことで鼻血を出して気絶して、結果バレないように撒収するのに苦労したんだ。

「もう、あんな馬鹿もできないんだよなあ……」

今更になつて、ノワールの死体が存在していた違和感に気がついて遅い。アガスティアを出てしばらくしてから気がついた違和感はスピリットであるノワールの死体が残っていたこと。スピリット、ミニオン、神剣使い、エターナル。その全てがマナ存在であるために、死んだならマナの霧と化するのが道理。それなのに肉体が残っていたというのはつまり、あれはノワールの服を着た誰かであった可能性もあるということ。ノワールが生きている可能性が潰えたわけではなかった、と“渡り”をして全てを忘れ去られてから気がついた。

だから、もう二度と行われることはない。

「……ちよつと休憩するか」

思い出して辛くなつてきた。少し休んで心を落ち着けよう。簡易的なベッドの上に寝転んで、けれど目は冴えたまま。今も、幸せだった頃を悪夢として見てしまう。だから、眠つてしまえばきっと心は休まらない。忘れてはいけないものだど気がついていているが、かと言って心を落ち着けるにはそのことを考えないほうがいい。

「二百年。……二百年かあ。ユーフィーもさすがにもう、まともになつてくれたよな？ 多分、父さんたちがまともにくれたよな？ そうじゃないとテムオリン倒しても怒られる以外の理由で帰りたいなくなるんだけど……」

だから、全てが終わつた後の、実家に戻つた後のことを軽口として、独り言として言う。それに返答してくれる誰かがいないことを悲しく思いながら。



翌日、今日も今日とて闘気を練り上げ、マナを練り上げ、「星辰」の粒子を限界近くまで練り上げて。それらを全て同時に拳に乗せて、足に乗せて、身体中のありとあらゆるところへと使う瞬間にのみ送り込

みながら、武術へと触れる。

テムオリンと会うには、よほどの幸運がない限り彼女の配下と戦った後ということになる。そしてそれはつまり、確実に敵としてみなされるということ。以前、あの花畑で出会ったような奇跡はもう二度と起きはしないと考えたほうがいいだろう。

「……………」

だから、出会った時に揺らがないように、己の内側にてテムオリンへの殺意を漲らせる。法王テムオリンと出会った時に、自分の友人だったテムと混同してしまわないように。純度を高め、黒色の殺意をより暗く、昏く。己の心を殺意の沼へと落としていく。しばらく休んだから、心は落ち着いている。ただ純粹に、彼女を殺害をするためだけに己の拳を鍛え上げていく。殺せるだけの力を手にしておかないと、会話に持ち込むことすらできはしない。まずは一度殺してから、話をするのはそれからでもいい。……いや、殺したら多分次からは逃げられるからダメだけど。とりあえずはそれぐらいの気概を持って。「そういえば、今の俺なら、俺自身が剣になることだ」的なこともできるのでは？ 手刀で木を切れたわけだし」

けれどそれは隠す。これから先、いくつもの世界を回るので。それらの中でテムオリンの情報を集めるのであれば、ある程度は社交的な顔をできるようにしておかないと情報を得られないかもしれない。だから、本当に必要な時以外は、この殺意をひた隠しにしなければならぬ。

「って、そろそろあの日か。……なら一旦向こうの世界に行かないとダメ、だよな」

三百六十五日。日本人だった頃の名残として俺の中では一年の区切り。俺の時間換算ではそろそろアガスティアを旅立ってから……つまりリルが殺されて、俺がノワールと最後に出会った日……ノワールが死んだかどうかはわからない、とは言ってももう寿命も尽きているだろうし……から二百年目になる。毎年、時間樹……この時間の流れの差があるので結構当日からは日数がずれることにはなるが、それでも墓参りには行っている。

「よし、行くか」

最低限の荷物を整える。もう二度とこの世界にやってくることはない。父さんたちがこの近辺を探しているという情報もあったので、またどこか別の世界の方に向かうことになるだろう。この世界から出るための門を開く。なんだか嫌な予感がするのだ。今すぐにこの世界を出ないと何もかもが間に合わなくなる予感が。

「ユーリくん！ ようやく見つけましたよっ！」

声が聞こえたのと同時に開いた門に、振り返ることなく飛び込む。時深さんっぽい声だったけど、あの人が探しに来たとしても今の俺なら逃げ出せる。

「止まらなさい！ 止まらないとタイムアクセラレイトからのクリティカルワンですよっ！」

……逃げねばっ!!

飛び込む寸前に聞こえた、時深さんの声を全力で聞けなかったことにして逃げ出す。むしろあの言葉でどうして止まると思ったのか。どう考えても怒っていることが丸わかりではないか。捕まったら殺される。そうとしか思えないあの言葉。どこか別の欲望が混じっているようにも思えたのは気のせいだろう。

逃げて、逃げて、逃げて。

全力の逃走を続けた結果、けれど足はアガスティアにしっかりと向かっていった。マナを練り上げて……しまつては残滓から見つかいかねないので「星辰」の粒子が馴染んだことで多少進化した肉体で全力疾走。気がついた頃にはアガスティアにたどり着いていた。

「あ、危なかった……捕まったら殺されるところだったぞあれ」

ボケてもきつとブチギレていただけだろう。そうなれば絶対に捕まっで殺されていた。それにしても、この行動はどう取られるのだろうか。逃げなきゃいけない理由。それがあると思われたのだろうか。それとも裏切りと取られるのだろうか。俺にはそのあたりはわからない。……きつと、戻った後に怒られることになるだろう、とは思っているけど。

「まあ、逃げ出した時点で捕まったら怒られることはわかってたし。

ちよつとその規模が大きくなるだけだし」

声が震えそうになるのをこらえながら、後のことは一旦忘れる。時深さんからも逃げたのだ。これは絶対に後で戻った後に時深さんに殺され……いや、忘れる。忘れるんだ。その時になつたらなつたでもしかしたら何か奇跡が起こるかもしれない。父さんとの仲をより深めるためのダシにされる程度で済むとか。……ダメだな。父さんには母さんが一番似合う。時深さんの入る隙間はないのでNG。父さんの息子^俺を使つての光源氏計画とかもすでに精神性が転生前のそれで確立されている俺がいる以上は不可能。時深さんの残念っぷりがわかるだけである。

「……うん、これ以上この話題は考えないほうがいいな」

今年はどうな風になつているんだろうか、なんて呟きながら歩く。もうとつくの昔にあの崩壊した屋敷のあつたところは色々と撤去されて、これまでに来た時には新しい家が建てられている最中だったこともある。そんな家は大変悲しいことに突然空から降つて来た木によつて潰されてしまう、なんて事件も昔起きたな、と思ひ出す。別に俺が木をぶん投げたわけではない。ないつたらない。

一年ぶりにこの身を苛む空腹という概念を取り除くために、オーレアル国の特産品である食つてもよし、卵もよしな鶏らしき何かの串焼きを購入して食べ歩きを敢行する。これも、ノワールと一緒に「これ鶏じゃないか……?」なんて話し合つた食べ物。見た目は鶏なのに味は牛肉ということで二人してウハウハ笑つていた覚えがある。

「ん……?」

懐かしんでしんみりとしながら歩いていると、前方に何か黒い物体が落ちてるのが見える。……というか、あれは……人? もしそうならマズい。そう思つて駆け寄る。

「大丈夫ですか!?!」

返事がない。何かの病気だろうか。それなら街の方まで連れて行かな……

「……………」

腹が、鳴つた。空腹を知らせるその音が。それを聞いて無言にな

る。

「これ、食べるか……？」

「……食べる」

これが、俺と永遠神剣第三位『絶炎』の担い手。永遠神剣シリーズ第三章「悠久のユーフォリア」における主要人物、“絶炎のミュージイ・ファナン”との出会いであった。

280年目 アガステイア

「はむはむ……」

「ああ、ほら。こぼすなミュー。誰もとったりしないから慌てなくてもいいんだぞ」

ミューギイ・ファナン。「悠久のユーフォリア」でユーフィーが会うことになるエターナル。昔から見ているという夢でユーフィーが出会っていた少女、永遠神剣第一位「宿命」の担い手である。宿命に全てを奪われた少女。ミューギイの分離体。分離体が何かはまだ説明されていないなかったのでよくわかっていない。けれど、『宿命』と契約したミューギイを殺すことが目的であり、おそらくはすべてのミューギイがそれを目的としている。そんな程度のこととは想像がついていた。

それがまさか

「美味しかった……」

「それは良かった」

こんなに小動物じみた魔性の女だったとは。四十年前は思いもよらなかった。

いや、正確には「ユーフォリアと食べることが大好き」とか色々小動物を連想させる言葉自体は俺がこの世界に生まれ変わった時点でも色々あったのだ。ただ、彼女の紹介文である「ボクは、ボクをすべて殺す」とは結びつかなかっただけで。この四十年、ともに生活できない彼女の世話を焼くだけで過ぎ去ってしまった。さすがにそろそろアガステイアを離れないとまずいかなあ、という気がしないでもないのだが、この世界で生まれてくるであろう分離体たちを殺さないといけないからとミューギイは離れるつもりがなく、こんな生活能力どころか常識すら危うい少女を一人にするつもりにもなれずズルズルと付き合っていた。

結果として、テムオリンを探す旅には出ることができていないのに。それでもこの状況にどこか満足している自分がいた。けれど殺意は未だに途切れていない。俺の内側で黒々と光り輝いている。

……できることなら、誰もいない時にテムオリンと会いたいものだ。こんなに際限なく膨れ上がっていく殺意を、仲間には見せたくない。仲間と呼べる人物はいないが、それでも両親やユーフィーは首を突っ込んできそうだから。

「今日も、するの？」

「ああ、うん、頼む」

今日も今日とて訓練。やはりこういうのは相方がいた方がやりやすい。己の隙を教えてくれる。しかも彼女は敵を多く屠るために攻撃を受けないようにする動きを本能的にとっている。一対一であれば、基本的に彼女の動きを捉えられることはない。だからこそ、捉えるために動きの無駄が消えていく。もうすでに俺の動きの全てを見切られているが故に、その状況から拳を叩き込むためにはどうするべきか、己の攻撃を理解していても躲せないほどのそれに鍛え上げるか、それとも一度限りの奇策をいくつも用意するか。基本的には前者を選びながらも戦い方の幅をどこまで増やすのか、それを彼女との戦いの中で探っていくのが今の日常である。

「うん。それじゃあ、また後で」

出会ったころに比べれば本当に人間らしくなった。最初の頃は「殺す」が口癖で、さらには言葉もほとんど知らなかったために「殺す」に含まれた雰囲気から彼女の言いたいことを読み取る技能が必須で、もしもミューギイ語検定があるなら二級は堅いなと勝手に思っている。

そうしてまったりとお茶を飲んで二人で緩く過ごしている中。

ズシン、と俺の感知できる範囲内で永遠神剣の。それも「絶炎」のそれと似たような反応を検知した。こうなってくると予定が変わる。ミューギイもどうやら同じ反応を感知したらしい。こちらをただじつと見ている。それに一つ、行こうと促すようにして頷いて席を立つ。ミューギイも立ち上がった。俺は、今回のそれには手を出すことはできないけれど、彼女の動きは参考になるところの方が多い。エターナルという永遠の闘争を約束された人種として生まれながらも人間としての精神が邪魔をする俺に一番合っていない戦い方ではあるのだが。それでも結果として『一番ダメージが少なくなるような戦い

方』になっっている彼女の動き方は、それだけで見る価値がある。

「今日のお夕飯は何？」

「ミューが勝ったら教えてあげる」

「頑張る……！」

「うん、頑張つて。勝った後にミューの食べたいものはなんでも作つてあげるから」

「頑張る……!!」

力強い返事。俺がまだ考えてないなんてことはこの返事を聞く限りではバレてなさそうな雰囲気がある。よかったよかった。テムオリンを倒すための訓練をローミーと出会ったことで少し気を緩めることには成功したとはいえ今もなおローミー必死になってやっついて、その結果彼女の夕飯に関して全く考えていなかったなんてバレたら殺されかねない。……いや、実際には殺されないんだとは思うけど。その程度には懐かれていると思っっている。

「それじゃ行こっか」

「うん」

促して、二人して飛び立つ。この四十年、何もしてこなかったわけではない。母親がウィングハイロウを得意とするブルースピリット出のエターナルであり、「悠久のユーフォリア」においてはユーファイが純白の、まるで天使のような翼を背面に備え付けていたことを俺は知っている。永遠のアセリアの息子であり、悠久のユーフォリアの弟でもある俺ならば、おそらくは出せるはずだと信じてこの四十年、最初の十年ほどかけて翼を出せるようになり、そこから三十年かけて空の旅を行うのに支障がない程度には空中飛行には慣れた。加速に関しては普通に「星辰」の力を借りた方が早いけど、それでは一直線に超速でしか進めないのだから、今回のような俺自身が主役ではない場合はミューギイを立てるために彼女に合わせて飛行する必要がある。

「ユーリ」

「ん？ どうかしたのミュー。今日の夜に食べたいものでも決まった？」

「違う」

いや、違わないけど、と言って不貞腐れる。こういうところで不貞腐れる理由がよくわからない。女の子って難しい、なんて思ったりもするけれど、風呂に関してはミューギイがまともに自分で洗えないということが発覚したので、特にどちらも気にすることなく一緒に入っているため、そういう女の子的な機微ではないのではないかと思う。お互いの裸を見ること以上に恥ずかしいことはないだろうし。

「それじゃ何？ 今日、何かあったっけ？」

「うん……ちよつと。後で話がある」

ほんのりと頬を染めているミューギイを見て、常に己を殺すことを第一目標としていて“分離体である”ことに対する自己否定が本能に根ざしている、なんてことは知らなかったなら絶対に思えない。“絶炎のミューギイ”と今日の前にいるミューギイは別物。そう思っている。

「それは、大事な話？」

「うん。そうじゃないとこんなタイミングで言ったりしない」

「……なんか死亡フラグを感じるな」

「何それ？」

なんとなく、『大事な話がある』なんて言われると死亡フラグを感じてしまう。ここで話をされても死亡フラグとしては成立しているし、『この戦いが終わったら大事な話がある』でも成立している。どっちにせよミューギイは死亡フラグを立ててしまった。「悠久のユーフォリア」に参戦することが決まっている以上は死なないと信じたいが、それでも異物おれが加わっている時点で何が起きたとしてもおかしくない。

純粹な目で聞いてくるミューギイに正しい知識を教えるのは憚られたが、かと言って後で嘘だったと気づいて怒られるのもいやだ。仕方ない。ここは死亡フラグの回避方法も併せて教えることで許してもらおう。

「ふーん。そんなのがあるんだ」

「あるんだよ、俺のいた世界には」

説明を終えると、まず第一声がそれ。回避方法も一応は教えた。だ

からかそこまでミューギイは怒っていないかのように感じる。これが出会った頃だったら、そもそも死亡フラグという言葉にすら反応せず、たとえ説明したとしても「弱い奴が強い奴に負けるのは当然でしょ?」とでも言いかねなかったミューギイが、ここまで感情表現を身につけたことを喜ぶべきことだろう。

「死亡フラグを大量に重ねるのが、死亡フラグを壊す方法、なんだっけ」

「確かそんなことを誰かが言ってた。むしろ露骨すぎて逆に死なないんじゃないのって奴だな」

「なら、ボクもいくつか立てておけばいい?」

きよとんと首を傾げるミューギイは、ひよいひよいと縦横無尽に空を駆ける鳥たちを避けながら尋ねてきて。それに対して肯定の返事を返すと、それならと言って

「ボク、この戦いが終わったら結婚するんだ」

「いや、誰とするのさ」

「……ユーリと?」

「俺ぐらいしか交友関係ないもんな」

「むっ」

ここで俺の知らない名前を出されたらそつちの方がビビった。逆に俺で安心した。けれど俺以外の場合、誰が出てくるのかをちよつと楽しみにしていた部分もどこかにあったのは事実で。ちよつと残念な気分も今はある。

ただ、ミューギイはこの答えがお気に召さなかったようで

「なら、トークオと」

「……それってミューギイの弟じゃなかったっけ?」

おそらく、ミューギイの言っているのは永遠神剣第二位「虚空」の担い手にして“宿命に全てを奪われた少女”ミューギイの弟である“虚空の拡散”トークオのことだろう。まあ、こいつもミューギイなわけだからある意味で“虚空の拡散”を知っているのは何もおかしなことではない。ただ、ちよつと

この世界の姉は弟と結婚しようとするのが流行っている、なんてこ

とはないよなと気がかりになる返答ではあったが。

「ん。だから冗談」

「真顔で言われても」

しかも微妙に疑問符がついている。こいつを「悠久のユーフォーア」でユーフォーに会わせてもいいのか不安になってきた。これでユーフォーがさらに押してくるようなことになったら永遠に恨みそうだ。いや、でも大丈夫か？ ユーフォーのあれはおそらくは純粹な興味で俺のチンコを確認してセックスに持ち込もうとだけだっただけ。それなら、あれがはしたないことだどこかで理解してくれたなら、もしかしたらやめてくれる可能性もあるのでは？ ちよつと戻った後のことに関して希望が出てきた。……ユーフォーが微妙に病んでたような気がするの今は放置で。あれもきつと戻った時には治ってくれてるはずだ。

「やっぱり、ユーリぐらいしか相手いない」

「ああ、うん。それなら宣言通り結婚でもするか？」

「……」

半ば冗談じみた返しをして、彼女の返答は風の音にかき消された。何と言ったのか尋ねようとする前に、すでに今回の敵の前にたどり着いていた。

“絶炎”のミューギイとは違って純粹な黒色の髪ではなく、どちらかというところ“宿命”のミューギイに近い青黒色の髪。あどけない顔立ちとは裏腹に発育は良好のようで、背丈などからうかがえる年の程はだいたい十六程度だろうか。少なくとも俺とともにいたミューギイに比べればはるかに成長している。その手には、少女の姿には似合わない、彼女の髪と同色の強大な両手剣が握られていて、ただただ殺意がこちら側へと向けられているのが感じられた。

「……………」

「……………」

互いに無言。これから殺しあう相手に、殺さねばならないと本能から感じてしている相手に言葉をかける必要などないと言わんばかりに。距離を測り、隙を探り、そうして二人が同時にマナを総身から溢

れさせて飛び出した。
「鍛造、開始ー」

280年目 アガステイア 絶炎 V S 魔炎

「頑張れ、ミュー」

ユーリはこの戦いに手を出せない。

この戦いは“宿命”のミューギイが作り出した分離体たちが、己に根付いた本能である“ミューギイを殺すこと”を達成するために行われる。

そこに、ミューギイではないユーリの出る幕は存在しない。

だから、こうして応援することしかできない。

「『絶炎』よ！」

「『魔炎』よ……！」

同時に駆け出した二人のミューギイは、己の契約している永遠神剣に同時に呼びかけた。

“自分を殺す”という同じ目的を持ったミューギイたちが最初に取った選択肢は、己の永遠神剣の力を汲みあげるといふ神剣使いである以上は当然のこと。

「絶炎」は特殊な形状をしている。持ち手からそのまま刀身が伸びるのではなく、持ち手の先に魔法使いの杖のように、あるいは錫杖のようにリングが融合していて、その内側にはどういう理屈か赤い宝石が浮かんでいる。その先によくやく刀身が存在する。そんな神剣。

己の剣身と持ち手の間に存在する円。その内側に納められている赤い宝石が担い手の言葉に応じて瞬いて、刀身に刻まれた赤い異世界の文字が恒星のように輝いたことをユーリが視認した直後には、刀身を赤黒の焰が包んでいた。

「魔炎」はそんなことはなく、シンプルな両手持ちの大剣。けれど柄に青い宝石が埋め込まれ、刀身には青黒のその身によく映えるように、純白の異世界における古代文字が刻まれているという事実から、気品のようなものが誰の目に見ても明らかに感じられた。

柄に埋め込まれた青い宝石が担い手の言葉に応じて瞬いて、刀身に

刻まれた純白の古代文字が輝きを宿し、刀身を包んだ青黒の炎にかき消されないようにと存在を主張し続ける。

お互いに同じミューギイでありながらも、歩んだ道はまるで違う。お互いに同じ過程を踏んでここに来ながらも、その過程にはまるで違う要素がいくつも混じり合い、道中ですら違う結果を生み出していた。

培われた剣術。培われた技法。培われた神剣魔法。それらは、生まれてから彼女たちが得る個性である。

他の分離体を殺し取り込み、己を強化する。それが分離体ミューギイに埋め込まれた^{宿命}設定。

“絶炎”のミューギイが取り込んだ分離体の数はすでにして二十八。これが多いのか少ないのかはユーリにはわからないが、本来ならすでに人格のオーバードーズが起きていなくてはおかしいような数ではある。代わりに、取り込んだ数によって強化されるという分離体の宿命に従い、圧倒的な力を持つてはいるが。

「……っ！」

「らあっ！」

だからこそ、青黒の炎と赤黒の炎をそれぞれ纏った二振りの剣がぶつかり合った時、純粹に、己のスペックだけの戦いになった時に、より個体値の高かった“絶炎”^{ミューギイ}が圧倒するように剣を弾いたのは当然の帰結だった。

スペックの差。それを一合で互いに理解する。だからこそ、二人が取った次の行動はそれぞれ全く違うものとなる。

「マナよ。漆黒の闇へと変われ。冷たき闇の中で、我が敵を永劫の眠りへと誘え」

“魔炎”は下がりながら神剣魔法を詠唱し、手をかざしながら青属性と黒属性が複合した魔法陣を展開する。

「逃さ、ないっ！」

“絶炎”はさせじと一気に距離を詰める。

先の一合で“魔炎”は“絶炎”には及ばないと互いに理解したことで、確実に己が勝てる接近戦という環境に身を置くために距離を詰

める“絶炎”と、確実に負けると理解している接近戦を捨てて遠距離からの神剣魔法狙いの“魔炎”。

(これなら間に合うっ！)

“絶炎”は己が魔法を使うのに必要な時間から、己よりも弱い“魔炎”が魔法を起動するのにかかる時間を判断して間に合うと踏んで一気に距離を詰める。

「ふん……！」

(ボクはなんで、笑っ……しまっ……！)

けれど、“魔炎”は神剣魔法の発動速度が異様に早く、気付いた時にはもう遅い。

躲す躲さないの瀬戸際、なんてものではなく、気がついた時には絶対に躲せないほど距離を詰めてしまっていた。

「眠れ、ダークコフィン！」

放たれたのは黒の棺。

周囲に顕現した闇夜を塗り固めたような暗黒空間に囚われ、“絶炎”は動きを止める。

(なに、これ……！ 体、おも……)

その正体は重力。

推定三百倍の闇夜の重力圏。

永遠神剣の加護があっても死にかなない絶殺の空間。

耐え切れるのは偏にこの“絶炎”のミューギイがすでに大量のミューギイを取り込んで己を強化していたからこそ。

周囲の景色すら歪みかねないその圧殺空間において、されど“絶炎”は炎を宿す。

(今このタイミングでこれを使ったってことは、これ以上の何かはおそらくボクには存在しない……！)

使わなければ死んでいたのだ。

そのタイミングで出し惜しみする理由などないはずで、まともな戦いに持ち込んだら確実に負けると踏んだからこそ戦いを成り立たせない正面からの暗殺。

だからこそ、これを破れば少なくとも今この場では“魔炎”には手

の打ちようがないと判断した。絶炎は、その魂に勝利への渴望という薪をさらにさらにと際限なく焚べていく。

「マナよ。ボクに力を。全てのボクを焼き尽くす、漆黒の憎悪に濡れた焰と化せ」

業炎が、その総身に宿る。

“絶炎”のミューギイすらも焼き尽くしかねない地獄の業火へと。

「デストラクションフレア」

ミューギイ特攻の炎。

それが分離体だろうとなんだろうと、ミューギイという存在に対する特攻効果を持ち、ミューギイの技である以上はこの炎に焼けないものはない。

よって内側から、重力空間そのものが、加算された重力という概念が全て焼き払われていく。

倒すための戦術を完成させたために、その炎を解禁した。

「――鍛造、完了」

その炎に己の身をも焦がしながら、彼女は完成する。

アンタツチャブル・ブレード
触れられぬ刃。遠い未来にてその名で呼ばれて恐れられることになる少女は、未だ万人に対しての触れられぬ刃として完成には至らぬまま。

されど今この場において『魔炎”のミューギイ』という戦士には決してこれ以上触れられることなき一本の剣として完成した。

「絶剣、派生」

己の魂という炉心に勝利への渴望という薪を焚べて、今この場においてのみ通用する魔剣として鍛造されたその戦術。

これより先に一度たりとも攻撃を受け_{回避}ないことと確実に殺_絶しきるを誓い、そしてそれを実行するに足る道筋を発見したこと_のの宣言。

これより先、重力を操る固有個体、“魔炎”のミューギイはただの獲物となるのだと無表情のまま、何を考えているのかわからない瞳で“絶炎”のミューギイは宣言した。

「これより、絶殺の工程を終了する」

終了宣言。

もう、勝利は決まったという断言。

彼女の中では当然の事実。

「ふざけないで……！」

それは、“魔炎”のミューギイに対しての挑発としても作用した。

「グラビティホールドっ！」

放たれたのは黒属性の魔法。

青属性のバニッシュスキルも同時に併用することで、神剣魔法によつての脱出を不可能とする、先の重力圏を生み出す魔法を、空間ではなく個人を対象に収束させた一撃。

「無駄」

それを、剣から溢れ、己の肉体をも焦がす黒炎で焼き尽くす。

向かってきた重力の概念を真正面から受け止め、その上で完全に粉碎したという、相手からすればわけのわからない行動を実行して、増加されるはずだった全てが届く前に焼失する。

二十八のミューギイを殺害する中でミューギイの共通性を発見し、それが乗った全てを焼き払う力を具現化したことで生まれた、ミューギイという存在に対しての絶対特攻を振るい、あらゆる攻撃を焼き尽くした。

「だったら……！」

“魔炎”はマナを集中させる。

“魔炎”の魔炎たる所以、己の永遠神剣の名であるというだけではなく、その名を示すに足る力。全てを焼き尽くす魔性の業火を剣に宿し、さらにはもう片方の手にも青黒の炎でできた剣を握りしめた。

いいや、青黒ではなく、蒼黒。

炎剣の色が変化し、その属性も青……氷や水の属性と黒……夜の闇、深淵の属性の二つへと切り替わる。

それは絶対零度の闇のゆりかご。

焼き尽くし、消し炭と変えて命を焼失させるものではなく、暗く冷たい闇の中に沈めることで、苦しむ間も無く殺していく死のカウントダウン。

「そんなものに意味はない」

そうして二本の剣を重ね合わせての一撃は、絶殺の気概を乗せた漆黒の炎が宿った剣によつて切り払われる。

永遠神剣にすら罅が入るレベルの斬り払い。

漆黒の炎は今も燃え盛り、その炎は触れ合った永遠神剣、並びに炎剣を通して“魔炎”のミューギイにも伝わっていく。

「ぐ、ああー！！」

その炎の痛みは、“魔炎”がこれまでに受けたいかなるものよりも大きかった。

苦悶の声が漏れる。「耐える」「我慢する」と言つた行為が全て無駄に感じる一撃。

これまで彼女が受けたことのある攻撃は全て物理的な代物。

『斬られたら死ぬ』という人型の存在の当たり前の法則に従つただけの痛み。

けれど、今回のこれは『ミューギイという存在を否定するための概念』が組み込まれた炎。

ミューギイという存在である以上はこれを受ければ魂をも焼き尽くす。

分離体を大量に取り込んだことによりそのぶんどけ本体……『宿命』の担い手であるミューギイに近づいたことで炎という形ではあれど再現を可能とした存在否定の一撃である。

むしろこれを常に身に纏つて平然としていられる“絶炎”の方がおかしいのである。

「これで、おしまい」

ミューギイという獲物を狙い続けるその炎は対象を焼き尽くさない限りは消滅しない。

今回の場合は“絶炎”と“魔炎”という二人のミューギイを同時に焼いているが、どちらか片方であつたとしてもミューギイを焼き殺したという事実が発生することによつてこの炎は消え去る。

だからこそ、“絶炎”のミューギイ・ファナンは、その炎がより早く“魔炎”のミューギイを焼き尽くすように己の剣を突き立てる。

「死炎、抜刀」

紅蓮の炎を生み出して、黒炎を纏った“絶炎”の外側に纏わせる。黒き炎がミューギイが生み出したものだと思いを以て紅蓮の炎を飲み込みながらも、その状況にミューギイ・ファナンは頓着しない。「壱式——！」

炎を鞘とする抜刀術。

心臓を切り裂く軌道で放たれた斬撃は、肉を切り裂き、炎に焼かれ絶叫を挙げ続ける“魔炎”のミューギイの体内に潜り込み、そのまま外側にまで駆け抜ける一筋の流星と化した。その直後、内側から歓喜の雄叫びをあげるようにして黒い炎が溢れ出る。

「——！！」

内外問わずに同時に焼き尽くされる“魔炎”のミューギイ。

外側から焼かれているだけの“絶炎”に比べてその進行速度は速く、つけられた傷からマナが流出しているのもあつてか、どんどん肉体が崩れ落ちていく。

「……まだ生きてたんだ」

それは蛆虫を見るような目。

自己否定が根幹に組み込まれている全てのミューギイは、己以外のミューギイに対してもその存在を否定しようとする。

だからこそ、彼女は普段は見せないような冷たい目を、己と同一の存在に對して向けた。

「とつとと終われ」

その思いに比例して自己否定の炎は燃え盛る。

二人の肉体を焼きながら、周囲には燃え広がらないその炎は

「——あ」

掠れた声を出しながら焼失していく“魔炎”を先に焼き尽くした。

その光景を眺めて。

それによつて炎が消え去るのを見て。

“絶炎”のミューギイ・ファナンは

「ぶっっ」

少し離れたところから見ていたユーリに向かって無表情のままピースをするのだった。

280年目 アガステイア

戦いの後はいつも同じことをする。ミューギイの傷口、あるいは己の炎で焼けたところに己の手を挿入していく。

「あう……んっ、はあ……ゆーりい」

くすぐったそうなミューギイの声。艶やかさが混じった声だがさすがに外見年齢が幼すぎてそういう瞳では見れない。なお、同じぐらいの外見年齢であるユーフィーに関しては何と肉食獣オーラとヤンデレと血を分けた双子であることが作用して見れなかったが。さすがに血が繋がってない相手だと、年齢的な問題なのだろう。時深さんならそういう目では見られるけど、どっちかっていうとあの人に関しては父さんを未だに狙っているという情報があるから頑張つて欲しいとしか思えない。

「んう……そこお……」

彼女の焼けただれた皮膚に、「星辰」を纏わせ発光すらしている左手をズブズブと沈めていく。最初は、「星辰」が俺の肉体を補強していたタキオス戦の時のことを思い出して、自分の肉体を「星辰」の粒子で繋ぎ合わせて回復させることができるなら、他人では不可能なのかと思つてミューギイに許可を取つて試したこと。いきなり体の中に沈んだのは視覚的にも触覚的にもショックな出来事だったが、今となってはやられる側であるミューギイがくすぐったそうにしているだけ。最初にした時には珍しく、この三百年近くほとんどしゃべらなかつた「星辰」が思念でいきなり語りかけてきたので驚いたが。

「はう……」

「星辰」の粒子が満たされていく感覚はミューギイもお気に召しているらしい。どろり、どろり、と「星辰」が彼女の中を満たしていく。少しずつ、その体に慣れさせてミューギイの肉体は変質の一路を辿り続ける。彼女の肉体は「星辰」で中を満たそうとするたびに、それを受け入れられる肉体……即ち俺のそれに近づいていく。変異個体とでもいうべきエターナル。ナルに変質したマナによつて肉体を構成されるエターナルのことをナル・エターナル。古代から存在する特殊

なエターナルのことをエルダー・エターナルと称するのであれば、これはどういう名称でいうべきだろうか？ マナ配列といった明確に言語化できる部分とは違う、もっと何か漠然とした部分で自分とつながっているエターナルのことは。

「はい、今日はこれでおしまい。もう火傷の跡も治りかけてるしな」
ずぶり、と嫌な感触を残してミューギイの肉から手を引き抜く。すでに目視できる限りですら火傷の跡が目に見えて消えていくのがわかる。ごっそりと己の内から減った「星辰」の粒子を製造するために心臓が早鐘を鳴らしている。己のカロリーを消費しているのか急激にお腹が空いてくる。いつものことだ。これがあるから、ミューギイには申し訳なかったが夕飯を先に作ってから治させてもらった。治療そのものにはそこまで時間はかからないのが唯一の救いではあるが。

それでも待たせてしまったことに変わりはない。
なので謝る。

「ごめんな、夕飯遅くなっちゃって」

「別にいい」

それより明日のことだけど、なんていうミューギイ。その瞳はいたって真面目で。いつも通りの無表情ではあるのだが。

「珍しいな。ミューが『次の日の予定』を口にするなんて」

ミューは大体が行き当たりばったりなので、翌日の予定なんでも基本的には存在しない。せいぜい毎日のように食べるご飯と、俺との修行程度だろうか？ そんな彼女が翌日の予定なんてものを口にしたことがちよつと驚きだった。

「うん。これに関しては大事なことから」

そうして頷いたミューギイを促すと

「ユーリの両親に挨拶したい」

「……………え？」

「ユーリの両親に『息子さんを私にください』って言いに行きたい」

「……………え？」

「さつき、死亡フラグ？ のそれで言った『ボク、この戦いが終わった

「ら結婚するんだ』ってこと。その報告に行きたい」

「いやいやいやいや。あれは別に本当に結婚するって意味じゃないからな。ただ、死亡フラグっていう、物語的に死ぬことが決まっているキャラに深みを出す発言の一例ってだけだからな？ わざわざ死亡フラグを立てたからって本当にその宣言を実行しなくてもいいんだぞ？」

「そうなの？」

「そうなの」

何も知らないミュー相手に死亡フラグについての説明で一番最初にあれを教えたのは失敗だったか？ いや、どっちかって言うとなあれか。あの時に誰と結婚するのかなんて突っ込んだ質問をしたのが間違いだっただか。

「なら、いや」

「うん、そっちの方がいいぞ」

ユーフィーと初めて出会うのはアガステイア^{この世界}であってほしい。何が悲しくて、第三章の中核となる人物たちの出会いを「弟の嫁として挨拶にやって来ました」なんて形で行わないといけないのだ。……それに、俺も彼女も互いに恋愛感情のようなものは持っていない。だから、こういう形での結婚はダメだろう。前世から守り抜いて来た童貞とファーストキスはちゃんと惚れた女に捧げたい。男がそんなことを言っているのは気持ち悪いと言われるかもしれないけれど、それが俺の隠すことなき本心である。

「でもそうなるって明日何をしよう？」

「今日できなかつたぶんの訓練」

間髪入れずに返答。ミューギイ同士の戦闘。ならびにその治療のために今日の分の訓練はできなかつた。最初、ミューギイとの戦闘が入らなかつたなら明日は休む予定だったのだが、こうなつては仕方がないと思っている。

夕飯を終える。風呂は、未だ完全な治癒が終わっていないためにミューギイは入らず。基本的には彼女の髪を洗うために一緒に入っている俺も、今日は入らず、二人でそのままベッドの中へと。

「ん」

「うん……」

夜になると、俺たちの立場は逆転する。普段、面倒を見ている俺は、この時間帯だけは彼女に甘えることになる。俺を迎え入れるように腕を広げているミュージイに正面から抱きつく。彼女は、それを迎え入れてくれる。

彼女と出会ってから理解したことだが、俺はあの時の一件がトラウマのようだ。リルの犯された後の死体と、ノワールのものと思しき死体。あれらを見たせいで、どうしようもなく知り合いが今もお生きているのか不安になる。その相手が生きていることを確認しないと、まともに眠れない。これまでは悪夢を見るせいで眠りが浅いだけだったのだが、それが今では眠れないという位置にまできているのだから大したものだ。

「大丈夫、ボクは生きてるから」

だから、今日も触れ合う。彼女が生きていることを確認するよう。痛いくらいに強く。彼女は己の本能として自己否定が含まれているから、最終的にはどうしようもなく死のうとするのだろうけど、分離体を全て殺戮し終えるまでは、きつと彼女は死なないだろう。だから、今だけは安心して寄りかかれる。

「だから、安心して休んでいいよ」

その言葉とともに意識が沈んでいく。まどろみの中に落ちていく。父さん、母さん、ユーフィー、そういった相手の安否は心配で、けれどこれだけの期間家を空けているわけだから、今から戻ろうという気持ちにはなれない。少なくとも、テムオリンを一度殺してあの二人を殺した理由を聞き出すまでは戻れない。

こんなことになっているのも、ミュージイに会うまでは気がつかなかった。アガスティアというエターナルにも人間らしい生活を強要する世界だからこそ、眠りにつく必要もあって、そうして初めて気がついた代物。

「お休み、ユーリ」

彼女の温もりに溺れながら、一時の眠りにつくのだった。



「もう、ユーリはどこで油売ってるのかなあ……」

ママが作ってくれた二頭身のユーリ人形の後頭部に顔を埋めながら呟く。あたしから溢れ出るお姉ちゃん力と常日頃から最高品質を保つために込めていたマナの影響でユーリの魂が中に入って動くようになったユーリ人形も特に逃れようとすることなく、お姉ちゃんのお願いを聞いて大人しくしてくれている。これはこれでユーリだからいいものだけれど、やはり本物のユーリが恋しい。早く体も取り戻してあげないとなあ。

世界ごとに時間の流れが違うのもいだけない。あたしはこの世界で五百年近く……ユーリが連れ去られてから四百年以上の時間を過ごしたのだと言っても、もしかしたらユーリはすでに千年近く過ごしているのかもしれない。そうなるにあたしがお姉ちゃんだというのに、弟よりも年下になってしまいかもしれないだ。そんな、打算的な思いもちよつとありながらもユーリ人形を抱きしめて精神の安定を図る。

「ユーリも早くお姉ちゃんに会いたいよねー？」

こくこくと頷いてくれるユーリ人形。やっぱりだ。ユーリもあたしに会いたいと思ってくれているみたい。それなのに帰ってこられないというのは、洗脳されているからなんだと思う。あたしのお姉ちゃんパワーでユーリの意識だけはこつちに持ち帰ってこられたのに、本体が帰ってこられないのは許せない。やっぱり法王を殺さないことには話が始まらない。……まだ、どつちも見つかつてないらしい。きつと法王がユーリをまだ洗脳しきれてないから、表舞台には出せないんだろう。今のうちに見つけないとダメなのに、それなのにあたしはまだ法王に勝てない。勝てないだけならまだいいけど、あたしまで捕まつてパパとママを悲しませるわけにはいかない。

「……ってあれ、なんだか下が騒がしいね？ 行ってみよつか」

コクリと頷いて、あたしの腕の中からぴよんと降りるユーリ。人形の姿になって喋れなくなってもユーリはあたしの弟だ。言いたいことはわかる。自分が見に行くからちよつと待っててということだろう。

「だーめ。また攫われちゃったらどうするの？ パパとママはお出かけするって言ってなかったけど、もしかしたら泥棒が入ってきたのかもしれないよ」

しゅんとするユーリ。でも、人形になつてまであたしのことを思ってくれているユーリを手放すわけにはいかない。絶対に、攫わせたりしないんだ。あたしはユーリのが大好きで、ユーリもあたしのが大好き。もう、離れる理由なんてない。ユーリと一生一緒に暮らすって決めている。それこそ子供だって……

「……って……かー」

「うん……」

「よ……なら……」

部屋からパパとママと、それと聞いたことのない人の声が聞こえてくる。なんだかパパとママが驚いているようで、でもどこか嬉しそうで、一体何があつたんだろう。こんなに嬉しそうな二人の声なんて、一体いつ以来に聞くだろうか？ ユーリがいなくなる前だとは思うけれど……。

「それで、ユーリはどこにいるんだ!？」

そんなことを思いながらリビングに近づいて行くと、パパのそんな声が聞こえてきて頭の中が真っ白になった。

「え……？」

ユーリが見つかった？ どこで？ いつ？ いろんなことがぐるぐると頭の中を駆け巡って、どんな反応をすればいいのかわからない。まだ、リビングに入っていないからパパとママには気づかれてない。場所を聞き出したなら、すぐにでも向かわないと。次、いつ見つかるかなんてわからないんだから。

「落ち着きなよ、ユウト。まだユーリくんがそこにいるかどうかはわ

からない。それに、もしもいたとしても洗脳されていた場合は、君たちと触れ合わせて意識が戻るようなことには向こうが絶対にさせないと思う。まずは僕が確認してくるよ。それで、ユーリくんだと判断できたらそのまま気絶させて連れ帰ってくる。君たちとは違って、僕相手だったなら洗脳したユーリくんを人質にしても無駄だと思われるだろうからね」

「っ……！……頼んだ。絶対に、傷をつけるなよ……！」

「わかってるよ。……ああ、それと君の娘さん。彼女にも内緒にしておきたいから、ちよつと任務を与えたいんだけど」

「ユーフィーに？」

「そう。まだ見つかってないってことになってるのにユウトたちが落ち着いていたら変に思われるだろう？ 君、そこまで隠し事には向いてなさそうだし」

「ん、それはわかる」

「アセリア!？」

「それに、彼女に見つかったってことを知られると厄介なことになりそうだっていうのがトキミの話だし」

「……わかった。それで、どういう任務なんだ？」

それはね。なんて言っている扉の向こう側の人。正直に言ってあたしも迎えに行きたいけど、ユーリが確実に帰ってくるのがあの扉の向こうにいる人に任せられた場合なら、今だけはあの人に譲ってあげてもいいかなって思う。ユーリが帰ってくればこれから先ずつと一緒に、お姉ちゃんらしいところを見せる機会もたくさんある。

「君の故郷、時間樹エト・カ・リファにある永遠神剣第一位『叢雲』の解放だよ」

281年目 アガステイア

「何やってんのさ、ミュー」

「……何やってるんだろう？」

「いや、俺に聞かれても困るんだけど」

訓練を終えた後、珍しく別行動したいとミューギイに言われたので成長したのかな、と思っていたのだが、そうして一人で歩いていると何をしようかと悩んでしまい、たまたまぼうつとしていたミューギイを発見して声をかけた。ミューギイは爽やかな風が吹く草原……と言えるほどのものではない、ただの土手で寝転がっていたのだが、草の感触や浴びる陽光といった様々な要素が複雑に絡み合って、至高の日向ぼっこが行える空間になっていた。そのこともあつてか発見した時点でミューギイは眠たそうにしている、このまま放置していればすぐにでも寝そうな状態だ。

スカートのまま横になっているので土手の下にいるガキ共がスカートの中を覗こうと必死になっている。バレないようにこっそりと視線を逸らしているフリをしながらも、目線が完全にスカートの中に向いている。そいつらを殺意を込めた眼光で睨み、ある程度は散らすことに成功したが、一部の社会的地位のありそうなおっさんたちがこちらを睨み返してくる。ミューギイは見た目的にはまだ童女。そんな少女の下着を覗こうとするなんてあいつらはロリコンかつ変質者だと断定し、瞬間的に引き出した「星辰」の力によってわずかばかりの強化を受けた左腕で拾った小石を投げる。

多少の威力減衰はあれど、たかが人間数匹程度ならこれで十分。この場にいた変質者たちが全員空の彼方に飛んでいったところで、残りのまともな人たちが人が空を飛ぶ光景を眺めて呆然としていた状態から立ち直り、拍手をしてくれる。どうやら、あいつらはこれまでも何人もの女兒を攫っていた変質者だったらしい。ありがとう、と言われるのも愛想笑いで受け取って、そのままミューギイを連れて少し離れる。

「何があつたの？」

「ミューの下着を覗こうとしてた変態がいたんだよ。あのままだと、ミューは多分飼われて、変質者の玩具になつてたんじゃないかな？」

ミューギイの質問に答える。この子には多少の情操教育はあるだろうけど、その実用性を理解していない今、これは悪い、これは恥ずかしい、なんて説明では納得を得られないだろう。だから、どちらかというところあの人はミューギイを自分のものにして自分の家に閉じ込めようとしていた、と説明した方が絶対に納得を得られる。ミューギイに説明するのであれば、分離体を殺害する上で邪魔になるような行動をしようとしていた、と。そう説明することが一番手取り早い。どうかこれまでもそうやって説明してきた。

「ん。ありがとう」

「いや、大したことはしてないよ。ただ、今度からはスカートの中が見えるかもしれない状態で横になるのはやめた方がいいかな」

「わかった。今度からはユリーと一緒にいる時だけにする」

「いや、俺と一緒にいる時もダメでしょ。スカートの中が見えるかもしれないんだし」

「でも、ユリーなら覗かないし、守ってくれるでしょ？」

「守るけど……」

「それに……」

「……ユリーになら見られても、飼われてもいいかなくて。」

しなやかな猫のように、さらりと距離を詰めたミューギイが耳元で普段の無表情とは全く違う、ある種の色気に満ちた声音で囁いたことで、彼女が自分に比べて精神的には遥かに童女であるということを一瞬忘れてどきりと心臓が高鳴った。

「今のボク、多分ユリーがいないと生きていけないし」

「そりゃ言い過ぎだろ……生活能力がないのは知ってるけど」

「そういう部分じゃなくて……見せた方がわかりやすいかな」

見てて、と言って手を差し出してくるミューギイ。その真白の手をじっと見つめる。ん、と少し力んだ彼女の手を、ほんのりと淡い燐光が包み込む。

「それって……!」

「うん。多分、『星辰』のあれ」

そこから感じ取ることのできる力は、比べるのもおこがましいが確かに俺の内側から溢れる「星辰」と同質の力。わずかながらに、彼女の肉体にも「星辰」による強化というべきか。あるいは汚染というべきか。そういった代物が走っていることがその手のひらから読み取れたのだ。

「大丈夫なの？ 変なところとかない？ 『星辰』の能力を俺以外が使った時に体が耐え切れるかどうか……」

「大丈夫。これは治療に回されてた『星辰』が『この肉体でも自分を扱える』って判断したからだと思うし。実際、今は骨も肉も全部『星辰』で一度繋がれて、その粒子に順応した体になってるから」

「……そういうのってわかるもんなの？」

「わかる。感覚的なものだけど、今のボクは『星辰』を通じてユーリと繋がりができてる。その気になればユーリからボクに『星辰』の強化を回せるし、今も少しだけけど『星辰』の粒子は流れ込んできている。代わりに、ユーリから離れ過ぎて、それこそ同じ世界にいなくなったら、体を繋いでいる『星辰』が尽きて補給ができなくなっちゃって、これまで『星辰』で治療した怪我が全部復活して死ぬってことも」

「……なるほど」

そんなことになっているとは思ってもよらなかった。彼女の生殺与奪を自分が握っているなんて。元から彼女のことを放っては置けなかったから、「悠久のユーフォリア」が始まる数年前ぐらいまでは一緒にいるつもりだったけど、これで俺も常にユーフィーに見つかる危険性を持ちながらこの世界にいるしかなくなった。

「だから必然的に、今のユーリはボクの命を握っている状態。それなら、ユーリに飼われているのと同じかなって」

「……それは、そうかも？」

なんだか言われてみるとそんな気がしてきた。うん、そうだ。確かに今の彼女の生殺与奪権を俺が握っている。それはつまり、そんなつもりがなくても俺がこの世界を出て行こうと思ったら、それはつまり彼女に「俺についてきてくれるよな？」（ついてこなかったら死ぬだけ

「だけど」と言うようなものだ。そうしないと永劫、テムオリンを探しに行けない。

彼女にはかつて、テムオリンを探しているという話をしたことがある。だからきつと、俺がいずれこの世界を出て行こうとするとは知っているはずだ。それなのに、その会話を彼女の方から切り出さないとするのは

彼女は俺が出て行く時に死ぬことを良しとしているのか。

あるいは――

「もしも、その時が来たらどうするの?」

どちらにせよ、知っておかなければならない。彼女が死ぬことを良しとするのか、それともアガスティアという、ミューギイの分離体が発生した世界を出ることを良しとせず、俺が出て行けないようになるのか、あるいはそれとも別の手段を講じるのか。

頭の中で考えていたせい、そのまま口に出してしまった。“その時”なんて表現をされても俺にあらざる彼女にはきつと伝わりつこないというのに。

なのに

「もちろんついて行くよ?」

彼女はそれを理解しただけではなく、俺の想像していた中でも絶対にありえないと思われる答えを口にした。

「今のボクは、もうユーリのもの。ユーリがどこかに行くならついて行くだけ」

「でも、そうしたらミューがミューギイを殺せないぞ?」

「アガスティアでただ発生を待ち続けるだけよりも、ユーリと旅をしてしばらくしたら戻ってくる方が建設的かなって」

戻ってこない、なんて選択肢はない。そう信じているからこそその宣言。誕生したら即座に殺しに行くのでは誕生までの間が暇になってしまう。その時間を有効に活用するためにこそ、己はついて行くつもりだと。ミューギイは、ミューギイを殺しに行くことになった時に俺がついて行くことを心の底から信じているからこそそう宣言できたのだ。

「付いて来て、くれるんでしょ？」

「そりゃ付いていくけど……」

ミューギイはそれでいいのだろうか、と思わないでもなかった。これまで『離れるという選択肢存在する』状況下で『離れない』という選択を取っていた。けれど今回、俺の方から「星辰」による治療という形で『離れる』という選択肢を奪い取ってしまった。これでは俺がかつてユーフィーと行動を常に共にさせられていた期間と何も変わらない。しかも今度は、俺が加害者だ。それは、個人的には納得がいかない。

「ミューギイはそれでいいの？」

「うん。以前言ってたユーリと結婚するっていうのが事実婚？　っていう形で実行されるだけだし」

「待って。そんなの誰から聞いたの？」

「町役場の役人さん」

「役人さーん!？」

きらり、と空でサムズアップしている役人さんが見えた。別に死んでないはずなのに。

「それに、ユーリとなら夫婦になっても問題ない。変態じゃないんでしょ？」

「そうだけど……」

「だったら結婚でも飼われるのでも一緒にいることに変わりないから……」

「その二つには大きな違いがあると思うんだけど」

今も土手で座っているミューギイの横に腰を下ろす。俺が座ったことを確認した途端、ミューギイが左手で俺の左手を掴んでそのまま後ろに倒れこむ。うお、っと声を漏らしながらもミューギイにのしかかることのないように手を顔の横につけて、股の間に足を片方入れる。典型的な壁ドン——この場合は床ドンになるだろうか——の格好になっていた。

咎めるような視線を送るも、無表情な彼女の口元がわずかに緩んでいるように見えるので毒気を抜かれる。まあ、確かにこの格好であれ

ばミュージイの下着がスカートの中から覗くようなことはないの
問題は無いはずだ。

俺がこんな、公然の場で少女を襲おうとしている変態を見るような
目で見られること以外は。

「結婚生活に関しては大丈夫。肉屋さんの店主の奥さんとか、魚屋さ
んの店主の奥さんとかが教えてくれた。さらにそこに騒ぎを聞きつ
けた店主もやってきて本当に色々」と

「あ、うん。そうなんだ。……なんでそんなことを聞いたの？」

「聞いてないよ？　ただ、向こうからユーリとの生活はどうなのかっ
て聞かれた。それで、ユーリの作るご飯が美味しいって話をした
ら、マリッジブルー？　っていうのがどうのこうのって話をし始め
て、それがよくわからなかったから聞いたら、結婚生活についての話
をたくさんしてくれた」

だから今のボクは結婚生活のエキスパート。なんて言っていない胸
を張り、ドヤアと無表情のままながらも自慢げな彼女にほんわかと暖
かい気持ちで胸が満たされるが、それはそれ。とりあえず俺と彼女は
結婚していいし

恋愛感情を互いに抱いているのが俺の中では結婚するときの条件
である。

俺のそれは多分愛ではあっても恋ではない。それも、親が我が子に
向ける愛情に近いもの。本当の意味での親子ではないのでたまに
どきりとさせられることもあるけれど。それでも彼女の成長に微笑
ましいものを感じていられるのだから、きつと俺は彼女に対して抱く
ものに恋はないと思う。

なので。

「結婚に関してはともかくとして、とりあえずそろそろ帰ろっか？」
今日も今日とて手を繋いで。親子がそうするようにして家へと帰
る。

281年目 アガステイア コアラな女

「ちよつとそこまで出かけてくる」

「ん、行ってらっしゃい」

そう言つて、ミューギイと会話をしながら家を出る準備をする。今はまだ早朝。これまでならミューギイの分の朝食を用意し始めるような時間帯なのだが、最近になつてはミューギイも“結婚”という言葉葉を己の口から吐いたことで、わずかばかりではあるが家事に興味を見出してきた。おかげで、こうして一食程度であれば準備を任せることはできる。この国ではおばちゃんたちの井戸端会議でかなりの頻度で生活に使える玄人のテクニクと呼べるものがでてくる。一応、稼ぎは俺の持つている貴金属であり、そして家事も俺が行なつていてということを知っている近所のおばちゃんたちは少しでも負担を減らしたいという俺の意思に答えてくれて、色々と教えてくれるのだ。

それを、あとでミューギイにもわかるようにして教え込む工程がなかなか難しいのだが。

「ミューも早くまともに飯を作れるようになるといいな」

「……難しい」

「そうか？ 料理つて考えるから難しいんだろ」

ミューギイに教えるにはコツがある。具体的には、ミューギイという存在が他の己を殺すことにご執心なので、戦いに交えた形で教える必要がある。それを、本人が無理矢理に家事という別次元のそれで考えようとしているから、彼女にとってそれが難しいことのように思えてしまうのだろう。

「いいか？ いつも言ってるけどあれは食材じゃない、死体だ。ミューは、これから死体を取り込むために普段ミューギイを相手にやっているように解体するんだ。そして、解体する場合には解体の手順つてもものがある。取り込むために必要な工程つて考えれば普通に行けるんじゃないか？ これまでも血肉を切り裂くことを工程としてミューギイ相手にやってきてたわけだし」

「ん……頑張る！」

ぐつと握りこぶしを胸の前で作るミューギイ。これまでの彼女にはありえないあざとすぎる行動に対して、一体誰に教わったのかを尋ねてみると、三丁目のおばさんらしい。『これでユーリ君もイチコロよ！』なんて言つてたらしいのであとで一度説教しておこう、うちのミューに変なことを教えないでくださいと。

何だか思考が母親じみているような気がしてきたが、別にミューギイの母親ということではないのだ。昔からなんだか放つてはおけなかつたせいで世話を焼いて兄妹、あるいは親子。そんな関係に近い精神性を築いていることには変わりないが、それでも俺と彼女は血の繋がらない同年代の男女という一緒に暮らさせるには一番まずい間柄なのだ。

とは言つても、俺たちの間にそういった感情がないことはあの人たちもわかつているはずだ。そもそも見た目で言えば俺たちはまだ子供。多分、あの結婚関係の話も「私僕、大きくなつたら〜と結婚する〜」の延長線上の話ではないのだろうか、と感じている。

最近、「星辰」がミューギイの体に宿つたせいでこれまでに築いた関係性も微妙に変化が起きているのは確かなのだが。

家を出る。ミューギイに送り出されて、外の空気を目一杯に吸い込む。普段は家で家事をしていることが多いので、こうやって朝から新鮮な空気を吸えるのは珍しい。しかしながら考えるのは俺が今日こんな朝早くから家を出る必要になつた原因のこと。

「あの神剣反応……確実にあいつのだ……！」

考えるまでもない。一年、それだけの期間を共に過ごしたのだ。俺があいつを間違えることなんてない。……まあ、当人が隠すために色々細工をしていたら話は別なのだが。例えば、誰かに自分の永遠神剣を持たせておくとか。あるいは、最初に出会ってから毎日漂わせていたのは自分が契約している永遠神剣とよく似た形状のものであつて、実際には永遠神剣第二位「秩序」を一度たりとも俺が見たことなかつた、とか。

そういう策を取られたなら、俺はこの神剣反応をかつて漂わせていた主、“法王”テムオリンを間違えることはあるかもしれない。

けれど、少なくとも今感じているのは、かつて出会った時に感知していた永遠神剣の反応。だからこそ、あれがテムオリンの契約していた永遠神剣であるのなら。きつとそこにはテムオリンがいるはずだ。そう信じて地上を駆ける。下手に空から向かって身動きを取れない状況を狙い撃ちにされたりしたら困る。ウイングハイロウがあるとはいえ、徒手空拳という武器の関係上、本気を引き出すのには地上の方が都合がいいのだ。

加速を重ねる。いつ門を開いてこの世界から逃げ出すのかわかったものではない。その前に確実に捉えて殺して話を聞かないと。

その一念だけで第三宇宙速度を上回りながら疾走し、テムオリンの神剣反応があった場所へと向かう。ミューギイはミューギイの反応ではないからと特に興味を抱いていなかった。今回に関しては特に連れて行くようなことはしない。

そうやって草原を、舗装された道を、王都の中を、全力以上の力で破壊する嵐の暴威と化して駆け抜け、その反応があった場所へとたどり着いた。周囲を見渡す。未だに反応があることからこの場にテムオリンがいるはずだと信じて。そうして探すこと十秒足らず。とうかぐるりと首を一周させたらそれだけで十分に見つかった。

「……」法王「テムオリン」

「ええ、久しぶりですわね、ユーリ。……昔のように、テムと呼ばなくてもいいんですの?」

「今の俺たちはそういう仲間でもないだろう」

言外に、ノワールたちの時のことをほのめかす。あれによって俺たちはすでに『友人』から『友を殺された被害者と殺した加害者』の関係性を追加されて、確かに友情を感じながらも友情という言葉を理由に彼女のことを無条件に受け入れられるだけの度量は削られていた。……元から法王だからと、そこまで信用していなかった俺がいうのはおかしいかもしれないが、それでも彼女から友人と呼ばれた、最後に会った時のあれは嬉しかったことには違いない。

「答えろ、テムオリン。どうしてあの時、ノワールたちを殺した」

殺してから話を聞く、なんて言ったのに。舌の根も乾かぬうちにこ

うして尋ねている。友情、というもののせいだろうか。両親の敵で、生まれた時からカオス・エターナル側にいた俺からしたら敵で、そして友人を殺した敵で、友人の恋人を辱めた上で殺した敵なのに。かつての友情のせいで今もなお殺しに行けなかった。

「ふふっ……理由ですか。あなたのことを知りたかったから、というのではダメですか？」

「俺を……？」

詰問のようなそれ。けれど彼女にとっては子犬がきやんきやん鳴いているのと同じ程度の効果しかないのであろうそれを、愛おしそうに笑った後にテムオリンはその理由を口にした。けれどそれは想定など一切していなかったもので。あってもマナ・ゴーレム技術を完成させないためだとか、そんな理由だと思っていた俺からすれば意味がわからないものだというほかない。……まさか、「あなたのことを知りたいの（はあと）」なんて気持ち悪い理由ではないだろうか。

「ええ。あなたは異常ですもの」

端的に、異常と断言された。異常な理由。確かにいくつかは思いつく。まずそもそもが転生者という俺の状態。それも、この世界に存在した存在の転生した姿ではなく、別の、この世界のことを観測できた世界から生まれ変わってきた存在であること。これが一番大きな異常。そして次にあげるのであればエターナルの間から生まれ、生まれながらのエターナルであったということ。

二つ目に関しては、そもそもそういった関係性のエターナルというのが一組しか存在しない関係で、エターナル間で子供を作った場合にどうなるのかの実験の結果としてこれが異常なのかどうか判断するのは難しいのだが。

「あなたは、何か」を知っている。その知識の源泉、それに興味がないとは言いませんけど、それよりもまずは『どこまで知っているのか』を知らなければどうしようもないでしょう？」

そんなことのために……？ 呆然と呟く。そんな俺の気持ちを察しているのかいないのか、けれど特に俺の状況を機にすることはなく、それを知らないことにはあなたを作戦に組み込めない、とテムオ

リンは嘆息しながら言う。

「あなたが性格からしてこう動く、と判断してもその内側にある
知^{ブラックボックス}識がどう作用するのかわからず、結果として私の想像外の行動を
とるかもしれない。そんな相手をそのままにしておけるわけがない
でしょう?」

拳を握る。そんなことのためにリルを殺したことが、どうしようも
なく許せない。ノワールはあの後どんな風に生きて死んだのか、それ
ともあの事件の時に一緒に死んでいたけれど、俺が出会ったタイミン
グではまだマナの霧に還っていないだけだったのか。その答えはも
う永遠にわからない。

けれど、その答えがどちらだったにせよ。もうこの時点である二人
の幸せな生活をこいつが奪ったことに変わりない。そしてこれから
先、テムオリンと出会えるとは限らない。故に、その責任はこの場で
取らせる。たとえ、俺の方が彼女よりも弱く、敗れることが必至だっ
たとしても。

「いいでしょう」

足に力を込めて、それを一気に解放する。拳をそれに合わせて突き
出し、テムオリンの体を穿つ流星と化す。拳によって撒き散らされる
破壊、そして相手の対処に対してさらなる対処を行うために常のよう
に「星辰」によって引き延ばされる体感時間の中、確かに俺は一つの
声を聞いた。

「友人が相手ですものね。手加減をする方が失礼というものでしょ
う。私も、久方ぶりに全力で戦わせてもらいますわよ」

その言葉と共に、「秩序」を構えるテムオリンの姿を認めて。



「えへへ。あたし、ユーフォリアって言います!それで、こっちは相
棒のゆうくんです」

そう言つてユーフォリアがむん、と力むと虚空から彼女の手の内に蒼穹の槍剣、永遠神剣第三位「悠久」が出現する。

そんな、元気に挨拶をするユーフォリアを見て旅団のメンバーはたいそう驚いていた。

こんな子供が、あの意念の光を弾き飛ばしたのか、と。

その神剣から感じている力の反応は確かに、旅団の誰のものよりも強い。

けれど、どうしても人というのは見た目が第一に来てしまい、そして神剣の強さがそのまま本人の実力に繋がるわけではないので、だからこそあの結果を見ていた人間は皆信じられないものを見るような目を一度して。

だから、直後にヤツイータからもたらされた、あの一撃を防いだ代償として一時的に記憶を失っているということに、驚愕の声を出してしまったにも関わらず、心のどこかに「流石にそれぐらいの代償はあったか」と納得する気持ちもあった。

「記憶がないのよ？ 不安じゃないの？」

「不安と言われましても……記憶がないので不安になるきっかけがつかめないというかなんというか」

そんな会話から数日。ユーフォリアの紹介も学園中に終わってしまったところで、その事件は起きた。

「私は妹じゃないですー！！！！」

「な、なんだあ!?!」

校舎の中を歩きながら学祭の準備の手伝いを行えるところを探していた望の耳に届いたのはユーフォリアの怒りの叫び声。

頭の上に乗っていたレーメも、急な叫びに驚いてずるりと顔の正面に落ちて来た。

「ほ、保健室の方からの叫び声だな、行くぞノゾム！」

「わかった！ でもとりあえずは顔から離れろ！ 前が見えない！」

望が叫ぶと、レーメもあつ、というような顔をして頭の上に戻る。

一階保健室にいるユーフォリア。

戦闘能力が高い彼女が暴れ出したらどう止めるべきなのか。

その答えが未だ見つかっていない中で起きた事件だった。

「何があっただんだ!？」

「の、望！ ユーフォリアちゃんが急に自分はお姉ちゃんなんだって叫び出して……」

「はあ……?」

その場にいた信介から望は事情を聞く。

来て数日であるにも関わらず、妹にしたいランキング第一位を獲得したユーフォリア。

そのことが当人にバレたところ、「ユーフォリアちゃんなら頼んだらお兄ちゃんお姉ちゃんって呼んでくれるんじゃないかなあ」と夢想していた一部の馬鹿たちの思惑が崩れるように『自分が姉である』ことを頑なに主張し始めたのだと。

「なんだそれ……」

「いや、これが事実なんだからしょうがないだろ。……ちなみに俺も投票した」

「お前もかよー!」

後ほど落ち着いたところで話を聞くと、弟がいたという記憶が戻ったという。

そんな、皆の妹ユーフィーちゃんの記憶が一部戻った、とある一幕。

281年目 アガスティア

握った拳を全力で走って距離を詰めて叩きつける。

たったそれだけの行動。それだけの行動であるにも関わらず、第三宇宙速度という尋常ではない速度で行われたそれは、加速による勢いも乗せて山河程度には止まらず世界そのものを破壊し尽くす一撃となるのではないかと見るものに思わせるだけの迫力と威力がその内側に込められていた。

十全たる殺意と共に放たれた拳は、たとえ友人であろうとも容赦はしないというユーリの意思をはつきりと示していて、まともに正面から受けるにはエターナルであつても難しい一撃。

「甘いすわよ」

それを、テムオリンは受け止めることはなく。

されど避けることもせず。

ただ純粹な技量だけで、完璧なカウンターを返していた。

「っ!」

己の拳の勢いをそのまま乗せた杖による一撃。

それを胴体に受けて初めて、これまでに倒して来た敵に与えたダメージの大きさを知ったユーリは、吐きそうになりながらも嘔吐感を堪え、ただひたすらに今の絶技を為し得たテムオリンの技術に驚愕する。

(なんだ、今の!? どうやってやった!?)

どう考えても第三宇宙速度というのは普通見切れるものではない。彼女の天敵である『時詠のトキミ』が行うタイムアクセラレイトであつても、現実に取り残された側はその速度の視認を行える。

なぜなら、人間の出せる速度というのは個人差はあれど基本的には限界値が存在して、人体である以上はエターナルであつてもその摂理からは逃れられない。

ユーリの父親、聖賢者ユウト。

彼はかつて人間だった頃、永遠神剣第四位「求め」と契約していた時分に、「求め」の力を引き出した時に駆けて、その速度を実際に隣を

走ること、「車を超える速度で走ってもまだ余裕がある」という形で表現していたことがある。

ユウトが駆け抜けることができた場所と考えればその車が走っていたのは公道、となれば車が出していい最高速度は大体が時速四十〜六十キロ程度。

ユーリが叩き出す第三宇宙速度はその速度の大体千二百〜千五百倍。

エターナルであつても普通であれば叩き出せる速度ではない。

（まともに戦つたら絶対負ける！ この速度を普通に対応できるテムオリンに、俺がまともにやっても勝ち筋なんてない！）

だからこそ、通常の身体能力だけで速度という概念におけるひとつの終着点であろう時深の時間ごと加速させればいいという代物、それを遙かに上回る速度を叩き出す自分を、完全に見切つてさらにはカウンターまで叩き込んだその研鑽を、自分では何万年経とうとたどり着けない境地だと認めることに対して、ユーリは否応なかった。

「あら、私に対応できるのがそんなに不思議ですか？」

「当然だろ」

にんまりとした笑顔を崩さないテムオリンにユーリは吐き捨てる。

この時点で、ユーリがもつ徒手空拳も投撃も、たとえそれが限界まで力を振り絞つたとしても彼女が対応できる速度にしかならないとわかってしまった以上は戦闘における使い物になるとは思えない。

勝ち目が完全に暗闇の底に消えていく姿を幻視して、けれどその瞳にはノワールたちの幸せを奪った罪を清算させてやると未だに戦意が燃えている。

（さて、どうやるべきか……）

「簡単なことですよ」

ユーリの持つ最大の一撃は、ントウシトラをかつてこの世界から消滅させた時の光の柱。

おそらくはあの一撃であれば届くのではないかとユーリは思っているが、あれを使つてしまえばそれから少しの間は一切の抵抗がでなくなってしまう。

そして、もしも効かなかった場合、あるいは躲された場合、それだけの時間があればテムオリンを逃すことになる、あるいは自分が捕まるか。

確実に彼女の目的を達成させてしまうことになる」と理解していた。
(いや、むしろこの状況もあいつの手の内か……?)

そうして考える中、この膠着状態こそが彼女の狙いかと訝しむが、そんなことには頓着せずにテムオリンは言葉を紡ぐ。

自分に対応できる理由が知られても何も問題ないというように。

「あなたが出せる速度を知っていて、あなたの癖を知っていて。それだけの情報があれば次にどこを狙うか、なんて十分に予測が付きますわ。あとはその場のノリで」

「その場のノリ」

「ええ。言っただでしょう？ あなたの癖を知っていると。だからあとは表情とか諸々の要素を複合させたその場のノリでどうにかかなります」

「へ、へえ……」

もはや何も言えなかった。

その場のノリ、というよくわからない代物によって無効化されるのであれば、本気で光の柱が通用しないのではないかという気持ちちがユーリの中では膨らんでいた。

(なら、もう一手何か欲しい……!)

けれどその弱気を振り払う。

自分と共に過ごした時間が彼女に動きを予測させるのであれば、彼女と時間を過ごしたことのない何者かの介入があれば、あるいは動きを予測されても何も問題ないほどの強者が加わればこの状況を脱することができると。

「……そういや、お前はなんでこの世界にいるんだ」

だから、ユーリは少しでも時間を稼ぐことにした。

実際、これ以上のこの世界で狼藉を働こうというのなら。

もしもノワールたちの眠りを邪魔するつもりなら。

自分が自分を抑えきれずに、勝算がないにも関わらずに特攻しかね

ないと理解しながらの、そんな行動だった。

「時間稼ぎのつもりですか？　まあそれぐらいなら付き合っただけですけど」

友人としてのサービスですわ、なんていうテムオリンにどの口でそんなことを思いながらも、その言葉を待つ。

「あなたを迎えに来た、というのが正しい答えですわね」

「迎えに……？　お前らのところになんて行くわけないだろ」

「私も、あなたを迎え入れることはないだろうと思っていましたけど。そういうわけにもいかなかったのだからしょうがないでしょう」

「なんだよそれ」

「以前、この世界であなたがントウシトラとタキオスの二人と同時戦闘した際、あなたントウシトラに何をしましたの？　あれからまともに機能しなくなつて、常にあなたを求めているんですけど……」

「……は？」

ユーリにはわけがわからなかった。

「というわけなので、ントウシトラをまともに機能させるためにも、あなたには捕まってもらいます」

「それを聞いて誰が捕まるか……！」

何をしたのかと訝しげなテムオリンに嘘はないと悟つてユーリは慄然としている。

ここで捕まったら絶対にントウシトラに掘られる。

状況はわからないが、求められているらしいという現実にかつて、共に暮らしていた時のユーフォリアのことを思い出して、それをントウシトラverで考えて、無駄に精度の高い未来を頭の中で夢想してしまい、捕まった未来の想像に顔を青くしながらも絶対に捕まつてなるものかと気炎を吐く。

「大丈夫、そのあたりはちゃんとあなたが使い物になるように。精神が崩れないように守って差し上げますから……」

「だ、誰が……！」

圧倒的な包容力。

菩薩のような微笑みとともに年の功とでもいうべき謎の包容力を

叩き出しているテムオリン。

一瞬ユーフォリアよりも姉っぽいのではないかと思いつつも、謎の悪寒を感じ取ってすぐに気を取りなおす。

「そっちについて行ったら絶対俺にひどいことするつもりだろ！」

「……エロ同人みたいに!!」

という叫びが後についてきそうな言葉であった。

もちろんユーリもわかっていたし、その場のノリで繋げてしまいうではあったが、幾ら何でも付き合ってもいない女性に対してそんな言葉を発するような変態ではないユーリは、後ろに続く言葉をしまいこんだが、それでもテムオリンというかつて友誼を結んだ相手だとわずかばかりの気安さや生来のノリが出てしまった。

もちろん、ントウシトラによる強姦という最悪の想像をしてしまったことも、勢いを保てなくなった原因ではあろうが。

「それがお望みならしてあげますわよ……? そうでないなら、私の子飼いとして常に侍らせるのもいいかもしれませんわね……ントウシトラに犯される事態だけは避けられますわよ」

(そういうことなら……いや、ダメだ! そんなことをしたらノワールたちに申し訳が立たないし、それに何より……)

ントウシトラに強姦されることを常に怯え続けながら生きて行く一生と、テムオリンの元で庇護を受けながら彼女がントウシトラに対するガードを行ってくれることである一定の期間は確実に守られる生活。

一瞬前者に落ちそうになるが、二つの理由からその思考を食い止める。

一つ目は当然のことながらノワールたちのこと。彼らから幸せな生活を奪ったロウ・エターナルに与することなどありえない、と。そんな理由。

そして二つ目は……

(ロウに行ったら確実にユーフィーに捕まる……!)

ロウ・エターナルに入るとなると確実に敵対することになるカオス・エターナル。

その一員であるユーフォリアと敵対することになった時、彼には逃げ出せる光景が思い描けなかった。

彼に対してだけ原作とは性格が違いすぎるユーフォリアは、彼に絶対的な恐怖を与えていたのだった。

ついでにもしもユーフォリアと出会わないようにしても、テムオリンとともにいることになる第三章「悠久のユーフォリア」で確実に出会ってしまう。

なのでやはり、ロウに着くという選択肢は取れないのであった。

「い、行かねえぞ！ 行ったら結局ユーフィーに捕まる未来しか見えないからな！」

「……あなたの姉、でしたか。そんな程度でしたら守って差し上げ……っ!？」

そうして否定した直後、やはり言葉で拐かそうとするテムオリンに、二つの攻撃が襲いかかる。

それをひらりと躲しながらも詰めようとしていた距離はさらに空き、そうしてできたユーリとテムオリンの中間地点に一人の少年と、そして童女が立つのだった。

「あはは、悪いけど。彼を連れて行かせるわけには行かないんだ」

「ユーリは私の。渡さない」

胡散臭いと思えない笑顔を浮かべた赤毛の少年と、漆黒と形容するほかない少女。

二人の名前を、ユーリは知っている。

片方に関しては今ともに過ごしている少女だ。

「ローガス……!」

「ミュー……なんでここに?」

テムオリンが赤毛の少年の名を呼んで、ユーリが漆黒の少女の名前を呼ぶ。

「ユーリを助けに来た」

「この子も同じ目的だったみたいだからね。協力しようと思って」

理由を話すミューギイに、ローガスも乗じる。

それを聞いて、ユーリは脱走生活の終わりを悟る。

少しばかり表情が死んだが、テムオリンに視線を向けている二人は気づかない。

「ユーリは渡さない」

「ユウトたちに必ず連れて帰るって約束したからね。悪いけど、この場は引いてもらえないかな？」

二人から神剣を向けられたテムオリンは、特にローガスの方を気にかける。

テムオリンの脳内でいかなる思考が働いたのかはわからないが、ため息を吐く姿からはこの場での行動は諦めたということがひしひしとわかる。

「仕方ありませんわね。さすがにあなたを敵に回すのは得策とは言えませんし……」

「それは良かった」

そう言い残してテムオリンは姿を消す。

それを確認した後、ローガスはユーリの方を向く。

「やあ、初めました。僕は永遠神剣第一位『運命』と契約しているローガス。一応、君のご両親とは知り合いだよ」

そして、胡散臭い笑みを浮かべたまま自己紹介をするのだった。

281年目

いやだ。

「それじゃ、ユウトたちのところに連れて帰るよ。抵抗するなら気絶させて連れ帰るからそのつもりで」

いやだ。

ユーフィーがどうなったのかわからない以上は帰りたくない。さすがに二百年以上も時間があつたんだから多少はまともになって、俺を襲う心配もなくなったのだと信じたんだけど。どうしてもあの時のユーフィーのちよつとばかり昏かった瞳を忘れられない。思い出ただけで震えてきた手を、目ざとく気づいたミューが握って微笑んでくれる。少しばかり落ち着いた。

「なあ、ローガスさん」

「ん？ ローガスでいいよ、別に。それでなんだい？」

「ユーフィー……俺の双子の姉が今どういう状況なのか知ってるか……？」

「ああ、彼女かい？ 彼女には今、君の父親であるユウトの出身世界が存在する時間樹、エト・カ・リファに行ってもらって、とある任務を遂行してもらっているよ。君が帰ってこないことを心配して、洗脳されたんじゃないか、とか色々と考えてロウ・エターナルへの殴り込みまで考えてたからね、あの娘。帰ったらちゃんと姿を見せてあげるんだよ」

「……………帰りたくねえ」

その言葉を聞いて帰ることへの抵抗が大きくなる。帰ったら絶対捕まるよこれ。けれどローガスはどうやらユーフィーの異常を知らないようで、疑問を抱いている。ミューギイがよくわからないままに手を握って落ち着けようとしてくれる姿が唯一の癒しである。

「まあ、そう言わずに。君の両親は君の帰りを時間樹エト・カ・リファで待ってるんだから。心配かけた分ちやんと怒られておくといいよ」

「……………父さんたちに怒られた後にまた旅に出たらダメか？」

「……………君、そんなにユーフォリアに会いたくないのかい？」

「以前、昏い目でずっと一緒だと言われたけど何か？」

そう言うのと哀れな生贄を見る目で見られたが、こいつはそもそも喜怒哀楽のうち「怒」と「哀」が消えているのではなかっただろうか。それとも哀れんでいるフリをして、その上で生贄を見る目だから問題ないのか。思い出すと体が勝手に震えてくる。ミューが頭を撫でてくれたのでちよつと落ち着いた。

「あはは。それだけ愛されてるってことじゃないか」

「重すぎて相手を傷つけかねないものを愛と呼んでいいものか……」

何気に、ローガスが初めて俺の家庭内での危機を把握してくれたエターナルかもしれない。他の面々は知っていないはずだ、ユーフィーがあんなことになってるなんて。

そんなことを思いながらもローガスに続いて門を潜る。逃げられないとわかってるから、諦めた。一緒にミューギイがいてくれるそうだし、彼女のことを頼らせてもらう。彼女の存在がこれからの地獄における唯一の清涼剤であり、おそらく彼女がいなければ自害を選ぶのではないだろうかと思うほどにはユーフィーのことを恐れていたし、それほどまでにミューギイの存在は大きかった。

「とりあえず、これから行く世界の気候に合わせた服装に変えてもらったわけだけど。今から行くのがどの世界かってことは説明しなかつたよね？」

「エト・カ・リファじゃないのか？」

「いいや、時間樹はそれであってるよ。君が行くことになる、その時間樹内部の世界……分枝世界のことを言ってるんだよ。君が行くのは、君がかつて行ったことのある世界。君が脱走を行なった『出雲』という組織が存在する、ハイペリアと呼ばれる世界だよ」

その言葉を聞いた時、俺は嫌そうな顔をしていたと思う。

「……逃げちゃダメか？」

「逃げちゃダメだよ」

即答。あー、とかうーとか言いながら、思い出すのはミューギイと出会う少し前のこと。一度、時深さんから連れ戻されそうになった時のこと。タイムアクセラレイトからのクリティカルワンをいずれ捕

まった時に受けることが確定した瞬間。そして今、俺は彼女が存在する世界に行こうとしている。これは殺されること間違いなしと思うと、どんどん逃げたくなってくる。

「大丈夫。ユーリはボクが守る」

「ミュー……」

そんなことを言うミューギイの服装は俗に言う童貞を殺す服。真白のブラウスに紺の膝丈のスカート。その服装を着こなすために概念情報を書き換えて年齢を十三程度にまでは引き上げている。幼いことに変わりないのだが、膨らみ始めた胸など、見た目にわかりやすい特徴を始めとして諸々の部分が童女から少女に変わりゆく世代特有の愛らしさと相まって、とんでもない色香を放っている。

「とうか一回殺された。即死だった。」

俺のことを思ってくれて……いるのだろうか？ まあ、とりあえず憎からず思ってくれていて。スキンシップ過多で。甘えることができる相手。……あと血が繋がってない。……血が！ 繋がってない！！ なんだ、この誰かが空想したかのような都合のいい女……。

ここで血が繋がってたら繋がってたでやっぱライトノベルとかでよくある展開ではあるけれど。それでも血は繋がってない。ユーフィーとは違う。

「なんだ、嫁じゃん。」

今も握られている手の柔らかさにうわーうわーと心の中で言っている。ついでにそれを見てニヤニヤしているローガスもいる。俺もちゃんと彼女の肉体年齢に合わせて十三程度にしている。もう父さんたちには嫁探しに行ってたでも言おうかなと思える程度にはミューギイが可愛くてしようがなかった。

「うん、大丈夫。ミューがいればどうにかなる」

けれど、とりあえずかわいい女の子の前では格好をつける男の習性とでもいうべきそれを使ってどうにか顔からはそんな状態を全く読み取れないように虚勢を張る。ローガスにはバレているような気がするが、うん。そこに関してはどうでもいい。こんな男に知られたところで別に何も問題は……

いや、あるな。

そういえばこいつ「サードデステイネーション」で父さんに対してユーフィーを任務に派遣したいという内容のそれを「娘さんを僕にください」とか言って説明してた、ということは今思い出した。最近、常日頃から思い出していたような内容でもない和前世のそれがなかなか思い出せない。

「よかった」

とは言ってもそんなことなど全く知らないミューギイは、俺の虚勢を見て最近豊かになつてきた表情のうち笑顔を見せる。へにやりと相手を崩したそれが、これまでの雰囲気とは・違いすぎて。こうしてミューギイの新しい姿を幾度も発見できることがとても嬉しい。ああ、多分こうして彼女の新しい姿を見ることが好きなんだなと思つて、

とりあえずその可愛さに悶絶した。

「どうしたの？」

こてんと首を傾げる仕草もこれまで通りのはずなのに。なぜか異様に可愛く感じる。一瞬息を飲んだせいで答えが返すことができなかった俺を見ながらローガスが笑う。

「あはは。ユーリはさつきから君が可愛くてしょうがないんだって」

「ローガス!!」

ブチギレである。手持ちの小石を全力投球。しかし彼がそこらへんで拾った木の枝によつて全て粉碎された。

「そうなの？」

「う……あ……はい」

じつと見つめる瞳は純粹で、嘘をついてしまえば一生ぬぐいきれない罪悪感に苛まれそう。そう思った、思ってしまった俺は、頷いてしまう。それを横で見ながら大爆笑しているローガスはいつか殺すとして、俺の返答を聞いたミューギイはそうと言って何度か頷いて。そしてそのまま俺の腕を取ってきた。

「ミュ、ミュー!?!」

「それなら、今から恋人。恋人ならこんなことをするのは普通って聞

いた」

「いや、なんで?!」

少なくとも、かわいいは感想でしかないはずだ。告白していないのにも関わらず、なぜに恋人ということになっているのか。……やはり、もつとちゃんと教えておくべきだったか。そうは思ったし、とつさに突っ込みも入れてしまったが、ミューギイは嬉しそうで否定する気にもなれない。

実際、嫌いではないのだ。可愛いとも思うし、それなら付き合わない理由がないと思われるかもしれないが、世の中そう簡単にはいかないのが現実。そうだ、間違えるな。確かに可愛いし、嫁にしたいなあとも思うけど、それはイコールで好きというわけではない。多分これは「あんな人がお嫁さんになってくれたら楽しいだろうな」みたいな感じだ。だってそうだろう？ 俺とミューギイの間には特別何かがあったわけでもなく。こう、父さんたちみたいな劇的な何かもなかった。

いつまで経っても心は前世のオタク気質だった俺のまま。だから自分が誰かに惚れるなら、やっぱり現実ではなかったような何か特別なイベントが欲しいなんて考え方。そんな考えをきつと捨てきれない。ゲームと同じように進んだ父さんたちという実例があるのだから、きつと何かがあるはずだ、なんて思ってしまった。だからどうにかしてミューギイに抱くこれを恋ではない何かだと否定しようとしている。

「……ぬ?」

ふと、考えが変な方向に至る。これは恋ではないのだと否定する材料を探そうとして、気づいてしまった。これまでの生活で、基本的にはミューギイの蓄えた知識というのは俺が与えたもの。たまに近所のおばさんとかがいることは確かだが、それでも大部分のミューギイ殺戮以外の知識は俺が与えた。……つまりこれは俺が光源氏の畜生になっていることの証明ではないかと。

「いや、流石にそんなことは……」

さらにそこから否定する材料を探そうとして発見できないことに

気がつく。ちよつと落ち込む。流石にそんなド畜生になっていたとは思つてもみなかった。

「あはは。とりあえずそろそろ着くよ。準備しな」

「……はーい」

「ん」

ローガスの言葉で気を取り直してエト・カ・リファの門を潜る。広がった景色は見覚えのあるコンクリートが敷かれた地面。二百年以上は前に見たのが最後の、現代日本の地面だった。アガスティアは石畳のそれが舗装された道だったから、こういうのを見るのは本当に久しぶりだ。わずかばかりの懐かしさを覚えながら、視線を前に向けるとそこには紅白が目立つ巫女さんが一人。その姿を確認して、ローガスの後ろに隠れる。彼であれば別に盾にしたところで何も心が痛まない。

「トキミ……君、何かしたのかい？ 彼、怯えてるけど」

「な、何もしてませんよ!？」

慌てる時深さん。……ほう、あれをなんでもないと称するか汝は。

「タイムアクセラレイト……」

「づつ……」

ぼそりと呟くと奇妙な声をあげて動きが止まった。ほらほら、時深さんですよーなんて言つてた彼女の動きが。自覚はあるようだ。ながらもつと攻めてあげるとしよう。

「クリティカルワン……」

ぼそりとさらに呟く。時深さんはまた奇妙な声をあげて、それによつてローガスも事情は分からずともタイムアクセラレイトとクリティカルワンに関して俺に対して何かしらの疑いは持ったようだ。

「何があつたのかは知らないけど、流石に子供に対してそれはダメじゃない?」

「よくわかんないけど、ユーリの敵ならボクの敵」

咎めるローガスと、俺が時深さんに対して向ける行動から敵だと判定したことで神剣を構えるミューギイ。この世界で流石にバンバン神剣を呼び出すのはまずい。そう思ったので

「ちよ、ちよつと待てミュー！ この世界で神剣を簡単に呼び出した
りしたらダメ！ 捕まつて一緒にいられなくなるぞ！」

「そうなの？」

「そうなの」

ならやめると剣を隠すミューギイ。ホツとした。けれどその状況
を見ていた時深さんからしたら、彼女が何者なのか分からないので疑
問符を浮かべた状態に。無駄に見た目はいいので小首を傾げるその
仕草だけで愛らしく感じてしまうのが憎い。

「えつと、そちらの子は……」

あ、まずい。名前を知ったら絶対にまずいことになる。だって
ミューギイだぞミューギイ。ロウの首魁と同じ名前のエターナル。
この時点でバレたらまずいとわかる。

「ボク？ ボクはミューギイ。永遠神剣第三位『絶炎』の担い手。
ミューギイ・ファナン」

すつと、時深さんの視線が剣呑なものになる。

「あと、ユーリのお嫁さん」

そして直後に続けられた言葉に時深さんの目が点になり、空気が一
瞬死んだ。

281年目 ハイペリア

時深さんが以前、俺のことを発見した時に彼女の目のうちにあつた不穏な光。その正体を時間があるときはたまに考えていたのだが、未だに分からないままだった。ただ、少し程度であれば予想をつけられることだつてある。

前世の記憶が正しく、そして今も反映され続けているという前提であれば今もまだ父さんに対して一途な思いを向けているという時深さん。信じたくはないけれど、あるいは俺という存在に対して逆光源氏的な何かを仕掛けようとしていたりしないよな、とか。そんな予想を。

そんな予想を俺に立てられているとはつゆ知らずの時深さん。彼女がミュージイの「俺の嫁」^{ユウリ}発言を聞いて固まったのは友人の息子にー今もなお自分には恋人すらいないにも関わらずー嫁ができていたことなのか。それとも逆光源氏に失敗したからなのかは見ただけでは分からない。そんな彼女が再起動を果たしたのは、本人の力ではなく外部からの干渉だった。

「あれ、時深さん。こんなところでどうしたんですか？」

その声の持ち主は少女だった。本来なら二人組であろう少女。その少女の頭には狂気の産物なぼりたんが鎮座している。この邪悪な存在に関してだけは父さんを恨みたくなるほど気持ち悪い。

高嶺佳織。父さん……聖賢者ユウトが人間だった頃、高嶺悠人だった頃の義理の妹。人間だった父さんがファンタズマゴリアに召喚され、そして戦うことになったとき、父さんに対する人質として機能していた少女であり、父さんがエターナルになる後押しをした人物でもある。つまり俺からすればおばさんという立ち位置にはなるのだが、彼女はそんなことを知る由も無い。

少しばかりの悲しさがありながらも、そんなことを表面に出すことはしない。だつて俺が知っていることを誰も知らないもの。

「あら、佳織さん。……いえ、知り合いの息子さんを少し預かっているだけですよ。とは言ってももう結構成長しているので面倒を見る、預

かるというのは正しくはないのかもしれませんが」

おぼさんの言葉によつて再起動を果たした時深さんは、無難な言葉を選ぶ。まあ、流石に自分の初恋の人の息子を預かっているとかなえませんがよねー。ついでに俺の左腕に抱きついているミューギイを見て何をどう邪推したのかキヤーキヤー叫んでいる。まあ、女の子から見たら異性に抱きついている見た目中学生程度って、そうとしか思えないもんね、ごめんね、でも恋人ですらないんだ。

「話が長くなりそうなら、僕が先に連れ帰っておこうか？」

「ああ、はい。そうですね。ならローガスにお願いして……はいけませんね。ナルカナ様がキレますし」

「……それもそうだ。負ける気はしないけどね」

「無駄に喧嘩を売らないでください、お願いですから。こっちはいい迷惑なんですよ」

そういうわけなので、と断りを入れて関係性を聞かれる俺とミューギイを脱出させる時深さん。今だけは感謝してもいいかもしれない。

「とりあえず、ユウトのところに行こうか」

ただしローガス、てめえはダメだ。

口を挟んできたローガスに、テムオリンとの戦いから救われたことへの礼はあれど、ユーフィーと出会うことになるであろう家族との面会とかいう地獄に連れてきたことへの怒りと殺意が混じり合って剣呑な視線を向ける。

「ははっ。諦めて、ユーフォリアと出会わないことを祈りながら『出雲』に行くといいさ」

「……逃げさせて」

「ほら、行きましょう？ あなたの両親が待っていますから」

「……タイムアクセラレイトしない？」

「しません」

「……クリティカルワンは？」

「しません」

「ユーフィーから守ってくれる？」

「……ユーフォリアと何があつたんですか？」

「一緒にいたら命の危機を感じる」

「なるほど」

多少子供っぽくなってしまったが、最後のそれにだけは無駄な重みがこもっていたと思う。あの愛ゆえの脅威は実際に受けてみないとわかりっこないだろう。俺が受けているこれは、時深さんが父さんを産まれる前からストーキングしていたようなものだから、守ってくれるなどとは信じないが。

ただ、俺の重々しい言葉に思わずといった様子で頷いた時深さんは守ることを約束してくれたのでついて行くことにした。あと、この会話の間参加できなかったミュージイが不満そうに手を握ってきてとても可愛かった。

そうして歩き始めてすぐ、『出雲』まで繋がる直通のイーテルジャンプ装置らしきものを発見する。そこに四人で入り、起動させて『出雲』までわずかな時間でたどり着いた。

「それじゃあ、僕はここでさよならだ。『叢雲』にバレると厄介なことになるかもしれないからね」

「ええ、ユーリ君を見つけてくれてありがとうございました」

「あはは。お礼ならテムオリンにも言っておけるといいよ。彼女と戦っていた最中だったからこうも簡単に捕まえられたわけだし」

「……」

「そんな嫌そうな顔しないで。これも嫌がらせだと思えばいいさ。『ありがとう。あなたがノロノロと時間をかけてくれたおかげでユーリくんが戻ってきました』って」

「……とりあえず捕まえてくれたお礼は今度会った時にでもさせてもらおうわ」

俺もそこに言葉を挟み、それに笑って、ローガスは門を通ってこの世界から出て行った。

「それじゃ、行きましようかユーリ君。あなたのお父さんたちが待っていますから」

「……はい」

頼むからユーフィーはいないでくれと祈りながら三人で出雲の内

へと至る木製の橋を渡り歩いて行く。こんな景色を見たことがないのかミューギイがきよろきよろと辺りを見回しているので多少は時間がかかったが、それでもたどり着いた玄関の前で、見覚えのある二つの影がそこにはあった。

「父さん、母さん」

「……おかえりユーリ」

「……ただいま」

父さんたちに抱きしめられ、そして何も文句を言わずにただ「おかえり」とだけ言ったことに罪悪感を感じて。けれどそれよりもまずはユーフィーがここにいないことにホツとした。

「悠人さん、アセリア。ちよつとユーリ君がいなくなっていた間のことと話をしておきたいんですが……」

そこに割り込むようにして、時深さんが二人に話しかける。きつとユーフィーのことを共通認識にしてくれるのだろう。ありがたい。これできつとユーフィーから守ってくれるはず。……それなら、家にもいいかなとは思う。

「ああ、うん。それはそれでいいけど。その前に……」

「そつちの子は誰？」

二人の視線が未だ俺の服の袖を掴んだままのミューギイに向かう。抱きしめたりしている時も俺の裾を掴んでいたものだから絵面としては少々間抜けなものになっていたが、今の今までよくもまあ口には出さなかったものだと思う。そんな思考をしているとは知らず、ミューギイはそれを聞いて一歩前に踏み出ていつものように自分が何者かを告げる。

「ボクはミューギイ。永遠神剣第三位『絶炎』の担い手で、ユーリのお嫁さん」

空気が凍る。いつものことだからもう慣れた。母さんはいつも通りだが、父さんの手が震え始めた。見た感じ汗も凄い勢いで流れている。何かあったのだろうか。別にユーフィーに彼氏ができたわけでもなかるうに。そんな震えている父さんは、その見た目のように震えた声で、ミューギイではなく俺の方を見て尋ねてきた。

「な、なあ、ユーリ。さすがにそれは嘘だよな？ まさか父さんたちが知らないうちに恋人を作ったり、ましてや結婚なんて……」

「嘘じゃない、本当のこと。だってユーリ、あの時否定しなかったもん」

「あの時……」

言われて、すぐに思い出した。俺と結婚すると言った時に、俺は『俺ぐらいしか交友関係ないからな』という趣旨の発言はしたが、その逆プロポーズを断った覚えがない。なるほど、だからか。けれどそういうことならと否定しようとしたが

「ユーリ、そんなに嫌？」

「嫌ってわけじゃ……」

ただ、恋人の過程とかが全て吹っ飛ばされていることが気にはなるが。別にミュージイと結婚するのが嫌なわけではない。嫌いではないし。

「だ、だめだ！ ユーリはまだ父さんたちと一緒に暮らすんだ!! いきなりポツと出てきた輩にうちの息子をやれるかあっ!!」

そこで、父さんが爆発した。どうやら親バカは俺に対しても働からしい。それを見て母さんが落ち着けと言って気絶させる。そしてミュージイのことを見て

「ミュージイ」

「……何？」

二人ともどちらかといえば物静かだからか、話も単語ごとになっている。

「ユーリのが好きか？」

こくりと間髪入れずに頷いたミュージイにこっちが恥ずかしくなる。

「一生一緒にいたいのか？」

さらにこれまた間髪入れずに頷いたミュージイのことを、恥ずかしくてもう直視できない。

「なら、ユーリにもそう思ってもらえるようにならないとな」
「ん」

恥ずかしさでいたたまれない気持ちになっていると、そこでようやくただ見守っていただけの時深さんが手をパンパンと打ち鳴らして介入してきた。

「アセリア、先ほども言いましたがユーリ君がいなくなってから起きたこと。特にユーフォリアの様子を知りたいんですが」

「ユーフィーの？　なんで？」

「……どうやらユーリ君が逃げたのは、ユーフォリアが関係ありそうな雰囲気だったので」

「！　……わかった。私でよければユーフィーのことを話す」

そう言つて、二人は父さんを起こしてから連れて行った。この場にはミューギイと俺だけが残される。さっきの告白があるからちよつと恥ずかしい。別にミューギイとなら一生一緒にいても問題はないのだが、「問題ない」と「一緒にいたい」だと話に大きな差がある。だからまだ領けない。

だからか、なんとなく何を話せばいいのかわからず、ミューギイも無言だったので気恥ずかしい雰囲気がその場には漂っていた。

一方その頃。

ユウトたちの間には信じられない、と言つた雰囲気が広がっていた。

「ユーフィーがまさかなあ……」

「ん。最近はユーリ人形を持って色々と話しかけていたりするから情緒不安定になったとは思ってたけど……」

「ユーリ君の話を感じるなら、ですけどね」

話の内容はユーフォリアの現在について。両親はユーフォリアがユーリがいなくなつてからユーリのおかしくなり始めたのは知っていたが、ユーリが戻つて来れば多少過保護になる程度で済むだろう、と思つてもいた。

まさか、順番が逆で。ユーリがいなくなつたからユーフォリアが異常にユーリを求め出したのではなく、ユーフォリアが異常だったから

ユーリがいなくなったのだとは思ってもよらなかった。

「でも、そうかあ……ユーフィーがなあ……」

「いや、そんな程度で済ませていいんですか!？」

「仕方ない。こればかりは」

焦る時深の前に、けれど二人が思い浮かべていたのは同じ人物のこと。

「いや、さすがに驚いたけど。それでも、俺は否定しなきゃいけないし、否定したいけど……」

「ユウトの場合はカオリのことがあったからな」

二人は血が繋がらないとはいえ本当に兄妹だった。そして、佳織が^兄悠人を愛したのは事実であり、だからこそ、ここでユーフィーが弟^兄に向ける思慕を、ただ端的に血が繋がっているからで切つていいものかと悩んでいた。

血が繋がらなくても、血が繋がっている^{きょうだい}兄妹・姉弟と何も変わらな^いというのなら、そこでは認められた愛を血が繋がったというだけで否定してもいいものかと。それでは血が繋がっている兄妹・姉弟と確かに違う部分を認めてしまうのではないかと。彼女と築いた関係性は普通のどこにでもある兄妹だったと信じているユウトは、その思いを嘘にしかねないそれを安易に口にしてもいいものかと。

そう、悩んでいた。

「……難しいですね」

「……難しいよな」

「……難しいな」

三人揃ってため息をついた。

281年目 出雲

「ユーリ!!」

数日後、ユーフィーといまだ出会ったことのない旅団の面々が「出雲」にたどり着いた時、まず最初に俺が見たのはユーフィーが俺の姿を認めるよりも早く俺の存在に気がついて突撃してくる姿だった。「星辰」によって強化された肉体を超えてダメージを与えてくるその突撃。奇声を発しながら勢いに負けてユーフィーに押し倒されるような形で地面に倒れこむ。

「ユ、ユーフィー……」

「もう、いつも言ってるでしょ？ お姉ちゃんって呼んでよー」

これまでにないほど、圧倒的な包容力を感じさせながらもいじける子供っぽさも同時に見せるユーフィー。その瞳にはこれまでのような邪悪な気配が全くない。逆になさすぎて、今もお姉ちゃんと呼んでもらえなくて悲しんでいるユーフィーが本当に本物なのか疑ってしまう。思わず二度見してしまう俺に、恥ずかしそうに照れたような表情でえへへと笑うユーフィー。……本気で誰だこいつ。

「ユーリ、何かあった？」

猜疑的な視線を向けていると、ユーフィーが恥ずかしそうに逸らしていた視線をこちらに向けて、じつと瞳の奥を見つめてくる。心の奥底まで暴かれているような心地になると共に、ユーフィーからのそんな発言。なんだか落ち込んでる気がする、と言ってくる彼女は、そのままよしよしと十三の見た目にしたことでわずかばかりユーフィーより背丈の大きな俺の頭を背伸びして撫でてくる。

「お姉ちゃんが聞いてあげるよー？」

本気でこれまでの時よりも姉っぽさが増している。後ろではもしもの時のために構えていた父さんたちが、あれじやまるでただの恋する乙女だぞ、とユーフィーの状態に俺とは別種の危機感を抱きながらも、見守っている。そんな中、苦笑い気味の旅団の面々。……これまでのユーフィーを知らない彼らが話しかけてきた。

「えっと、あなたがユーフォリアちゃんの弟さん？」

「ええ、はい。双子で生まれたんで、実際のところはどっちが上なのかは知りませんが。一応はユーフィーが自分が姉であることを強硬に主張し続けているので、そういうことになってます」

「もう、いい加減にお姉ちゃんって呼んでよ。これからずうっと一緒なんだから。お姉ちゃんの機嫌を損ねると怖いんだよー」

「具体的には」

「んとー……お世話してあげないっ!」

「いや、別に。家事とか普通にできるし、ユーフィーに面倒見てもらわなければならないけど」

えっ、と口にした後泣きそうになるユーフィー。どこからどう見てもただのブラコンの姉だ。これまでのそれとは違いすぎる。さっきのずつと一緒に関しても邪気を感じなかった。本気でどうなっているのか。……そういえば「聖なるかな」ではユーフィーは意念の光とぶつかって記憶を失っているはずだ。どうして俺のことを覚えているのだろうか？

「あつ、パパー! ママー!」

いや、両親のことも覚えていたみたいだし、この世界では記憶を失っていないのか? でもなんで? 父さんたちに抱きつきに行つたユーフィーを見送って旅団の人たちと話をすることにした。



それが

「どうしてこうなった……」

夜、ユーフィーと二人で同じ部屋になったので眩く。ユーフィーは楽しそうに布団を敷いているが、こちらとしては気が気ではない。両親も、旅団の面々からユーフィーが記憶を一部失っていると聞いて完全にキレてその原因たる意念の光を放った暁を殺そうとしていたが、それによって少々まともな状態になったユーフィーの「ユーリと二人

がいい！」なんてわがままを聞き届けたせいで貞操と人生の危機になっただけ。幸い、と言つてもいいのかは謎だが父さんたちも今のユーフィーと俺を二人きりにさせたら、いつ俺が恐怖していた状態に戻るのか不安でしょうがないようで、隣の部屋で眠ることにして今はミュージイからこれまでの話を聞いているようだ。

「なあに？ ユーリはお姉ちゃんと一緒なのは嫌？」

「いや、そういうわけじゃ……」

無論、かつてのユーフィーであれば絶対に嫌だと断言していたが、今のユーフィーは本当にただの姉のようで、命と貞操の危機を一切感じないためにそこまで逃げようとする気が出てこないのだ。そして、何より彼女が帰ってきたタイミングでミュージイは時深と洋服を買いに行っていたせいで、一言も彼女は会話をしていないために嫁がいることに対しての発言がないので、彼女が本当に元どおりなのかどうかを測れない。

なので、いまはもうこれ以上考えても無駄なので、「聖なるかな」原作がどこまで進んだのかを思い出す。世刻望という主人公も含めた全員がいたのだからおそらくはいまこの時点で十一章終了時点。ユーフィーが胸元に顔を埋めてくるのを感じながらもすーはー言ってるぐらいで実害がないので放置。下手に突っ込んでやぶ蛇になるのはごめんだ。

「お姉ちゃんね、ユーリがいないと安眠できないの」

ーーだから今日はお姉ちゃんに抱かれて。

蠱惑的な声音。血が繋がった相手だというのに一瞬魅了されたような気すらした。ユーフィーの顔は俺の胸に埋まっただけに見える。ユーリがお姉ちゃんを抱き枕になってくれるなら、お姉ちゃんもユーリの抱き枕になって、何か抱えてること聞いてあげるよ？」

「抱えてること……」

一つだけある。いや、正確には無数にあるが、今もなお心に残っている後悔と呼べるものはこれが一番大きい。……そうだ、これのせいでミュージイにも多大な迷惑をかけてきた。吐き出してしまえるのなら、それはそれでいいのかもしれない。今のユーフィーになら、吐

き出してもいいかもしれないと、そう思える。

「……友達が、いたんだ」

「うん」

だから、胸元に顔を埋めている彼女の髪の毛に頭を乗せて、言葉を口にしていた。その言葉に頷いてくれるだけというのがとても心地いい。

「その友達と一緒に行った世界で、そいつ好きな人を見つけたんだ」
「うん」

「相手も、友達のことを好きだったみたいで、俺はそいつらが幸せな生活をして、そして死んだ後にも別の世界に飛んで、また一人で過ごすうって思ってたんだ」

「……うん」

今度の返事は多少の遅れがあった。安眠できない、と言っていたから、それが関係するのだろうか。そこに関しては聞かないとわからないけれど、今の俺たちにとってはどうでもいいことだから放置する。

「そしたら、ある日ロウ・エターナルの連中が来たんだ。……俺はそいつらと戦って、それで負けた。その後、目を覚ましてそいつらのいるところにまで帰ったら、もう、死んでたんだ。友達の恋人なんか、人としての尊厳すら奪われてた」

「……うん」

「今もさ、思うんだよ。もしも俺がいなかったら、あの二人はやっぱ別の幸せを見つけられたんじゃないかなって。……あいつらの目的は、俺が友人を殺されたらどう反応するのかってことだったって、ここに来る直前に聞いたし。俺のせいで、負わなくてもいい不幸を背負って死んだんじゃないかなって……」

話は終わった。ノワールが、リルが死んだのは自分のせいだと、今も心の中に棘として残っている。言葉にしたらたったそれだけのことで、けれど俺からすれば何よりも大きなこと。俺のせいで、俺が存在したから不幸になった相手がいて、近い相手がそうになっているのか、殺されていないかという不安と、そこに原作知識という異物のせいで生まれた神剣宇宙を案じる心。……俺に近い人物は、主要人物が多いから。

「大丈夫……」

俺に抱きついて顔を埋めていたユーフィーが、俺にその視線を向け背中を回されていた小さな手で背中を撫でてくれる。なんだか、落ち着くような気がした。こんなこと、してもらったことはないはずなのに。

「ユーリがいなかったらまた別の幸せがあったかもしれないけど、それでもユーリと出会ったからそのお友達に恋人ができたことには変わりないんでしょ？　だったら、その二人は確かに幸せに終えることはできなかったけど、その過程は幸せだったんだよ」

「そう、かな……出会わなかった方が幸せな生活を送れてたかもしれないぞ？」

「それはわかんないよ。もしかしたらそうかもしれないけど、この世界には確かにユーリが存在しているのが現実だもん。少なくとも、あたしにはユーリがない幸せな生活なんて想像もつかないよ？」

今以上の幸せなんて思いつかないと言われて恥ずかしくはなるが、それでもその瞳に嘘はないことぐらいはわかる。これでも結構長いこと姉弟をしているのだ。それぐらいわからなくてどうする。

「……ありがと、姉さん」

こう呼ぶことに恥ずかしいという気持ちがないわけではない。けれど、今のユーフィーなら姉と。そう呼んでもいいかなと思えるだけの何かがある。だから、呼ぶことに躊躇はなかった。

「どういたしまして……えへへ。ようやくお姉ちゃんっぽいことできたかな？」

「うん、最高に姉っぽかった」

「普段頼ってくれないんだもん。こういうところで姉の面目躍如ってやっだよね」

「ほんとありがと……」

吐き出して、少し眠くなってきた。

「眠いの？　それならお姉ちゃんが子守唄歌ってあげよっか？」

「……別に、いいよ」

そうは言ったものの椅子に座り、その膝の上に座ったユーフィー。

彼女を抱きしめたこの状態で眠るわけにはいかない。立ち上がらないと、思いはするのだけれどユーフィーがどいてくれない。退くように言ってもさつき話を聞いたんだからそのまま抱き枕にされるらしく離してくれない。

「ユーリ、お布団に行きたい?」

「そうじゃなかったらどいてなんて言わないだろ……」

「あたしはこのままでもいいよ? ユーリのことを感じられるんだから、別にどっちでも……」

だからね、とユーフィーが俺のことを抱きしめていた腕を広げて、ねっ? と笑う。言いたいことはわかったが、こんなに姉っぽいところを見せた直後に子供っぽい部分を見せるのか、と少し苦笑してしまう。

「つまり、こういうことだろ……っ・」

「せーかいっ!」

ユーフィーの脇に手を入れて、そのまま持ち上げる。俗にいう抱っこ。首筋の匂いを嗅がれるのは変態っぽいけれど、やはり実害がないので無視。こんなところはまだ口を出してはきつといつまでたっても眠れない。今のユーフィーだったら、何かしら口に出すべきことは、手を出されそうになった時だけ。

そう思っって、喜ぶユーフィーを運びながら俺、二人で眠りにつくのだった。

281年目 出雲

その日の朝の朝の目覚めは、絹を裂いたような叫び声を少年が発したことで皆に訪れた。

「……それではこれより、家族会議を始めようと思う」

重苦しい声を絞り出しながら宣言するのは一家の大黒柱である聖賢者ユウト。彼の「聖賢」が持つ知識の中にもこの状況をうまく終息させる手段はありはしない。

「議題は……」

そう言つて、今この場にはいないユーリの代わりに動かなくなったユーリ人形を抱き締めているユーフォリアへと視線を向ける。なお、家族（予定）のミューギイも今この場にはいない。まだ家族ではないことと、ユーフォリアとの間に発生する化学反応を読みきれなかったこと、ユーリを精神的ショックから立ち直らせること、そういった諸々の理由の中でも最も大きいのは、今この状態で劇^{ユーリの嫁候補}物を投入するのは危険だとユウトが判断したからだった。

「今朝、目を覚ましたらユーリがユーフィーに襲われていた件について、だ」

朝にユーリの悲鳴を聞いて隣の部屋への扉を開けると、そこにはユーリの上に跨ったユーフォリアが秘部をユーリの逸物と結合させていたのだ。破瓜の血とユーリの精が混じった混合液が飛び散り、秘部から垂れている淫靡な様は、けれど両親にとつては関係なく、ただひたすらに止めさせるだけの代物でしかなかったが。

「とりあえず、ユーフィー。ユーリに手を出すのはやめておこうな？」

最初はやんわりと、けれどユーリ^{逆レで童貞を失った}の父親であるユウトは断固として告げる。それはいけないことだからやめておきなさい、と。朝起きて、ユーフォリアによる逆レイプを受けたユーリを見て、彼がユーフォリアに「俺の童貞を返して」と切実に叫んでいたことを見ていたからこそ、姉弟^{きょうだい}・兄妹^{いまい}での性行為に対する言及はともかく、せめて強姦するのはやめておきなさいとしつかりと言いつけさせる。

「家族^{パパとママ}がしてるのに、家^{あたしとユーリ}族^だだったらダメなんですか？」

「うっ……」

まさかすぎる言及。けれど性的な知識が遮断されている現状、あの行為が姉弟・兄妹で許されない理由が彼女にはわからない。そして何よりも、両親がしているのに、という言葉は当の両親にはインパクトがあつたようだ。

「ユーフィー。ユーリが叫んだ。あれじゃ、ユーリはしたくなかつたのに、ユーフィーが無理強いしたようにしか見えない。ちゃんとユーリに許可を取らないと」

「ママ……」

そしてこういう時に頼りになるのは母親。姉弟・兄妹でしていることを責めるのではなく、叫ばれるようなことをしたから怒られているのだと認識させればそれでいい。あとは人生経験を知らないところで積んでいたユーリがどうにかして断ってくれるだろうと。

「でも、ユーリのおそこ。窮屈そうだったし。……パパとママが前にベッドの上で話していたことを思い出して何か悪い病気なんじゃないかって。だから、あの時にパパとママがしてたことを……」

ユーフォリアのいう話の内容とは大人のお医者さんごっこである。そんなところまで見られる失態をこの夫婦は犯していたのである。もはやユウトは死に体。娘に自分たちの性行為を見られて平然としていられるほど天然ではなかった。普段から契約している永遠神剣には見られているくせに。

なので頼りになるのは母親のみ。彼女の発言によってユーリがこれ以上ユーフォリアに嬲られるかどうかが決まる。

「大丈夫。ユーリは病気じゃない」

「そう、なんですか？」

「ん。だから安心していい」

アセリアの無表情ながらも絶対の安心感を誇る声で言われて、良かったとこぼすユーフォリア。その表情からは本当に心の底からユーリのことを思っているようで、これまで口にされてきた「ユーフォリアやべえ」の片鱗すらない。二人には疑うつもりはないし、今もそれを信じているが、だが本当に？ という疑念が湧き出てこない

わけでもなかった。

「ユーリ。許してくれるかなあ……」

「ユーフィーがちゃんと謝れば許してくれる。ユーリもそのあたり頑固な子じゃないから」

「そう、ですよ。……ユーリとは一生一緒だもん。こんなことで避けられるようになったら嫌だもんね」

(あ……これか。ユーリが言っていたのは)

けれどそれも、どろりと、一瞬だけ目を覆った、純粹なまでのユーリを求める感情が形を成した濁りを見てその考えが間違っていたことを、父親の方は認めた。

「ユーリに謝ってこないと……!」

ユーフォリアは、ユーリが出かけたことを知らない。だから、そのままユーリを探しに行こうとして

「今、ユーリはミューと一緒に出かけてる」

「ミュー……? 誰ですか、それ?」

「ユーリの嫁候補」

そこで初めて、ユーリに嫁候補がいることを知った。

俯く。表情が伺えないことがこれほどの恐怖だったのかとユウトは初めて知った。そんなユーフォリアの様子を眺めて、彼女が何を言いつたのかによつては全力で止めないといけなさと決意した。

「ユ、ユーフィー……」

言葉にしようとする。まずは落ち着かせないことには話にならない。だからまずはなだめようと、言葉を紡ごうとしたところで

「あはっ」

たった一言。なんでもないはずの笑い声によつて紡ぐはずだった言葉を止められた。

「ママも冗談上手くなったんですね。ユーリにそんな相手いませんよ。だってユーリはあたしとずうっと一緒にいるんですもん」

場の空気が一瞬でユーフォリア一色に染まったことをユウトは理

解する。これはやべえ、マジやべえ、うちの娘マジでやばくない？
と多少性格的には合わないような発言すらしてしまいそうになる程、
恐ろしかった。

「冗談じゃない、ぞぞ？」

けれどアセリアは気にしない。気づいていないと言ってもいいか
もしれない。

「あはっ」

もう一度笑いをこぼして、ユーフォリアは俯いていた顔を上げて、
貼り付けたような笑顔で両親を見る。

「ちよっと今からユーリのこと探してきますね」

「お、おう………いつてらっしやい………」

「遅くならないようにな」

止められない。止めないと昼ドラの危機に発展するとわかってい
ても今のユウトにはユーフォリアが恐ろしすぎて止められない。飛
び出して『出雲』からドウムジャツジメントで飛んでいったユー
フォリアを見送って、それを見たのか時深や旅団の面々がやってきた
ところに一言。

「……俺は、無力だ」

一方その頃、肝心のユーリはというと

——室内に甘い声が響き渡る。

ピンクの光に照らされた室内で、幼い男女が交わり合う。どう考え
てもこの交わり合うことを目的とした施設を利用できないような見
た目の二人が。発情した雌の匂いが充満する室内にて少年が女体を

貪り、少女もそれを受け入れることであらゆる全てが混じりゆく。少年――ユーリは少女――ミューギイを、ただただ苦痛から逃れるように、忌むべき記憶を消失するために、我を忘れて犯していた。

ことの発端は今朝のこと。ユーリがユーフォリアに襲われた後にまで戻る。

あの後、ミューギイに連れられて外に出て。デートをしている最中に発見したのがラブホテル。ミューギイは特別その存在の意味を理解していたわけではなかったが、それでも持ち前の本能が「今のユーリにはまずいものだから」と離れようとして、そしてユーリからの頼みに押し切られてこの部屋にまでたどり着いた。

ユーリが求めたことは至極単純。己の初体験の恐怖を上書きしたいということ。そのためにミューギイに相手をしてもらうことに罪悪感がなかったわけではなかったが、ミューギイ自身がそれを良しとしたことで甘えている現状だった。

お互いがお互いを求めるように名前を呼んでは唇を重ねる。最初は何もかもよくわからずに戸惑い、流されるばかりであったミューギイも、今では自分から求めている。お互いの体内に巡る「星辰」の血中粒子が、それを己の半身だと認めて、補うように、同化するように、最も適した形へと二人の体を順応させていく。ミューギイはユーリを受け入れることにのみ特化した肉体へと変貌し、ユーリもまた己の半身をミューギイの内側に納めることだけに特化した形へと変化させる。

すでに裸身にはミューギイが誰のものか示すように幾度か射精された痕が見える。結合している秘部からも同様に。そしてミューギイの瞳にはすでに光がない。痛みには耐えられても快樂には耐えきれない。そして、快樂を与える人物が結婚したいと思えるような人物である以上、そもそも耐える必要もない。無駄にお節介な「星辰」が排卵も強制させて、すでに受精まで済ませていることなど知らない二人は、今もなお体力が尽きるまで交わり合う。

「ユー、リ……………！」

ミューギイが快樂を浴びながら名前を呼ぶ。愛する人物のために

なることができ、ユーリが嫌がっていたことから苦痛であると思っ
ていたことが悦楽へと置きかわり、我慢など一切する必要のないそれ
を懇願の色を乗せた潤んだ瞳と情欲に満ちた言葉で請う。

返事は、肉棒を動かすことで行われる。ユーリも未だ満足していな
い。もはや事ここに至ってはユーフォリアに襲われた経験の上書き
なんて理由はない。ただただこの悦楽に未だ耽っていたいと願うか
らこそその本能による行動。けれど、お互いにとってはそのだけでよ
かった。

饗宴は、未だ終わりを告げることはない。

281年

「……ユーリのほか、変態」

「いや、ミューも途中まで結構ノリノ……ごめんなさい」

ちよつと挙動不審なミューギイに涙目で睨まれて途中で言葉を止める。ユーフィーの説得を両親に任せて二人でデートしていたのだが、デートの最中にそのままラブホテルに入ってそれから一日、今の今までずっとセックスをしていた。何気に「星辰」が全力で働いて、常に精子を作り続けさせられたことに対しての不満の意を伝えて来るのだが、誰も頼んでいないことを勝手にしたからといって不満を叫ばれてもちよつと……

「これで、父さんたちにもいい報告ができそうだな」

「ん。お義父さんたちにもちゃんと挨拶しないと」

父さんはユーフィーには甘いけど、それでもやっていいこととダメなこと程度はちゃんと教えることができるはずだ。だからきつと、問題ないと信じている。帰ったら何も問題なく、ユーフィーを含めての平凡な生活が待っているのだと信じている。

信じていた、のに。

「ユーリ」

気づけば、隣にユーフィーが出現していた。すつと首筋に手を這わせている。恐ろしい。

「この子がユーリのお嫁さん？ お姉ちゃんに内緒で作った？」

「ん、よろしく、お義姉ちゃん」

「あはっ。……ユーリのお嫁さんにふさわしいか、あたしがちゃんと試してあげる」

瞳が笑っていない笑顔で、ユーフィーは眩く。すつと取り出された「悠久」は心なしか煤けて見えるが、多分目の錯覚だろう。それに対応するようにミューギイも「絶炎」を取り出す。そちらは気力も十分、実際に炎まで吐いている。

「ユーリ、ちよつと待っててね？ お姉ちゃん、この子と話し合わないといけないことがあるから」

「……なら神剣しまえよ」

話し合いなら絶対にいらねいだろ。そう思つての発言もスルーされて、ユーフィーはジリジリとミューギイとの距離を詰める。……仕方ない。ミューギイが危険だし、どうなるかわからないため封印していたあの手段を使うか。

「姉さん」

「なあに?」

「ミューとの仲、認めてくれないの?」

「認めると思う?」

見えない。圧倒的に見えない。拳で殴り合つて分かりあうのもいかとは思うが、殺し合いに至るとそれはダメだろう。言つて止まらないなら強制的に止めるしかあるまい。とは言つても、ユーフィーに対して俺が勝てる要素は一切ない。なので

「認めてくれないと、姉さんのこと嫌いになるよ?」

最後の手段。ユーフィーのブラコンっぷりに一縷の望みを託した。言葉を聞いて、じわりとユーフィーの瞳に涙が浮かぶ。「悠久」が投げ捨てられて空中で消失する。そのまま投げ捨てたユーフィーが俺に突進して抱きついてきた。

「だ、ダメえええ!!」

一触発の状況が瞬間的に解除される。ユーフィーが抱きつくのを目撃してただけのミューギイからすればよくわからないことだろうが、俺は賭けに勝つたのだ。

ユーフィーが俺を閉じ込めようとしていたりなんかやしようとしていたのはひとえに彼女が超絶ブラコンだったから。実際、昔にずっと一緒だのなんだの言つてたのも、覚えがある限りでは俺が一人で出歩けるようにするためだったはず。つまり、大元はブラコンなのだ、この子。ユーフィーが弟に嫌われても問題ない、自分が弟のために色々とやるんだ、系のブラコンだったら意味がなかったが、そうではなく俺が望んでることを全部叶えてあげるんだ系だったためにこの言葉が効いた。

「ユーリイ……お姉ちゃんのこと捨てないで……?」

あ、やべ。母さん譲りの美貌で潤んだ瞳の上目遣いは効く。一瞬ころつといきかけたけど、ミューギイのジト目で戻ってこれた。正面から抱きついてくるユーフィーのことを抱き返して耳元に口を近づける。ユーフィーの叫び声でやってきたおば様方が抱きしめ合っている俺たちを見てあらあらまああとつぶやいているが、別に俺とユーフィーはそういう関係ではない。

「なら、俺とミューの関係認めてくれる?」

俺の言葉に顔を胸元に埋めてうーうー唸り始めるユーフィーだが、やがて満を辞したかのようにそつと見上げて尋ねてくる。

「……なんであの子なの? お姉ちゃんじゃダメ?」
ダメです。

なんて一言で言っても納得しないだろうし、これで納得してくれる保証はないが、答えるぐらいはいいだろう。

「まず、俺は血の繋がった姉に欲情する変態じゃない」

「うっ……で、でも! それでもこの子と一緒にいる理由にはならな
いでしょ!?!」

「いや、ユーフィーみたいに閉じ込めようとするんじゃない、実際に
ロウに攫われそうになった時に助けてくれた相手だし」

「で、でもこんな短期間で……」

「ユーフィーよりも長く一緒に暮らしてたけど?」

ユーフィーとは三十年ほど、ミューギイとはすでに四十年ほど経っている。短期間というならユーフィーの方がそれっぽい。年月が大
事だと言うのなら、それこそユーフィーよりもミューギイの方がふさわ
しいのだ。

「……って、あれ? ロウに攫われそうになった?」

「うん、前に一回」

「……へえ、誰?」

「ん?」

「誰に攫われそうになったの?」

「……テムオリンの部下」

正確にはテムオリンなのだが、その理由はントウシトラにあるのだ

から、ある意味では間違っていない。その言葉を聞いてユーフィーはもう一度笑いをこぼすと、先ほどしまった「悠久」をまた取り出す。「うん、ユーリのことをその子が助けてくれた事実は変わらないもんね。それならユーリの心がそっちになびいちゃうのかもしれないよね。あたしは結局、守ろうとしても守ってる姿は見せられなかったわけだし……」

でも、だからと。なにやら恐ろしい雰囲気をもったユーフィーは笑った。

「お姉ちゃんにもユーリのために何かさせてね？」

「……なに、するつもり……？」

「ロウの殲滅……最低限、テムオリンは殺さないでダメだよね」

殺意の発露。そんなことをされてはこれから先に色々困ることになる。「悠久のユーフォリア」の物語がどんな形になるのかは知らないが、さすがにテムオリンの出番が存在しないなんてことはないだろうし。……この時点でテムオリンに対する感情が悪化の一路を辿り続けているために、アガスティアに行っても仲間になれそうにないという事実は置いておくとしても。

「姉さん、さすがに心配になるからやめて」

「大丈夫だよ、ユーリ。お姉ちゃんは強いんだもん。ユーリのためならロウの一つや二つ。簡単に潰してあげるよ？」

「姉さんが強いかどうかと心配するかどうかは話が別、別だから……！」

それに、俺のせいでユーフィーがロウに殴り込みをかけたとか、色々やばい案件にしか思えない。テムオリンのことだから、すでにユーフィーがとんでもないブラコンだと知っていてもおかしくはない話だし、そうなるかと何かしらの罫を張っている可能性だってある。

「今はまだ父さんたちに任せて、家で待つてよう？」

必死の説得。それが功を奏したのか、今にも飛び立とうとしていたユーフィーがこちらを振り向く。

「それは、ユーリも一緒に？」

「うん、一緒に」

そうじゃないと何をしでかすのかわからない。ちゃんと監視しないと。そんな思いを乗せての宣言に、けれどユーフィーは笑って。「そっかー。ユーリはお姉ちゃんと一緒にいたいんだー。うん……それならしょうがないなあ……」

甘えん坊な弟を持つと大変だなあなんていうユーフィーに、言葉の間違ったかと思うが、嬉しそうな顔をしているユーフィー相手にそれを告げると後が恐ろしい。……俺のことを思ってくれているわけだしそれでいいかと諦める。

「姉さん、ちゃんとミューも一緒だからね？」

「うー……二人つきりじゃダメ？」

「だめ」

あーとかうーとか唸りながらも、俺のことをチラチラ見て、引かないのだろうと理解したユーフィーがため息をついてしようがないなあなんてこぼす。

「いいよ、認めてあげる。……でも！ 代わりに絶対に逃げないですよ？ ユーリはこれからずうつとお姉ちゃんとも一緒だよ？」

「はいはい」

ぎゅうつと抱きしめてくるユーフィーを抱きしめ返し、ほら帰ろうと促しても離れてくれたのは十分後のことだった。

「パパとママには謝らないとダメかなあ……」

「ん？ どうした？」

「あだし、ユーリにお嫁さんができたって聞いて飛び出してきちゃったから心配かけちゃっただろうし……」

「あー」

それは確かに心配をかけているだろう。ちゃんと帰ったら謝らなと。ユーフィーが右腕、ミューギイが左腕に抱きついた状態で。けれどミューギイも姉弟同士の会話だとわかっているからか特に首を突っ込んでこない。

一日空いての帰還。その後はきつと、二百五十年以上もの間帰宅していなかった実家への帰宅となるのだろう。とりあえず、これから先の原作という意味合いではまだまだ不安はあるけれど、家出に関して

はこれでおしまい。……うん、多分父さんたちもこれから赤ちゃんと外に出してくれたりするはずだと信じてるから。これで終わりになるはずだと信じたい。

……そういう意味ではユーフィーが未だに危険なままであることから目はそらして。